

築瀬二子塚古墳・築瀬首塚古墳

築瀬二子塚古墳 築瀬首塚古墳

—市史編さん事業及び都市計画道路建設事業に
伴う範囲確認調査及び埋蔵文化財発掘調査報告書—

二〇〇三

群馬県安中市教育委員会

2003

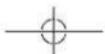
群馬県安中市教育委員会

築瀬二子塚古墳 築瀬首塚古墳

—市史編さん事業及び都市計画道路建設事業に
伴う範囲確認調査及び埋蔵文化財発掘調査報告書—

2003

群馬県安中市教育委員会



梁瀬二子塚古墳・首塚古墳全景（西から）



梁瀬二子塚古墳 石室内部

序

安中市は群馬県の西南部に位置し、妙義山の東麓に広がる緑豊かな出張都市です。市内を流れる碓氷川とその支流によって形成された河岸段丘上には、悠久の昔から私たちの祖先が残した遺跡が数多く存在するところでもあります。

築瀬二子塚古墳と首塚古墳は、築瀬地区に所在する前方後円墳と円墳です。市内には現在、400基以上の古墳が確認されており、県内でも古墳の多い地域として知られています。なかでも築瀬二子塚古墳は、古墳時代後期初頭の築造とされ、この地域一帯を支配する有力者の墓として考えられています。また、古墳の埋葬部分である石室が竪穴式から横穴式へと移る墳の前方後円墳とされ、県内でも学術的に重要な古墳の一つとして数えられています。この古墳は明治時代になって、はじめて石室が開口され、多数の陪葬品が出土したことを発端として、古くから著名な古墳として知られていました。その時の出土品については、小森谷家に大切に保管され、現在に伝えられています。また、首塚古墳は市指定史跡「築瀬八幡平の首塚」と同一のもので、古墳がその後、中世の塚として利用されたものです。

今回の発掘調査は、二つの古墳とその隣接地を古墳公園として保存整備することを目的に、平成7年度から平成9年度までの3カ年にわたりて市史編さん事業の一環で実施しました。平成12年度には都市計画道路建設事業に伴い築瀬二子塚古墳の東側周囲部分について調査を実施しました。

築瀬二子塚古墳では周堀と外周溝、墳丘に積み上げられた蓋石、整然と並ぶ埴輪列等、数々の発見がありました。首塚古墳では横穴式石室をもつ円墳であることを確認しました。さらに、首塚との関連性が強い中世板碑群も発見されました。

こうした調査によって得られたものは、保存整備や学術研究の発展に活用されるだけでなく、広く歴史を学ぶための教材として有効に活用していただければと考えるところであります。そして、市民一人一人の郷土への愛着心を養うものとして、後世へ語り継がれていかなければなりません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力・ご指導をいただきました地権者の皆様や多くの関係者の皆様、調査に従事していただいた多くの方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

安中市教育委員会

教育長 高橋重治

例　　言

- 1 本書は安中市史編さん事業に伴う篠瀬二子塚古墳・首塚古墳の発掘調査報告及び、市道磯部原市線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、篠瀬二子塚古墳の周塚にかかる部分の発掘調査報告である。調査の成果の一部は『安中市史』第4巻等で公表しているが、報告書の記述をもって正式な報告とする。なお、本報告は遺跡の特徴から古墳時代を中心としており、それ以外の遺構と遺物（縄文時代及び中世）については削除した。削除部分については一部『安中市史』第4巻に掲載されている。
- 2 篠瀬二子塚古墳は、安中市篠瀬字八幡平754・755・756-1・756 3・757・758 1・758-2・758-3・759-1・759-3・760-1・760-2・761-1・762-1・762-2・763-1・763-2・763-3、原市字鍛冶村1265-1・1265 2・1265 3・1266 1・1266 2・1295-2・1295 3・1296-2・1297 1に所在する。また、首塚古墳は篠瀬字八幡平769-1・769-2・769-4に所在する。遺跡の略称はC-11である。
- 3 本事業の市道部分については、道路建設に伴う国庫補助金・県費補助金を受けて実施した。それ以外の部分については市単独事業として実施した。
- 4 発掘調査及び遺物整理の期間は以下のとおりである。

市史第1次調査	平成7年9月22日～12月12日
墓地造成部分	平成8年7月17日～7月22日
市史第2次調査	平成8年8月19日～11月22日
市史第3次調査	平成9年5月16日～8月13日
市道用地部分	平成12年7月24日～8月30日
遺物整理	平成8年～平成12年の間断続的に実施。平成14～15年の間は委託。
- 5 発掘調査は安中市教育委員会主査（文化財保護主事・学芸員）大工原 豊が担当した。遺物整理については平成12年度までは大工原が担当し、安中市史編さん専門委員右島和夫（県埋蔵文化財調査事業団）、若狭 敏（群馬町かみつけの里博物館）が調査指導を行った。平成14年度は同主事井上慎也が担当した。
- 6 本書の編集は安中市教育委員会が行い、報告書作成については、御前橋文化財研究所へ委託して行った。また報告書作成には、志村 哲氏（藤岡市教育委員会）、加部二生氏（新里村教育委員会）、荒木勇次氏（渋川市教育委員会）にご協力をいただいた。執筆者名は執筆箇所の文末に記した。なお、出土した馬骨の鑑定は、宮崎重雄氏（元県立高校教諭）に依頼した。
- 7 墳丘の現況測量、基準杭の設置及び、調査区の一部・石室の測量については、柳大成測量に委託した。

- 8 遺構の地上写真の撮影は大工原が行ったが、石室内及び口絵用の遺物写真撮影は、写真家小川忠博に、航空写真撮影は仰首高館、鶴フジテクノに委託して実施した。
- 9 山上遺物のうち鉄製品については、群馬県工業試験場にX線写真を依頼し、実測図に反映している。
- 10 出土遺物と調査に関する資料は、すべて安中市教育委員会が保管している。
- 11 調査にあたって、地権者の小森谷とく氏、小森谷由夫氏、小森谷武氏、小森谷七五三吉氏、真下孝一氏、真下恒雄氏及びそのご家族の皆さま、地元区長の方々には、多大なるご協力をいたいたいた。
- 12 調査期間中、群馬県文化財保護審議委員、安中市文化財調査委員、安中市史編さん専門委員の方々をはじめ、多くの方々にご指導・ご助言をいただいた。
- 近藤義雄 大塚初重 松島英治 関 茂（以上県文化財審議委員）庄島伊作（故人）
- 森田秀策 阪本英一 淡路博和 中島啓治 修田 尚（以上安中市文化財調査委員）
- 右島和夫 若狭 敏 小野和之 関口功一（以上安中市史編さん専門委員）
- 秋元陽光 足立拓朗 荒木勇次 飯島義雄 飯田陽一 飯塚 誠 石井克己 石川正之助
- 磯貝基一 市川淳子 井上唯雄 井上 太 井上裕一 内山敏行 梅沢重昭 太田博之
- 大塚昌彦 大塚美恵子 鬼形光男 小田富士雄 折館伸二 加那二生 亀田修一 車崎正彦
- 合田方正 小林 修 小林達雄 小森哲也 斎藤幸男 板爪久純 坂本和俊 島田孝雄
- 清水信行 清水 豊 志村 哲 白石太一郎 杉山晋作 杉山秀宏 須藤 宏 孫 明助
- 田口一郎 武末純一 田村晃一 津金沢吉茂 徳江秀夫 外山政子 長井正欣 南雲芳昭
- 土生田純之 林 克彦 口高 健 平野進一 深澤教仁 福田貴之 前原 豊 三浦京子
- 三浦茂三郎 水田 稔 宮崎重雄 山崎 武 吉井秀夫 吉川裕司 李 尚律 織賀銳次郎
- 和田晴吾（順不同敬称略）
- 13 調査組織は以下のとおりである。
- 安中市教育委員会事務局
- 教 育 長 山中誠次（平成11年1月退任）
高橋重治
- 教 育 部 長 真下 仁（平成9年3月転出）
阿久津浩司（平成11年3月退職）
鈴木 勝
- 社 会 教 育 課 長 多胡泰宏（平成9年3月退職）
横田道夫（平成13年3月転出）
- 文 化 振 興 課 長 大野孝一

文化財係長 杉山 弘(平成9年3月転出)
佐藤輝男(平成13年3月転出)
赤見義昭

主査 萩原由子

主査(文化財保護主事・学芸員) 大工原 豊(調査・整理担当 平成13年度から企画管理係)

主任(文化財保護主事) 千田茂雄

主任 深町 真

主任 井上慎也(平成14年度から整理担当)

市史編さん係長 松本良彦(平成14年3月転出)
佐保信之

主査 藤巻正勝

発掘調査従事者 清水 正 佐藤佐由理 下マス江 須藤ダイ 多胡 静 多胡好江
田島元治 田島かづ子 田島せい子 田中利策 西村水子
萩原みつ江 平出紀子 丸岡民子 森田洋子 湯川光子 大手弓子
齊藤幸男 中山貴正 福田貴之 河野香織 牛丸岳彦 水田雅美
永井智教 岩丸牧紀

特別参加者 右島和夫 小野和之 若狭 勲(以上市史編さん専門委員)
吉川裕司(市史編さん協力員)

徳江秀夫 杉山秀宏(県埋蔵文化財調査事業団)

前原 豊(前橋市教育委員会)

飯塚 賢 石川正之助(共愛学園非常勤講師)

遺物整理従事者 右島和夫(市史編さん専門委員)
大塚美恵子 齊藤幸男 福田貴之(以上市史編さん協力員)
金井京子 下マス江 田中利策 萩原みつ江 古立真理子 湯川光子
高橋美穂子 八幡美津子 柳沢有里子 和田宏子 制田アカネ

凡　例

1 調査に際して、後円部墳頂及び前方部墳頂にコンクリート製の埋壙を設置した。回家座標は以下のとおりである。

後円部墳頂 (YF-1) X座標 34536.372 Y座標 -87199.136

前方部墳頂 (YF-2) X座標 34527.078 Y座標 -87231.321

2 各種実測図の縮尺は以下のとおりである。

現況実測図(付図) 1/500

調査区・トレンチ平面図・セクション図 1/160

石室実測図 1/80

埴　輪 1/4・1/6

須　恵　器 1/3

金　属　製　品 1/2・1/10

玉　　頬 1/1

石製模造品 1/1.5・1/2

3 土層説明の中での記号、省略は次のとおりである。

色調 < : より明るい方をさす (例 1 < 2 : 1 より 2 の方が明るい)

しまり・粘性 ◎ : あり、○ : ややあり、△ : あまりない、× : なし

混入物 ◎ : 大量、○ : 多量、△ : 少量、× : なし

4 各トレンチ図に関しては、古墳形状の理解をしやすくするため、隣接するトレンチができるだけ繋げて掲載した。セクション図は計測した地点が多少離れているものも連続した面として合成したが、平面図には各ポイントをそのまま載せている。

目 次

序
例 言
凡 例

I 調査に至る経過	1
II 調査の方法と経過	
1 調査の方法	4
2 調査の経過	6
III 遺跡の地理的・歴史的環境	
1 地理的環境	11
2 歴史的環境	11
3 築瀬二子塚古墳研究史	17
IV 層 序	20
V 遺 跡 各 説	
1 築瀬二子塚古墳	
(1) 遺 構	21
(2) 出土遺物	55
2 築瀬首塚古墳	
(1) 遺 構	99
(2) 出土遺物	102
VI 小森谷家所蔵資料	106
VII 成果と問題点	130

I 調査に至る経過

都市計画決定まで 築造二子塚古墳は1879年（明治12）に地権者小森谷柳造・子之吉兄弟により、石室が開口され、多数の副葬品が出たことを発端として、古くから著名な古墳として周知されていた。当時は、県内はもとより東京方面からも多数の見物人が到來したことが記録にも残されている。その時の出土品は、小森谷家により代々大切に保管され、現在に伝わっている。1936年に作成された『上毛古墳総覧』には、原市町13号墳として登録されている。

そして、第二次大戦後の1957年（昭和32）には、群馬大学尾崎喜左雄教授により墳丘と石室の実測と一部発掘調査が行われ、初期の横穴式石室をもつ前方後円墳であるという考古学的な評価が与えられた。そして、1964年（昭和39）に刊行された『安中市誌』には、調査概要と墳丘・石室の実測図が公表され、一般市民にも知られることになった。また、1968年（昭和43）には、明治大学大塚初重氏らにより、石室の再実測が行われるに至り、全国的にも研究者の間で注目されるようになっていった。1981年（昭和56）に刊行された『群馬県史』にも、安中市唯一の前方後円墳として紹介されている。

こうした重要な古墳であったが、この古墳は地権者の意向により、個人の所有地として管理されていて、文化財として指定されることとはなかった。そのため、一部の専門家を除く一般市民の間では本古墳の重要性が、次第に忘れられていったのである。そして、『安中市誌』・『群馬県史』とともに周囲を含む古墳全体の範囲が記載されていなかったことが、今回の調査の発端となる都市計画道路建設事業に繋がっていった。

都市計画道路の策定については、1991年（平成3）から路線についての検討を開始し、地元説明会を含む諸手続を行い、1993年（平成5）11月、安中市（都市計画課が主管）は安中市都市計画委員会からの答申に基づき、都市計画決定を行った。計画路線には、本古墳の周囲の一部が含まれていたが、決定に至るまでの間、都市計画委員からも地元住民からも古墳の一部を横切るとの認識はなかった。本古墳の文化財的価値についての認識が、この時点では相当薄れてしまっていたこと、文化財として未指定であったこと、『県史』・『市誌』にも墳丘のみで周囲の有無についての記載も図面も掲載されていなかったことなどの諸条件が重なり、古墳の一部が路線内に含まれることに気付かぬまま、都市計画決定されるという事態に至った。

なお、1991年（平成3年）9月にも、農道改良工事に伴う小規模な発掘調査が実施され、西側外周溝が検出されている。しかし、この調査は緊急対応であったことと諸般の事情により、精度が悪く本来必要な図面類が作成されていない。

第1次調査まで 都市計画決定の翌年、1994年（平成6）6月、工事主管課である都市施設課よ

I 調査に至る経過

り事業区域内の埋蔵文化財に関する照会が市教育委員会にあり、手続き上の不手際があったことが判明したのである。教育委員会では、同6月30日に緊急に文化財調査委員会を開催し、この問題について報告すると共に、対応策についての協議を行った。また、県教育委員会文化財保護課へも事情を説明し、対応策についての指導を受けることになった。

しかし、周堀については、存在が予想されるだけで実際に確認されていない状態であり、存在の有無と、存在しているとしたらどのような遺存状況にあるのかを、速やかに確認する必要があった。ちょうど、平成6年度より安中市史編纂事業が開始されていた。この事業においても本古墳についての実態を確認し、基礎資料を得る必要が生じていた。そこで、この二つの要求に対して、教育委員会としては、総合計画に事業として組み込み、3年計画で本古墳の試掘調査を実施することになった。

第2次調査まで 第1次調査の経過については、次章で述べることとし、その後の本古墳の対応方法について述べておく。第1次調査の結果、周堀が墳丘の周囲を全周していることが確認された。都市計画道路部分についても、周堀が存在しており、遺存状況も比較的良好であることが判明した。調査中の1995年（平成7年）10月には市文化財調査委員による視察が行われ、同11月には群馬県文化財審議委員による現地視察が行われ、路線変更することが望ましい旨の意見が出された。また、調査結果は、市文化財調査委員会でも報告され、同様の意見が相次いだ。そこで、教育委員会と関係部課では再三にわたり協議を行った。そこでは、路線変更が可能であるか等の対応方法について検討を行ったが、実際には困難であるとの結論に達した。

1996年（平成8年）7月には、中島博範市長を含めて市教育委員会と関係部課で今後の対応策について、最終的な協議を行った。その結果、都市計画道路の路線変更是できないが、深瀬二子塚古墳・首塚とその隣接地については、公有地化を進め、古墳公園として保存して行く基本方針が示された。その結果については、地元選出の市議会議員と区長及び、県文化財保護課へ基本方針の説明がなされた。

そして、こうした懸案事項を抱えた状態で、同年8月から墳丘・石室を対象とした学術的意味の強い第2次調査が開始された。

第3次調査まで 第2次調査では本古墳の主要部分が調査されたため、本古墳の学術的価値について、ある程度判断できる状態となった。そこで、同10月には、大塚初重明治大学教授（県文化財審議委員）を招聘し、現地にて中島市長がその重要性について、直接説明を受けた。また、同11月には文化庁から西田健彦文化財調査官が視察に来訪し、保存する方向性での対応が望ましいとの意見が出された。また、同12月に開催された市文化財調査委員会での意見も同様であった。1997年（平成9年）2月には、正式に市教育委員会として本古墳を保存してゆく方針が、建設部へ伝えられた。

I 調査に至る経過

保存の方向性が示されたため、第3次調査の目的は、第2次調査で完了しなかった部分と、保存・整備を行って行く上で必要な資料を得ることであった。まったく調査されていなかった南西に隣接する首塚古墳（市指定史跡篠瀬八幡の平首塚）は、周辺整備を行うためにも基礎的資料を得る必要があるので、第3次調査の対象とされた。

同年5月から8月にかけて、篠瀬二子塚古墳と首塚古墳を対象とした第3次調査が実施された。都市計画道路部分発掘調査まで 篠瀬二子塚古墳東側周囲を横切る都市計画道路（市道藤原市線）の部分については、路線変更・工法変更のいずれも困難であるとの結論が出されていた。そのため、建設部では第3次調査終了後に道路部分の用地買収と家屋移転を実施した。1999年（平成11）8月には、道路部分を対象とした試掘調査が実施された。

そして、2000年（平成12）4月になると、建設部（都市施設課）より、道路部分の発掘調査依頼が市教育委員会へ提出された。これを受けて、記録保存を前提とした発掘調査が実施されることになった。調査は7月から8月までの間実施された。

記録保存の措置が講じられたと言っても、古墳の一部が破壊されたことには変わりなく、文化財保護の観点からみれば必ずしも最善の対応策ではない。この都市計画道路事業は、安中市の文化財保護政策に大きな課題を残すことになったと言えよう。

（大工原 豊）

II 調査の方法と経過

1 調査の方法

試掘トレンチ・調査区の設定方法 築造子塚古墳の調査では、一般的に行われている古墳の範囲確認調査の方法を採用した。すなわち、前方後円墳の中心軸線に沿った試掘トレンチと、それに直交するトレンチ、後円部の中心から放射状に延びるトレンチなどである。また、石室入口前面、くびれ部、北東・南西周縁部分にはトレンチだけでは不十分なので、これを適宜拡張して調査区を設定した。さらに、予定した位置で遺構の範囲が確認できなかった場合には、適宜トレンチを延長して確認することにした。設定用基準杭は、測量業者に委託して実施した他、新里村教育委員会より借用した光波測距儀を用いて担当職員が直接行った。具体的には各次調査において、以下のとおりトレンチと調査区を設定している。

第1次調査	周縁部分	14カ所 (1~14トレンチ)
	外周溝部分	7カ所 (5B・6B・12B・13B・14B・15・16トレンチ)
墓地部分	外堤北東部分	C区
	外周溝北東部	17トレンチ
第2次調査	墳丘部分	9カ所 (1A・2A・4A・8A・11A・12A・14A・18A・19Aトレンチ)
	石室前面	A区
	くびれ部南	B区
	周縁北西部	E区
	外周溝北西部	15トレンチ延長
第3次調査	墳丘部分	5カ所 (3A・6A・9A・10A・20Aトレンチ)
	くびれ部北	D区
	周縁南西部	3カ所 (F区・22・23トレンチ)
	外周溝南西部	21トレンチ
	外周溝東部	14Bトレンチ延長
市道部分	北側査区	グリッド法 (4×4m)
	南側査区	グリッド法 (4×4m)

なお、市道部分での南北調査区の境界は、後円部墳頂の埋標から南東45°方向に延ばしたライン (18Aトレンチの延長線)としたが、便宜的なものである。グリッドラインは、古墳の東西中心

1 調査の方法

軸の方向をLラインとし、南北ラインは埋柵から32mの位置を7ラインとした。また、グリッドの呼称については、安中市の通常の方法に準拠している。

越瀬二子塚古墳の調査面積は、第1次調査：800m²、墓地部分：162m²、第2次調査：560m²、第3次調査：603m²、市道部分約1,600m²の合計3,725m²であった。

首塚古墳の調査では、墳頂から放射状に5本のトレンチ（1～5トレンチ）を設定した。また、南面には調査区（八区）を設定した。東側は納骨堂と築庭により墳丘が削平・改変されているので調査を断念した。なお、設定用基準杭は測量業者に委託して設置した。首塚古墳の調査面積は142m²であった。

なお、第2次調査の際には、当初図面上で予定していた調査区と実際に掘り下げた調査区が設定ミスによりずれてしまったため、一部第1次調査のトレンチと食い違いが生じている。

遺物の取り上げ方法 トレンチ・調査区とも基本的な遺物取り上げは、2×2mの区ごと・層位ごとに行なった。また、原位置をとどめている埴輪列については、出土状況写真を撮影し、遺物分布図（微細図）・エレベーション図を作成した後、取り上げて持ち帰った。

石室内の遺物については、出土位置が分かるものについては、遺物分布図を作成して番号を付けて取り上げた。また、それ以外についてもある程度位置が確認できるものについては、石室内を1×1mの区画に分割し、その区画ごとに取り上げた。さらに、排土をすべてを水洗選別（ウォーター・フローテーション）して微細遺物を取り上げた。機材については箕郷町教育委員会より借用した。

原位置をとどめていない葺石については、検出状況写真を撮影した後、取り上げた。なお、取り上げた葺石については、廃棄せずトレンチごとに集積して現地に残した。

写真記録の方法 葺石部分については、検出状況写真と葺石面の写真を撮影した。周堀・外周溝部分については、埴輪片が検出された状態と底面まで充填した状態、土層断面の写真を撮影した。埴輪列については、検出状態と樹立した埴輪の状態を撮影した。フィルムは6×4.5判と35mmのリバーサル・モノクロフィルムを用いた。

航空写真は、気球・ラジコンヘリを用いて、古墳の真上と斜め上空から写真撮影を行った。フィルムは6×6判、35mmのリバーサル・モノクロフィルムを用いた。

石室内については、プロカメラマン小川忠博氏が撮影した。また、石井克己氏（了持村教育委員会）によても、撮影が行われている。フィルムは4×5判・6×7判のリバーサルを用いた。

なお、これ以外に調査時のスナップ写真を適宜ネガカラーで撮影している。これは調査の進行状況を後で把握するのに役立った。

これらの記録は後世への保存と活用の利便性を考え、原版フィルムの他、デジタル化（フォトCD）したデータとして保管している。

II 調査の方法と経過

図面記録の方法 古墳及び周辺地形については、測量業者に委託して行った。特に墳丘部分については、10cm間隔の等高線図を実測により作成した。トレンチ、調査区については、平板測量を主体として行った。A・B区は測量業者が行い、それ以外は直営で行った。なお、基壇面の葺石部分については、光波測距儀による割付(50×50cm方眼)を基にした「写真実測」と、長焦点法を用いた立面図の写真実測を行った。周堀部分については平板測量の他、航空ビデオ利用の写真測量(8トレ・F区・都市計画道路部分)などの方法を用いた。土層断面図については、大部分は通常の方法で行ったが、周堀部分の一部はビニール転写法を用いた。

埴輪列の微細図については、大部分は平板測量を行ったが、D区はビニール転写法を用いた。なお、石室については、すべて測量業者が割付法で実測した。

埋め戻しの方法 埋め戻しに際しては、土糞・断熱材・寒冷紗等により葺石面及び周囲底面等を被覆して、調査部分が識別できるよう埋め戻した。

遺物整理の方法 今回の調査は、市史編纂関連の調査であることから、遺物整理はかなり変則的なものとなった。したがって、これまでに本市教育委員会で行ってきた合理化された整理作業とは、全く異なった方式で行われ、個々の作業についての統一はとれていない。そのため、個々の作業方法については把握しきれていないので記載は割愛する。

遺構図・写真・台帳の整理と遺物の水洗・注記・接合といった基礎的な整理作業については、担当職員のもと文化財係が直営で実施した。

その後の作業については、市史編さん専門委員右島和夫氏の指導のもと、市史編さん協力員及び作業員により、「安中市史 原始古代中世資料編」に掲載するために抽出された遺構図と遺物実測図のみについて、平成11~12年度にかけて実施された。

発掘調査の報告書作成にあたっては、遺構図の図面修正を行い図版を作成した。また、出土遺物については、市史で行った実測図の修正・取り直しのほか追加実測をしてトレースした。特に、鉄製品についてはX線写真を基に図化している。そのため、市史掲載の遺構図・遺物図面とは異なる点を注意されたい。なお、小森谷家資料は発掘調査資料と区分するために別扱いとした。これらの経過を経て報告書作成までの作業については、衛前橋文化財研究所へ委託して実施した。

2 調査の経過

市史第1次調査 平成7年9月22日~12月12日

この調査は、古墳の範囲を確認することが最大の目的であったため、周堀推定部分から基壇面にかけての部分に試掘トレンチを設定して、範囲確認作業を行った。

2 調査の経過

バックホーによる抜根・表土掘削作業に先立ち、まず最初に行ったのは、墳丘部分の竹林の伐採・撤去作業であった。竹は伸び放題の状態で密生し、しかも伐採した竹材がその間に数メートルの高さに積み上げられていた。そのため、墳丘内トレンチを設定することも地形測量を行うことも困難な状態にあった。調査に支障のない程度にまで竹を間引き、撤去して焼却した。こうした作業は、調査初日から調査終了までの全期間に及んだ。

第1次調査では、家屋の存在する南東部分を除き、墳丘をほぼ全周するかたちでトレンチを設定した。また、周囲だけでなく、外堤・外周溝も確認する必要があるため、周囲確認用トレンチの外側7カ所にもトレンチ（5B～8B、12B～14B）を設定した。今後の調査の基準にするため、測量業者に委託してコンクリート製の基準杭（埋標）を後内部と前方部の墳頂に各1カ所設置し、国家座標に取り付けた。これをもとに光波測距儀を用いて、直営でトレンチの設定を行った。

バックホーによるトレンチ掘削は、9月28日から10月16日までの間行った。掘削は原則として浅間B軽石層（II b層）の上面まで行った。外側のトレンチでは、II b層が存在しないので、IV層上面まで掘り下げ、その後、人力により確認作業を行った。

トレンチの調査は、人力による精査・写真撮影・図面作成の順で調査を進めた。作業は10月2日から12月6日までの間に実施した。11月18日には、気球による写真撮影を実施した。

調査期間中の、10月22日(日)には、教育委員会主催の文化財巡りで、約20人が見学した。また、11月3日・4日には現地説明会を実施し、延べ250人が見学に訪れた。これ以外に、考古学・埋蔵文化財関係者が随時見学に訪れた。

埋め戻し作業は、調査の終了したトレンチから遺構面を土壠・断熱材等で保護してから、埋め戻した。この作業は、11月22日から25日までの間と、12月5日から12月6日までの間行った。

墓地造成部分の調査 平成8年7月17日～7月22日

都市計画道路線内の墓地を移転するための緊急発掘調査として占墳の北東端部分162m²を対象として実施した。調査範囲はほぼ外堤部分に相当した。バックホーにより浅い表土層を除去するとIV層となった。この面で遺構確認作業を行った。調査区の南西隅で周囲の立ち上がり部分が確認された。また、北東隅で外周溝の一部が確認された。周囲部分は精査を行った後、写真撮影、図面作成を行い、7月19日に調査を終了した。

その後、埋め戻し作業を行った。埋め戻しにあたっては、遺構面を保護するためと、墓石が沈まないようにするため、砂・採石・ぐり石を充填した。

なお、この調査の際に調査区の北側にトレンチを設定し、外周溝を確認した。その結果、周囲の範囲が当初推定していたよりも北側まで及んでいることが確認された。

II 調査の方法と経過

市史第2次調査 平成8年8月19日～11月22日

この調査では、墳丘部分の遺存状態を確認、前方部北西突出部分の確認、石室内部の清掃調査、東側外周溝の確認することを目的とした。875m²を予定していたが、見学者多数につき調査が進捗せず、実際には560m²を調査したのみであった。

前年の調査の際に、大量の竹を伐採・撤去していたので、今次の調査では竹を伐採する作業は最初の4日間のみで、すぐに調査区の設定作業を開始することができた。基準杭設置は調査業者により8月21日に実施されたが、業者のミスにより予定部分とは数十cmずれた位置にトレーナー・調査区が設定されてしまった。途中で気付き杭を打ち直しさせたが、その前にバックホーで表土掘削されてしまっていたので、それまでの状態で調査は続行することになってしまった。

バックホーによる竹・桑の根除去及び表土掘削は、8月22日～31日の間実施した。石室の天井石がすでに割れているため、安全性を考慮して、ミニバックホーにより作業は行われた。

墳丘・周堀部分の調査は、前回同様担当職員の指導のもと一般作業員により遺構精査が行われ、写真撮影・平面図・土層断面図を順次作成していく。作業は8月22日～10月17日まで実施した。なお、11月上旬に担当者（大工原）が負傷したため、当初予定していた前方部の調査は、翌年へ延期することになった。

また、石室内の清掃調査の作業は、専門的知識を有する人間が行う必要があることから、市史編さん専門委員右島和夫氏、若狭徹氏の指導のもと、主として考古学専攻の大学生・大学院生が作業に従事し、市教委職員（文化財係・市史編さん係）、県内埋蔵文化財保護行政関係者が特別に参加した。9月14日～21日までの間実施された。これと併行して石室内覆土のフローテーション作業も実施した。実際の作業としては、玄室内の埋土と敷き詰められていた川原石をすべて搬出した。また、羨道入口部分に群馬大学の調査時のサブトレーンチが掘られていたので、これを再び振り下げ、土層堆積状態を確認し、図面を作成した。また、奥壁部の一部、玄室中央部（櫛乱部分）については、サブトレーンチを設定して、下部の土層堆積状態等を確認し、図面を作成した。

石室内の測量は、測量業者に委託して9月24日～10月25日までの間断続的に実施した。測量終了後は、玄室内から搬出した川原石は赤色塗装されているため、すべて水洗した後、再び玄室内へ戻し、敷き詰めた。また、石室内的写真撮影については、すべての調査終了後、11月末にプロカメラマンに委託して撮影を実施した。

調査期間中に新聞に大きく掲載されたこともあり、多数の見学者が訪れた。11月2～4日には現地説明会を開催したが、約400人の見学者が訪れた。10月17日には、群馬県文化財審議委員大塚初重氏を招請し、中島市長が直接調査の指導を受けた。ほかに文化庁調査官西山健彦氏の視察、PTAをはじめさまざまな団体による見学があった。さらに、国内外からも古墳研究者の見学があった。多くの見学者の来跡は、本古墳に対する関心の高さを示すものであるが、そのために調査

2 調査の経過

の進歩にも影響を与えた。

なお、第2次調査までの概要是、「季刊考古学」第59号（1997年5月）に調査速報として発表した。また、日本考古学協会第63回総会（1997年5月25日）においても、市火編纂事業の成果として「碓氷川流域における横穴式石室の受容」と題した研究が、右島・小野・岩狹・大工原により発表された。

市史第3次調査 平成9年5月16日～8月13日

篠瀬二子塚古墳については、これまでの調査で残った前方部に設定したトレンチと、北くびれ部の調査区及び周囲南西部、東外周溝を対象として実施した。前方部、くびれ部については葺石・埴輪列の遺存状況の確認、周囲南西部については前方部から周囲への張出部の状態を確認、東外周溝については、第1次調査では確認できなかったため、さらに東までトレンチを延長して存在の有無を確認することを目的とした。

首塚古墳については、かつて検出された頭骨の埋葬状態の確認と、古墳本体の範囲と遺存状態の確認を目的して実施した。

二子塚古墳では、前年度調査時に表土は除去されていたため、墳丘の竹伐採・撤去作業は3日ほどで終了し、その後すぐに北くびれ部（D区）については葺石面検出、埴輪列検出の精査を実施した。検出後は写真撮影、平面図・土層断面図作成等の作業を行った。また、前方部のトレンチについても同様の作業を実施した。墳丘の調査は5月20日から7月22日までの間断続的に行なった。

また、南西部周囲部分（F区・22・23トレンチ）については、6月23日から調査を開始した。調査の手順としては、バックホーによる桑抜根、表土掘削、遺構確認・精査、写真撮影、平面図・土層断面図作成等の順に作業を行った。周囲への張出部は当初設定した調査区（F区）では、範囲確認が不十分であったため、さらに東側へ22・23トレンチを延長し、張出部の形状を確認することになった。7月24・25日には、気球による写真撮影を実施し、これを航空ビデオを利用して平面図を作成を行なった。8月上旬には葺石は土蔵で覆い、8月6日～9日にバックホーにより埋め戻し作業を行い、すべての調査を終了した。

また、東外周溝の確認は、6月18日に実施したが、外周溝は検出することができなかった。そのため、すでに掘り下げられている現遺部分に存在していたものと判断し、作業を終了した。

また、調査と併行して5月29日から測量業者に委託し、篠瀬二子塚古墳と首塚古墳を含む範囲全体の地形測量を実施し、現況平面図を作成した。

首塚古墳については、6月24日から作業を開始した。バックホーによる桑抜根・表土掘削は、7月1日まで実施した。墳丘前面に設定した調査区（A区）では、予想していない中世の板碑群が検出された。そのため、古墳構築時の面まで掘り下げず、中世の面での精査・写真撮影・

II 調査の方法と経過

各種図面作成の作業を行った。狭道部分と調査区の一部を、古墳構築時の面まで掘り下げる、古墳本体の調査を行った。なお、首塚の由来となった頭骨の集積遺構と関連する遺構・遺物は、調査した部分では全く検出されず、現在窓が建てられている古墳東側の部分に限定されることが判明した。調査は断続的に8月11日までの間実施した。そして、12日には埋め戻し作業を行った。途中、担当者が2週間ほど病気休暇となつたため、調査が遅滞したが、当初予定していた部分についてでは、すべて終了させることができた。

また、墳丘北側に設定したトレンチからは、馬骨が検出されたため、7月26日には宮崎重雄氏（当時県立大間々高校教諭）を招聘し、鑑定を行っていただいた。その結果、土層堆積状態から近現代の馬で、馬骨の特徴から生後半年ほどの子馬であることが判明した。

板碑群については、珍しいものであることから近藤義雄氏（県文化財審議委員）、津金沢吉茂氏（県文化財保護課）が来歴し、助言を得た。また、7月9日には市文化財調査委員による視察が行われた。一般市民を対象とした現地説明会は、7月19日～21日の3日間実施し、延べ300人が見学に訪れた。

市道部分の調査 平成12年7月24日～8月30日

葉瀬二子塚古墳の後円部東側の周堀部分について、記録保存の措置を講ずるための調査である。したがって、通常の発掘調査として実施した。7月26日～31日まで、バックホーにより表土を掘削し、ダンプカーにより堆土を搬出した。8月1・2日には測量業者によってグリッド杭を設置した。周堀底面の精査は、浅間B絆石層の直上まで、バックホーで除去し、それより下部の堆積層を人力により精査した。

今回の調査では外周溝、外堤、周堀を面的に広げることができたので、古墳周囲の状況については、これまでのトレンチ調査よりも明瞭に把握することができた。また、南東部分には周堀のない部分が存在しており、張出部が設けられていたことが確認された。

遺構精査は、8月2日～23日までの間実施した。また、写真撮影、各種図面作成は随時実施し、8月21日には、業者に委託してラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。なお、平面図は航空写真を利用した方法で行い、セクション図・断面図は、通常の方法と、ビニールを用いた土嚢転写法により実施した。調査終了後、8月30日までには、調査機材の搬出と簡単に埋め戻しを行い、すべての作業を終了した。

調査期間中の8月3日には中央公民館主催の親子体験発掘を実施した。また、8月11日には市立第1中学校生徒が体験発掘を行った。

調査終了後、2001年（平成13）冬には、二子塚古墳の東に隣接する真下神社の石垣撤去に伴う立ち会い調査により、この部分には周堀が及んでいないことを確認した。

（大工原 豊）

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する（第2図）。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には河岸段丘が発達し、下位段丘（礫部地区）、中位段丘（原市・安中地区）、上位段丘（東横野地区）が存在する。また、市の北部や南東部等には丘陵（秋間丘陵、岩野谷丘陵・松井田丘陵）が分布する。

市北部に広がる秋間丘陵には第三紀層中の茶臼山治結凝灰岩（秋間石）が丘頂付近を東西に連続して分布し、古墳時代の石室構築材として用いられている。この石材は築瀬二子塚古墳や高崎市の観音塚古墳等の横穴式石室に用いられている。碓氷川流域の段丘疊層には古墳の葺石に用いられた砾（安山岩）が分布する。

築瀬二子塚古墳及び首塚古墳は碓氷川左岸の中位段丘（原市・安中台地）縁辺部に位置する。古墳付近の標高は約215mを測る。本墳の南約200mのところに中位段丘に伴う段丘崖があり、南へ約400mの地に現在の碓氷川の流路がある。また、古墳の北側には浅い埋没谷が存在し、南側は緩斜面となる。本古墳の南西には隣接して首塚古墳が存在する。

2 歴史的環境

築瀬二子塚古墳及び首塚古墳の周辺の遺跡では、築瀬二子塚古墳の南東に隣接して昭和29年に発見された绳文時代後期の築瀬炉跡が存在する。市道建設に伴う試掘調査においても同時期の遺構及び遺物を検出しており、集落の存在が考えられる。また、首塚古墳の西方には中世の八幡平陣城が存在する。

ここでは築瀬二子塚古墳及び首塚古墳に関連する古墳時代の遺跡について概観する。

碓氷川と九十九川に挟まれた原市・安中台地には碓氷川左岸縁辺部で郷原古墳群（郷原地区）、東悪途古墳群（悪途東・天王西地区）等の群集墳や古墳が点在する。旧安中町にも多数の古墳が分布し、古墳群が形成されている。この台地の中央には清水遺跡（集落跡）、九十九川右岸沿いで嶺・下原遺跡（後期集落）、杉名薬師遺跡（集落跡）、高橋遺跡（集落跡・古墳）等が存在する。九十九川左岸の低地には築瀬二子塚古墳との関連性がある後闇3号墳、下増田上田中遺跡1号墳（松井田町国衙）や山寺古墳群等が存在する。碓氷川右岸の下位段丘には中期古墳が発見された

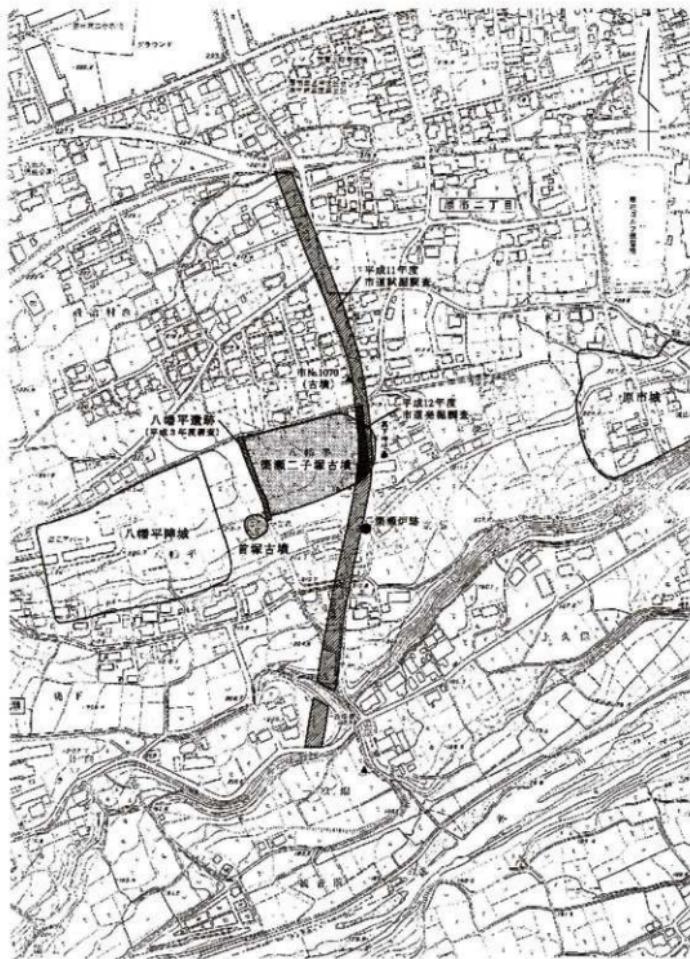
III 遺跡の地理的・歴史的環境

塩ノ久保遺跡をはじめとする畠部古墳群が存在し、西上畠部の上位段丘縁辺部に中期古墳とされる旧畠部町2号墳及び長谷津向山古墳が存在する。大王寺地区遺跡群（新守地区遺跡群等）では古墳時代中期～後期の集落跡、田中田・久保田遺跡では中期の方形周溝墓状の遺構が検出されている。上位段丘にある中野谷地区遺跡群では中野谷古墳群が存在する。下宿東遺跡（前期）、藏畠遺跡（前期）、天神原遺跡（中期）、中島遺跡（前期・後期）、原遺跡（中・後期）、北東・堤下遺跡（後期）、荒神平・吹上遺跡（中・後期）、上ノ久保遺跡（後期）、諫訪ノ木遺跡（中・後期）、下原・賽神遺跡（中・後期）、堀谷戸遺跡で集落が確認されているが、拠点的な大規模集落は少ない。岩野谷丘陵では多数の古墳が分布する。大形円墳である経塚古墳、岩野谷57号墳をはじめとする市内でも古い古墳が分布する地域である。秋間丘陵には後期以降の古墳が多数分布し、終末期古墳の特徴である截石切組積の横穴式石室をもつ古墳やこの地域では少ない横穴墓、小型石棺が存在する。

安中市に分布する古墳の時空は碓氷川右岸の岩野谷丘陵から横野台地にかけて市内でも古い中期古墳及び終末期までの古墳が多数分布し、地域ごとに古墳群が形成されている。原市・安中台地及び九十九川沿岸の低地部では篠瀬二子塚古墳及び後閣3号墳をはじめとする後期初頭の古墳が出現し、終末期までの古墳が分布する。秋間丘陵には終末期に特徴をもつ古墳が多数分布する。

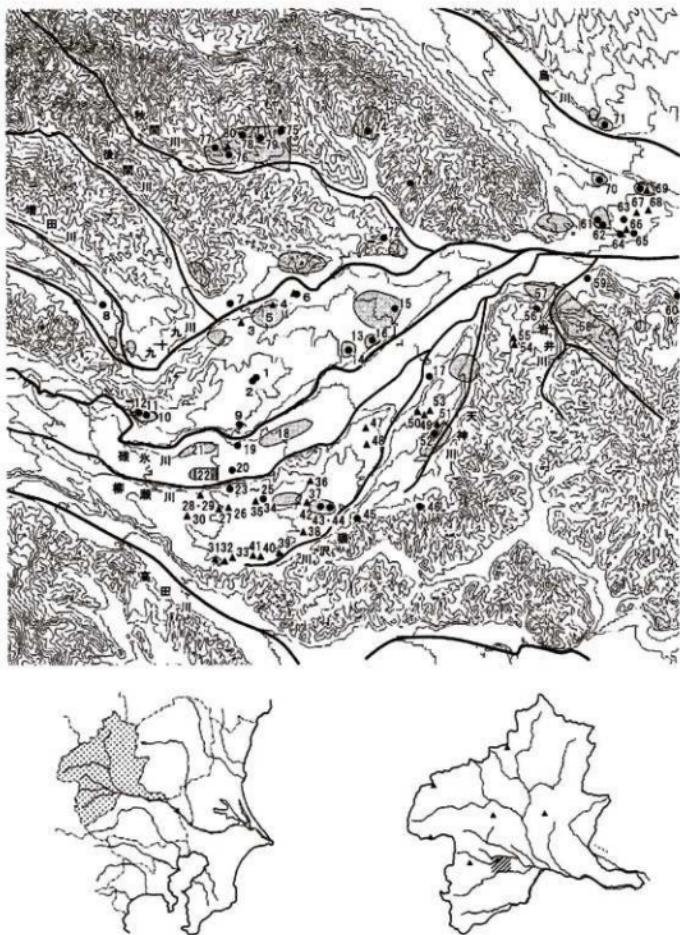
（井上慎也）

2 歷史的環境



第1図 建設位置図

III 遺跡の地理的・歴史的環境



第2図 本遺跡と周辺関連遺跡（「カシ米尔」（2002）を一部改変して作成）

2 歴史的環境

番号	遺跡名	遺跡の種類	立地	古 墳 前 中 後 終				考	
				古	墳	前	中	後	
1	尾張二子塚古墳	古 墳	中位段丘	○					本報告、原市13号墳
2	百鬼占塚	古 墳	中位段丘		○				本報告、原市12号墳
3	猿・下原	集 落	中位段丘	○		○			
4	杉名美藤	集 落	中位段丘	○	○	○	○		
5	杉名古墳群	古 墳	中位段丘		○				
6	高橋	集落・古墳	河川低地	○	○	○			辨集落
7	後衛3号墳	古 墳	河川低地		○				円墳 (T字型横穴式石室)
8	下郷田上田中	古 墳	下位段丘		○				円墳 (T字型横穴式石室)
9	東下丸山古墳	古 墳	中位段丘						円墳
10	鶴原古墳群	古 墳	中位段丘		○				
11	原市1号墳	古 墳	中位段丘		○				円墳
12	原市4号墳	古 墳	中位段丘		○				円墳
13	東郷遺古墳群	古 墳	中位段丘	○	○				
14	忍邊東K-1号墳	古 墳	中位段丘			○			円墳、忍邊東古墳群
15	安中4号墳	古 墳	中位段丘			○			福荷神社古墳 (円墳)
16	安中6号墳	古 墳	中位段丘		○				円墳、鶴人畠古墳群
17	鋸野古墳	古 墳	下位段丘		○				鐵部12号墳、円墳
18	鐵部小塚群	古 墳	下位段丘		○				
19	佐久保K-1号墳	古 墳	下位段丘		○				円墳
20	田中田・久保田	古 墳?	下位段丘		○				方形周溝遺構
21	鶴原古墳群	古 墳	下位段丘		○				17号墳 (前方後円墳)
22	大寺地区遺跡群	集 落	下位段丘	○	○	○			新寺地区遺跡群、松田山土塁跡地遺跡群
23	礎部2号墳	古 墳	上位段丘		○				円墳 (第六式石室)
24	鐵部3号墳	古 墳	上位段丘						前方後円墳 (堅穴式石室)
25	長谷津向山古墳	古 墳	上位段丘		○				円墳 (堅穴式石室、石製模造品)
26	中島	集 落	上位段丘	○	○				
27	妙押原	集 落	上位段丘		○				
28	中野谷塚	集 落	上位段丘	○	○				鍛冶工房、炭焼土坑
29	上北原	集 落	上位段丘	○	○				
30	人見東原	集 落	上位段丘	○	○				
31	人見大谷津遺跡	集 落	上位段丘	○					
32	下高田遺跡群	集 落	上位段丘		○	○			
33	向原	集 落	上位段丘		○				
34	中野谷松原	古 墳	上位段丘			○			円墳上基
35	天神原	集 落	上位段丘	○					
36	北東・城下	集 落	上位段丘		○	○			
37	下郷田	集 落	上位段丘			○			鍛冶工房
38	中原	集 落	上位段丘	○					
39	下宿東	集 落	上位段丘	○					
40	細市	集 落	上位段丘	○	○	○			

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

III 遺跡の地理的・歴史的環境

番号	遺跡名	遺跡の種類	立地	古墳				備考
				前	中	後	終	
41	和久田	東落	上位段丘	○				
42	平塚	古墳	上位段丘					円墳2基
43	落合II	古墳	上位段丘					△ 円墳1基
44	落合	古墳・池井	上位段丘					△ 円墳1基、落井遺構
45	注連引原II遺跡	古墳	上位段丘	○				円墳(円形周溝遺構)2基
46	鷦鷯古墳	古墳	上位段丘	○				東横野12号墳(円墳、竪穴式石室、石質模造品)
47	荒神平・次上	集落	ト位段丘	○	○	○		
48	上ノ久保	集落	上位段丘		○			
49	荒畠	集落	上位段丘	○	○			終末段階・滑石製模造品製作・調
50	御筋ノ木	集落	上位段丘	○	○	○		
51	日立後原	古墳	上位段丘	○				方形周溝墓穴遺構の一部
52	野毛良	集落	上位段丘	*	○	○		
53	下原・豐津	集落	上位段丘	○	○	○		
54	越谷戸	集落	丘陵	○	○			
55	西殿	集落	丘陵					
56	野間大木原古墳	古墳	丘陵	○				円墳
57	岩井内ノ平古墳群	古墳	丘陵	○				
58	大谷古墳群	古墳	丘陵		○			
59	岩野265号墳	古墳	丘陵	○				大形円墳(竪穴式石室、石質模造品)
60	少林山台	古墳	丘陵	○	○			12号墳(円墳、初期横穴式石室)、群集墳
61	房風井	古墳	火酔渓台地					円墳3基、板鼻古墳群
62	立の原(高木地)古墳	古墳	火酔渓台地	○				板鼻1号墳(円墳、竪穴式石室)
63	般音原古墳	古墳	火酔渓台地		○			前方後円墳(横穴式石室)
64	平塚古墳	古墳	火酔渓台地		○			前方後円墳(舟形石核)
65	八幡二子塚古墳	古墳	火酔渓台地		○			前方後円墳(折原塚穴式石室)
66	八幡	集落・古墳	火酔渓台地	○	○	○		八幡古墳群
67	八幡中瀬	集落	火酔渓台地	○	○	○		
68	七五三引	集落	火酔渓台地		○			
69	劍崎長春西	集落・古墳	火酔渓台地	○	○			劍崎長春西古墳(帆立貝式古墳)、横石塀、群集墳
70	岩田	古墳	火酔渓台地	○	○			岩田大塚古墳(円墳、初期横穴式石室)、群集墳
71	本郷の塙古墳群	古墳	火酔渓台地		○			E1号墳(帆立貝式古墳、初期横穴式石室)、群集墳
72	めおと塙古墳	古墳	丘陵					円墳(載石切妻横穴式石室)
73	43水谷洋模穴巣	塙	丘陵	○	○			
74	万葉原古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
75	半籠山古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
76	穂貝塙古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
77	二軒茶屋古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
78	北原古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
79	北川古墳	古墳	丘陵	○	○			円墳(載石切妻横穴式石室)
80	下受地・十二	集落	丘陵	○				

◎大規模古墳、古墳○小規模古墳△遺構有り(土堤・溝等) *蓋物のみ

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

3 築瀬二子塚古墳研究史

築瀬二子塚古墳の石室開口時期については、文献類を総合すると、1879（明治12）年3月4日と考えられる。明治天皇北陸巡幸に合わせて、県内各地の古跡調査が行われ、官吏によって暗に古墳の発掘を促した嫌いがある。前橋大室古墳群等をはじめとして明治11～12年頃に古墳の発掘が集中するのはこのためと考えられる。

築瀬二子塚古墳の発掘状況については地元に残る『維新實錄尚翁茶話』に図解入りで著わされている。明治11年秋に県官岡部某が碓氷郡第廿一大区区長萩原茂十郎の案内で地主である小森谷柳造宅を訪れ、古墳についての尋問が行われ、石室位置について教示して行った。側造は古墳の中段に6尺ぐらゐの間隔で埴輪列のあること確認しており、翌年の春に隣家の小森谷予之吉の賛同を得て石室の発掘に着手した。鉛で石積みを握り込み、数時間かかって握り当てたようである。石室は入口から約30尺入った部分で一段下がり、間口9尺、奥行15尺、高さ8尺の規模で天井石は4枚で構成されていたという。壁面は赤彩され、床面中央部には小石（玉石か？）と石灰（漆喰か？）らしきものが交じっているのが確認されている。白井光太郎「上野國唯水郡原市在築瀬村古墳考」で掲載されているスケッチ図では石室入口部分は両側壁とともに比較的大型の河原石3石をもって渡門を構築しており、中に入るにつれて小ぶりの石になっていることが描かれている。1957年の群馬大学による調査の写真が『昭和』に掲載されているが、石室入口部分の基底部は小口積にされた河原石が6段残存していた。その側面部から真石列がはじまり、面はあつてることから、この上面に大降りの石を小口積にして渡門部を構成していたと想定される。白井の聞き取り調査によれば、「側壁はいずれも丸い河原石で、床面は小型なものを用いていた。石室の奥室内に須恵器類は整然と並べてあり、勾玉類も奥室の床下から確認された」とされる。この話が事実とすると、それ以前に多少の盗掘はあったにしても、大方の遺物はこの際に並んでいたらしい。3月5日になって床面の玉石を外に出し、玉類と古器物（須恵器類）を回収した。これらの遺物は、その後、1881（明治14）年に近くに住む篆刻家、山本有所が、『靈根志』の描写法で図を描き『尚古帳』として現在も遺物類と一緒に小森谷家に保存されている。

白井光太郎博士は文久3年6月2日生まれである。坪井正五郎博士も同年生まれの同級生であったことから二人は以後長く親交があった。坪井が客死したときの追悼講演を白井が行っていることからも二人の親密度は何える。明治8年に東京英語学校に入り予備門を経て明治19年に東京帝國大学を卒業後、東京農林学校へ務めた。職場の関係で以後は植物学を専攻することになり、人頬学はこのときに足を洗ったと自ら述べている。初期の東京人類学会や史跡名勝天然記念物保存協会等の設立に尽力しており、交友関係はひろく坪井のほか火野延太郎、モース、ペルツといったさまざまな分野の研究者と接触している。築瀬二子塚の調査については、後に白井がみづから

III 遺跡の地理的・歴史的環境

回顧しているとおり、東京帝国大学の図書館で、アーネスト・サトウ著の「上野地域の古墳群」を読んで衝撃を受けたという。図説の詳細な点と、ガラス玉等の遺物を科学的な分析を試みたり、日本の古典をうまく引用して結論を導き出す鮮やかな手法に感動したらしい。サトウの論文で「両野」（上野・下野）の歴史的重要性に気づき、自身の下野宇都宮周辺の調査や、篠瀬二子塚の調査、また坪井による足利古墳群の調査などに影響を及ぼしているようである。

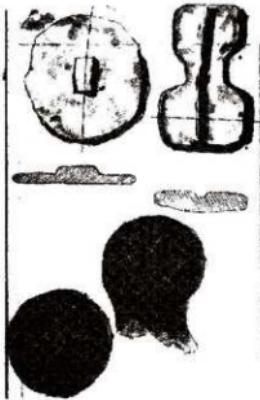
東京でこれらの報を聞いた東京帝大の白井光太郎は沢井廉と共に明治15年8月に実際に現地調査に赴き、先の報文を発表している。

遺物についても『尚古帳』とは別で新たに描かれていることが確認できる。遺物数量についても別記しており、勾玉10、管玉19、ガラス製小玉青色27、黄色7、紫色4、コハク玉2、兵庫鏡？4と現存するものは殆ど記述されていた。

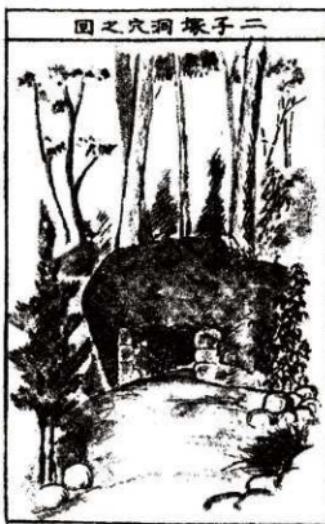
遺物の解説として玉類、石製品、甲冑類、土器、ガラス玉について考察している。この中で、石製品については材質が悪く破損剥離していることを指摘している。

おそらく、「維新實錄尚翁茶話」において明治40年に坪井正五郎が高崎に来た際に篠瀬出土品を鑑定を求めたところ、坪井はすでに岡面はもっていたが、実物を見るのははじめてと述べている。その岡面は白井の手にかかるものであることは間違いない。

(加部二生)



第3図 篠瀬二子塚古墳出土遺物実測図
(白井光太郎 原著「上野國鹿水郡原市在篠瀬村古墳考」より)

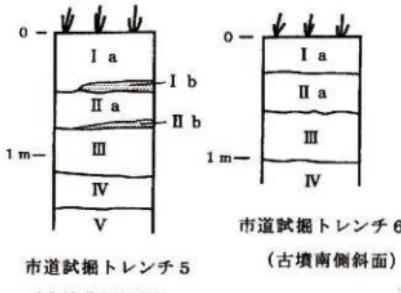


第4図 (明治11年篠瀬二子塚古墳発掘調査状況図 (「新實錄尚翁茶話」より)
(明治15年二子塚洞穴之図 (上野園施水郡原西在篠瀬村古墳考」より)

篠塚二子塚古墳及び首塚古墳は遺構の性格上、人為的削平及び堆積、擾乱等により自然堆積の部分は少ないため、基本層序が明瞭に観察できる部分は限られている。したがって、古墳が立地する周辺地域の状況を参考に基本層序を復元すると第5図及び第3表のとおりである。

鍵層となる降下テフラは、1783年(天明3年)の浅間A絆石層(As-A)と1108年(天仁元年)の浅間B絆石層(As-B)である。浅間A絆石層(I a層)は耕作による擾乱によって土壤化し、表土層(I a層)を形成している。墳丘の大部分はI a層で覆われている。一部の遺構(周溝等)覆土や窪地では、浅間B絆石層(II b層)が土壤化した旧表土層(II a層)及びII b層が堆積しているが、古墳周辺の平坦な場所ではI a層と混在してしまってほとんど認められない。地山を掘削した周溝等の底部ではV層の下に浅間黄色絆石層(VI層)が堆積することを確認した。市道建設に伴う路線部分の試掘調査では、国道18号線と篠塚二子塚古墳との間に東西に延びる浅い埋没谷が存在し、IV層付近の層理面で湧水を確認した。また、古墳南側緩斜面の段丘崖では自然堆積層は薄く一部疊層を確認した。

(井上慎也)



第5図 基本層序柱状図

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					As-A	As-B	As-YP	
I a層	黒褐色土層	△	△	○				
I b層	灰白色絆石層	I a < I b	×	×	○			As-A 絆層
II a層	黒色土層	I b > II a	△	△		○		
II b層	反褐色絆石層	II a < II b	×	×	○			As-B 絆層
III 層	黒褐色土層	II b > III	△	○				古墳～平安酒樽土
IV 層	暗褐色土層	III < IV	○	○			*	上部はIV a層。鐵文包含層
V 層	黄褐色粘質土層	IV < V	○	○			○	
(VI層)	黄色絆石層	V < VI	×	×				As-YP 純層

第3表 基本層序十層説明

V 遺跡各説

1 築瀬二子塚古墳

(1) 遺構

石室（第5・6図）

石室の調査に当たり、石室入口の東西の横面は、明治時代の開口時にはずされ、その後、大谷石製の石柱を組み込み積み換えたものと判断される。今回の調査では、その下部のみを破砕し、側面図を作成した。狭道に存在している閉塞石の一部は、撤去せざるまま残した。また、昭和32年に群馬大学尾崎喜左雄氏により調査された石室入口に設定したサブトレンチを再度掘り下げ、盛り土の状態を確認するためにセクション図を作成した。玄室中央には、明治時代の開口時に掘ったとみられる穴が存在していたので、それを利用してセクション図を作成した。

石室の成果については、「安中市史」第4巻の中に詳細に紹介されているため、ここでは概略を記するにとどめたい。

石室は全長11.54m、狭道長7.47m、同前幅0.67m、奥幅0.95m、狭道高（奥）1.68m、玄室長4.07m、同前幅2.16m、同奥幅2.32m、玄室高（奥）2.2mの大きさで、開口方向はS—3°—Eである。玄室平面形は短冊形を呈する両袖型で、玄室に比して狭道が細長い構造が特徴である。石室構築面は、石室底面に三層が残存し、その中には浅間C軸石がまばらに堆積しているため、旧表土上と判断される。床面構造は、開口部から狭道を下がって玄室に至る形態で、狭道を段差で下がり、玄室との境に段差があり楕石で区画している。玄室では、舗石と思われる石皿程度の大きさの扁平な川原石が敷かれている部分が残存していた。天井部の構造は狭道入り口から徐々に下がりその後は水平になる。石材は壁体が川原石の乱石積みで、天井石が硬質凝灰岩（秋間石）である。玄室奥壁・前壁の根石に特徴があり、奥壁は4石、前壁は5石の縱積みになっている。赤色塗彩はベンガラで、玄室全体に彩色している。側壁部分の下端や奥壁2石目の横積みの部分までが彩色され、それより下部は彩色が施されていない。彩色されている面までが当時の床面と考えられる。

5・5Bトレンチ（第7図）

古墳の前方部南西隅と前方部前面の周溝の全容を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、墳丘第1段目と周溝が確認された。なお、5Bトレンチでは、表土（Ia層）の直下は褐色土層（IV層）であり、古墳の軸域外と判断される。

前方部第1段の法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は16度前後で、根石は標高216.8

V 遺跡各説

m、確認されている葺石は標高217.36mまでである。外堤上面はすでに耕作等により削平され、現状で一番高いところが標高217.8mである。周溝からの立ち上がりは28度である。周溝は最下面で標高216.8mを呈し、底面の幅は11.5mである。

なお、周溝内の基本層序II a層の上部に踏み固められた土層がみられ、その南側に溝が確認された。踏み固められた部分は墳丘第1段葺石部分の南西まで到達しており、この部分に小粒な川原石が散き詰められ、古墳の葺石部分とは不連続な境界線が観察された。中世の道路状遺構と付随する側溝と考えられる。

7・8トレンチ（第7図）

古墳の前方部北西隅と前方部前面の周溝の全容を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、墳丘第1段目と周溝が確認された。

前方部第1段の法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は18度前後で、根石の標高は217m、確認されている葺石は標高218.2mまでである。前方部墳端面の葺石は遺存状態が悪く、北側部分は遺存状態が比較的良好であった。外堤上面はすでに耕作等により削平され、現状で一番高いところが標高218.1mである。周溝からの立ち上がりは10度である。周溝は最下面で標高217mを呈し、底面の幅は8.8mである。底面から土坑・柱穴群や溝状の遺構が検出されたが、性格は不明である。なお、7トレンチ西側では、縄文時代中期後葉（加曾利E式期）の住居址石窯炉を検出している。

4・20・21・22・23トレンチ、F区（第8図）

古墳の前方部南西隅の墳丘から周溝の全容を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、表土層の直下がVI層（As-YP層）で耕作による削平が著しかったが、周溝と外堤の南西隅と外周溝が確認された。

周溝の底面は一番高い地点で標高217.75mを測り、23トレンチの東端で標高216.52mと北東方向に傾斜している。隣接する3トレンチ・5トレンチの周溝の底面より高く張出状に見えるが、E区で確認されている北西隅の周溝の底面とほぼ同じ高さである。ここからは、5×3.5mの楕円形で掘り鉢状の窪地と窪地を取り巻くように柱穴群が検出された。簡単な上部構造物が構築されていた可能性が高いと推定されるが、遺物の出土がないため遺構の性格は不明である。ほかに土坑が4基検出されたがすべて縄文時代のものであった。なお、外堤に沿って西側が幅1m、南側が幅2.2m、深さ50cmの溝が巡っている。覆土上部にII b層（As-B鞋石）が堆積している。周溝からの立ち上がりは18度である。21トレンチから外堤・外周溝が確認されている。外堤は上面の幅8.32m、外周溝は上面の幅1.44mである。

15・16トレンチ、E区（第9図）

古墳の前方部北西隅の外堤と周溝を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、周

1. 篠瀬二子塚古墳

溝と外堤の北西隅・外周溝が確認された。

周溝の底面は標高217.75m～217.5mで東方向に傾斜している。調査区東端の外堤南側は窪地状になり、底面は標高216.76mを測る。この部分での外堤の立ち上がりは29度である。また、外堤北西隅の立ち上がりは16度である。外堤は上面の幅7.68m、下端で8mを測り、外周溝は幅1.12m、深さ32cmである。

4 A トレンチ（第10図）

墳丘の前方部南西隅を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、前方部第1段目の平坦面と第2段目の前方部南西隅が確認された。

第1段平坦面は標高219.2m前後を測る。第2段の隅は標高219.2mに礎石を長手に置き、その上に直線的に置いた石列を区画とし葺石を設置している。葺石面の傾斜は37度前後で、確認されている葺石は標高217.5mまでである。

8 A トレンチ（第10図）

墳丘の前方部北西隅を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、前方部第1段目の平坦面と第2段目の前方部南西隅が確認された。

第1段平坦面は標高219.5m～219.25mで、崩落した葺石が検出されている。墳丘第2段の隅の礎石部分は標高219.5m前後に想定され、葺石の遺存状況は悪い。確認できる葺石面の傾斜は32度である。

6・6A・6B・19A・20A トレンチ（第11図）

古墳主軸線の後円部中央から前方部の外堤にかけて設定したトレンチである。調査の結果、後円部第2段目と埴輪列、前方部第1・2段目、周溝、外堤の一部が確認された。6Bトレンチは古墳の眺域外と判断される。

後円部の墳頂平坦面は標高224.08mを測り、前方部方向の法面から葺石・埴輪列が検出されている。葺石は標高223m～223.7mの間に確認され、長手に置いた縱方向の石列を区画とし葺石を設置している。葺石面の傾斜は14度前後である。埴輪列は後円部から前方部に向かう直線上の埴輪列のうち北側のもので密接して樹立していた。5～17（埴輪列6～19）が出土している。現況が竹林のため土層の腐食化が進み、埴輪列の埋方は確認できなかった。また、埴輪の上部はI b 層（浅間A鉱石層）まで達しており、この時点で埴輪の一部が表面に露出していた可能性が高い。なお、南側にサブトレンチを設定して調査したが、南側の埴輪列はすでに脱落して確認できなかった。後円部と前方部の接続は推定標高222.98mで、前方部の傾斜は7度と緩やかに立ち上がり、墳頂は標高224mを測る。前方部墳頂から東法面では葺石が少量検出されたが、原位置を留めているものはない。

前方部から周溝かけての第1段は、高さ2.55mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾

V 遺跡各説

斜は20度前後で、根石は標高217.35m、確認されている葺石は標高217.9mまでである。第1段平坦面は標高219.9m前後を測り、推定幅4.5mである。埴輪列は確認できなかった。第2段は高さ約4mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は35度で、根石の標高は219.9m、確認されている葺石は標高221mまでである。周溝の底面は墳丘側が一番深く標高217m、外堤側で標高217.48mを測り、底面の幅は11.68mである。外堤の立ち上がりは16度で、外堤上面は標高218.72mを測る。なお、6Bトレンチから検出されている溝はIV層を掘り込み、5Bトレンチで確認されている中世の道路状遺構の側溝と同じものである。

14・14A・14Bトレンチ(第11図)

古墳主軸線の後円部中央から後円部の外堤にかけて設定したトレンチである。調査の結果、後円部第1・2段目と埴輪列、周溝が確認された。

第1段は、高さ2.86mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は35度前後で、根石は崩落していたが、標高215.5mに推定される。確認されている葺石は標高216.4m～217.72mまでである。第1段平坦面は標高218.2m～218.36mを測り、推定幅5.76mである。第2段葺石の根石から4m離れて埴輪列が樹立している。1～4(埴輪列21～24)が出土している。現況が竹林のため上層の腐食化が進み、埴輪列の場所は確認できなかった。第2段は高さ約5.72mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は27度で、根石は標高218.36m、確認されている葺石は標高223.2mまでであるが、大半は崩落している。周溝の底面は標高215.12mでほぼ平坦になっている。外堤の立ち上がりは調査区では確認できなかったため、現道部分が外堤の立ち上がりにあたり、14Bトレンチの状況から外堤上面は標高216mで、東側の落ち込みが外周溝と推定される。

3・3Aトレンチ(第12図)

前方部中央で古墳主軸線に直交して南側に設定したトレンチである。調査の結果、前方部第1・2段目と周溝・外堤の一部が確認された。

第1段は高さ1.67mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は33度前後で、根石は標高217.85m、確認されている葺石は標高218.7mまでである。第1段平坦面は標高219.52m～218.7mを測り、推定幅5.6mである。第2段は高さ約4.68mで墳頂部の標高は224.2mである。法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は25度で、根石は標高219.52m、確認されている葺石は標高221mまでであるが、大半は崩落している。周溝の底面は標高215.8mでほぼ平坦になっている。外堤の立ち上がり傾斜は16度で、平坦面は表土層(Ia層)の直下がAs-YP層(VI層)で標高は216.68mである。なお、外堤付近で周溝の覆土中(As-B層より上部)に道路状の盛土層と中世の溝が検出された。4・5トレンチから繋がる道路状遺構と付随する側溝である。

9・9Aトレンチ(第12図)

前方部中央で古墳主軸線に直交して北側に設定したトレンチである。調査の結果、前方部第1・

2段目と周溝が確認された。

第1段は高さ1.44mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は23度前後で、根石の標高は217.86m、確認されている葺石は標高218.5mまでである。第1段平坦面は標高219.3m～218.5mを測り、推定幅6.56mである。第2段は高さ約4.86mで墳頂部の標高は224.16mである。法面から良好な状態で葺石が検出されている。葺石面の傾斜は30度で、根石は標高219.3m、確認されている葺石は標高222.5mである。周溝の底面は標高216.9mでほぼ平坦になっているが、外堤寄りで溝状の窪地が検出されている。最下面是標高216.16mで不規則であるもののF区まで到達する。

2・2 Aトレンチ、B区（第13回）

古墳くびれ部南側に主軸線に直交して設定したトレンチである。調査の結果、墳丘くびれ部の第1・2段目と周溝が確認された。

第1段は、高さ3.4mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は22度で、根石の標高は216m、確認されている葺石は標高218.4mまでである。長手に置いた縦方向の石列を区画とし葺石を設置しているが、前方部と後円部の境界ははっきりしない。なお、後円部側では大半の葺石が崩落していた。第1段平坦面は現状で標高218.4m～219.4mを測り、推定幅4.48mである。第2段葺石の根石から5.12m離れて埴輪列が検出されたが、遺存状態は悪かった。18～22（埴輪列1～5）が出土している。第2段では前方部と後円部の明瞭な境界線が確認できた。前方部の葺石面の上に後円部の葺石が被さっていた。葺石根石の標高は219.4mで、標高221mまで確認されている。葺石面の傾斜は36度である。長手に置いた縦方向の石列を区画とし葺石を設置している。周溝の底面は標高215.36mで、墳丘際で柱穴群が検出されている。

1・1 Aトレンチ、A区（第14回）

後円部中央で主軸線に直交して南側に設定したトレンチである。調査の結果、後円部の第1・2段目と周溝が確認された。

第1段は高さ2.16m、法面の傾斜は35度で、葺石は崩落していた。根石は標高216mで、確認されている葺石は標高218.4mまでである。第1段平坦面は現状で標高218.64m～218mを測り、推定幅5.44mである。第2段は石室入り口部を中心、長手に置いた縦方向の石列を区画とし葺石を整然と設置している。葺石も大きなものが選択されている。葺石根石の標高は218.64mで、標高223.2mまで確認されている。葺石面の傾斜は34度である。後円部の墳頂平坦面は標高224mを測る。なお、石室入り口上部ではI・II層（浅間A軽石層）の下部に石段が検出された。墳頂部へ登り降りするため、後に造られたものと判断される。周溝の底面は標高215.88mで、底面の幅は16mである。外堤の立ち上がりは8度で、外堤上面は標高216.48mを測る。なお、1トレンチ南側から検出された溝は、3・5Bトレンチで確認されている中世の道路状遺構の側溝と同じ

V 遺跡各説

ものである。

10・10A トレンチ、D区（第15図）

古墳くびれ部北側に主軸線に直交して設定したトレンチである。調査の結果、墳丘くびれ部の第1・2段目と周溝が確認された。

第1段は、高さ3.8mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は22度で、根石の標高は215.8mと推定される。葺石は小粒のものが敷き詰められた状態で、明確なくびれ部は確認できなかった。しかし、後円部と前方部で積み上げ方法と葺石のサイズが異なっていることが確認された。第1段平坦面は現状で標高219.6m～218.51mを測り、推定幅6.56mである。第2段葺石の根石から1.6m～2.4m離れて埴輪列が密接して樹立している。23～42（埴輪列51～73）が出土している。埴輪列は弧状に配列されていたが、土層の状況が悪く掘方は確認できなかった。詳しくみると、猪輪列54～56の3個体、猪輪列57～61の5個体、埴輪列62・51の2個体、埴輪列63～65の3個体、埴輪列66～68の3個体、埴輪列69・70・52の3個体は直線的に並ぶことから設置の単位と考えられる。

第2段では法面から良好な状態で葺石が検出されている。葺石面の傾斜は33度で、根石は標高219.6m、確認されている葺石は標高221.6mまでである。南側のくびれ部に比べ小振りの川原石が葺石として積み上げられている。長手に置いた縦方向の石列区画が連続的に観察され、施工単位が把握できる状態であった。また、部分的に石と石の間に隙間があるものがあり、積み上げ技法ではなく、貼り付けに近いことが確認された。前方部と後円部の明瞭な境界線が確認できなかつたが、徐々に後円部から前方部へ移行するような状態で葺かれていた。周溝の底面は標高215.8mの平坦面になっている。

12B・17トレンチ、C区（第16図）

後円部外側の外堀を確認するために設定したトレンチと墓地移転に伴う発掘調査である。調査の結果、外堀と外周溝が確認された。外堀の平坦面は標高216.2mで幅は9.84mである。周溝からの立ち上がり傾斜は46度である。外周溝は幅2.4m～2.8mで深さ64cmである。

11・11A トレンチ（第17図）

後円部中央で主軸線に直交して北側に設定したトレンチである。調査の結果、後円部の第1・2段目と周溝が確認された。

第1段は、高さ2mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は45度で、根石の標高は216.4m、確認されている葺石は標高217.5mまでである。第1段平坦面は現状で標高218.4m～218mを測り、推定幅5.6mである。第2段葺石の根石から2.4mほど離れて盾形埴輪185・186（埴輪列41・42）が2個体出土している。第2段は高さ約5.6mで墳頂部の標高は224mである。法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は24度で、根石は標高218.4m、確認されている葺石は標

1 篠淵二子塚古墳

高219.3mまでである。周溝の底面は起伏があり、墳丘寄りで標高215.74m、外堤寄りで標高215.6mを測る。なお、9トレンチから延びる幅1.2m、深さ40cmほどの溝状遺構が検出されている。

12・12Aトレンチ（第17図）

後円部11Aトレンチと14Aトレンチの間に設定したトレンチである。調査の結果、後円部第1・2段目と周溝・外堤の一部が確認された。

第1段は、高さ2.4mで法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は20度で、根石の標高は216m、確認されている葺石は標高217.2mまでである。第1段平坦面は現状で標高218.4m～218mを測り、推定幅4mである。第2段葺石の根石から5.12mほど離れて埴輪列が樹立している。44・45（埴輪列31・32）が出土している。第2段の法面から葺石が検出されている。葺石面の傾斜は25度で、根石は標高218.4m、確認されている葺石は標高219.6mまでである。周溝の底面は墳丘寄りで標高215.8mとほぼ平坦で、外堤近くで標高215.04mと窪地状に深くなっている。埴輪の破片が外堤側から流れ込んでいる状態が確認された。外堤の立ち上がり傾斜は23度を呈し、平坦面は標高216.34mである。周溝側の縁辺部から柱穴群が検出されている。

13トレンチ（第18図）

後円部12Aトレンチと14Aトレンチの中間に設定したトレンチである。調査の結果、後円部第1段と周溝の一部が確認された。第1段の法面から葺石が確認されている。葺石面の傾斜は39度で、根石の標高は216.4m、確認されている葺石は標高217mまでである。長手に置いた縱方向の石列区画を中心に葺石を設置している。周溝の底面は標高215.6mで柱穴群が検出されている。

13Bトレンチ（第18図）

後円部東側に設定されたトレンチである。表土層（Ia層）の直下がAs-YP層（VI層）である。古墳の眺域外と判断される。

18Aトレンチ（第18図）

後円部1Aトレンチと14Aトレンチの中間に設定したトレンチである。調査の結果、後円部第1段目の平坦面と第2段目の法面が確認された。第1段平坦面は標高218.72m～218mである。第2段法面の葺石は、根石が標高218.72mで長手に置いた縱方向の石列区画を中心に葺石を設置している。葺石面の傾斜は34度で、確認されている葺石は標高220.7mまでである。

市道部分（第19図）

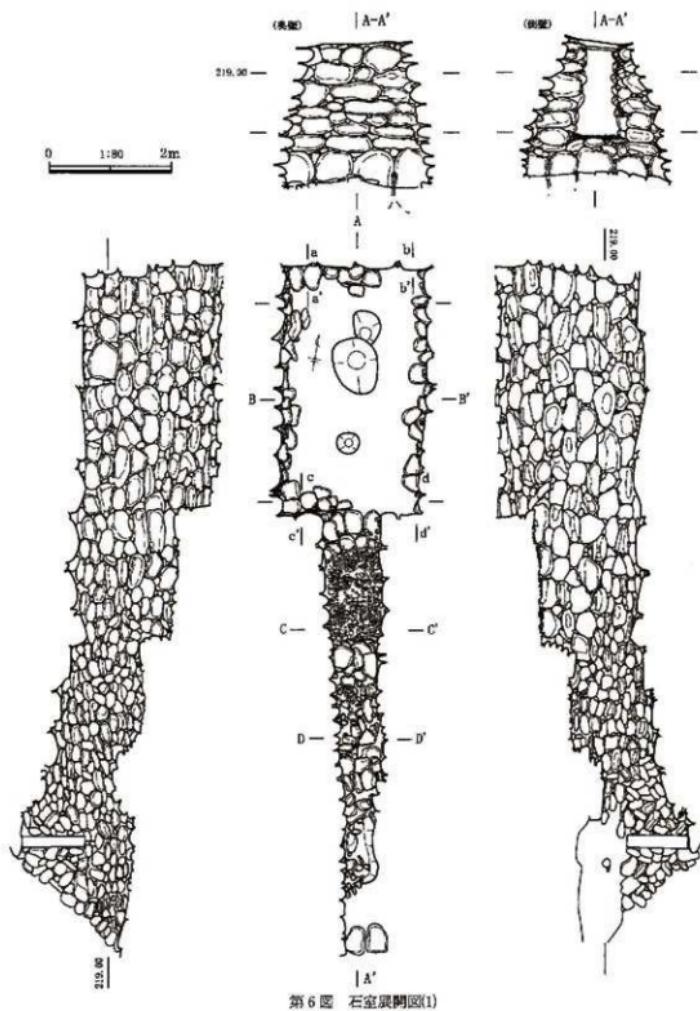
後円部東側の外周溝、外堤、周溝部分にあたる。面上に広げた結果、周溝の底面は標高215.14m前後で擾乱が著しい。調査区北側の外堤立ち上がりの傾斜は22度を測り、平坦面は標高216mで、上端の幅は10mである。外周溝は幅1.5m～2m、深さ32cmである。埴輪は周溝の外堤寄りの北側部分と、南側部分から多量に出土している。これらの埴輪片は、外堤上に樹立していた埴輪が二次的に流れ込んだものと推定される。また、北側外堤沿いには、窪地状の溝が検出されている。

V 遺跡各説

なお、調査区中央部が張り出し状にやや高くなり東側に広がっているが周溝の一部と推定される。その後、後円部現道の東側にある真下神社の石垣撤去工事の立ち会いにより、この部分では盛り土は確認されなかった。調査区の南側の家屋が建てられていた部分は、擾乱、削平された部分が広がっており、外堀・外周溝とも確認することができなかった。

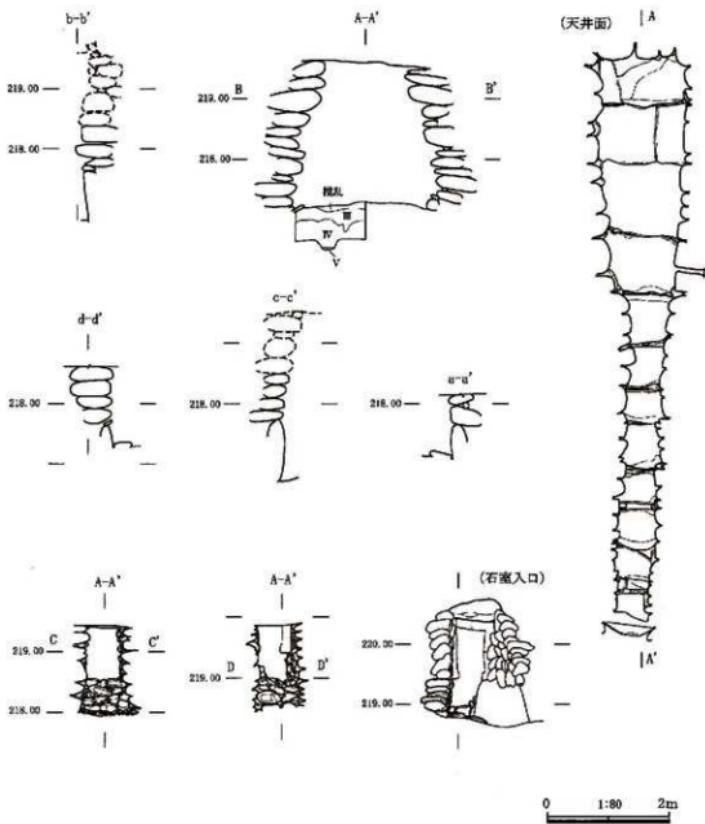
(志村 哲・大工原 豊)

1 球瀬二子塚古墳

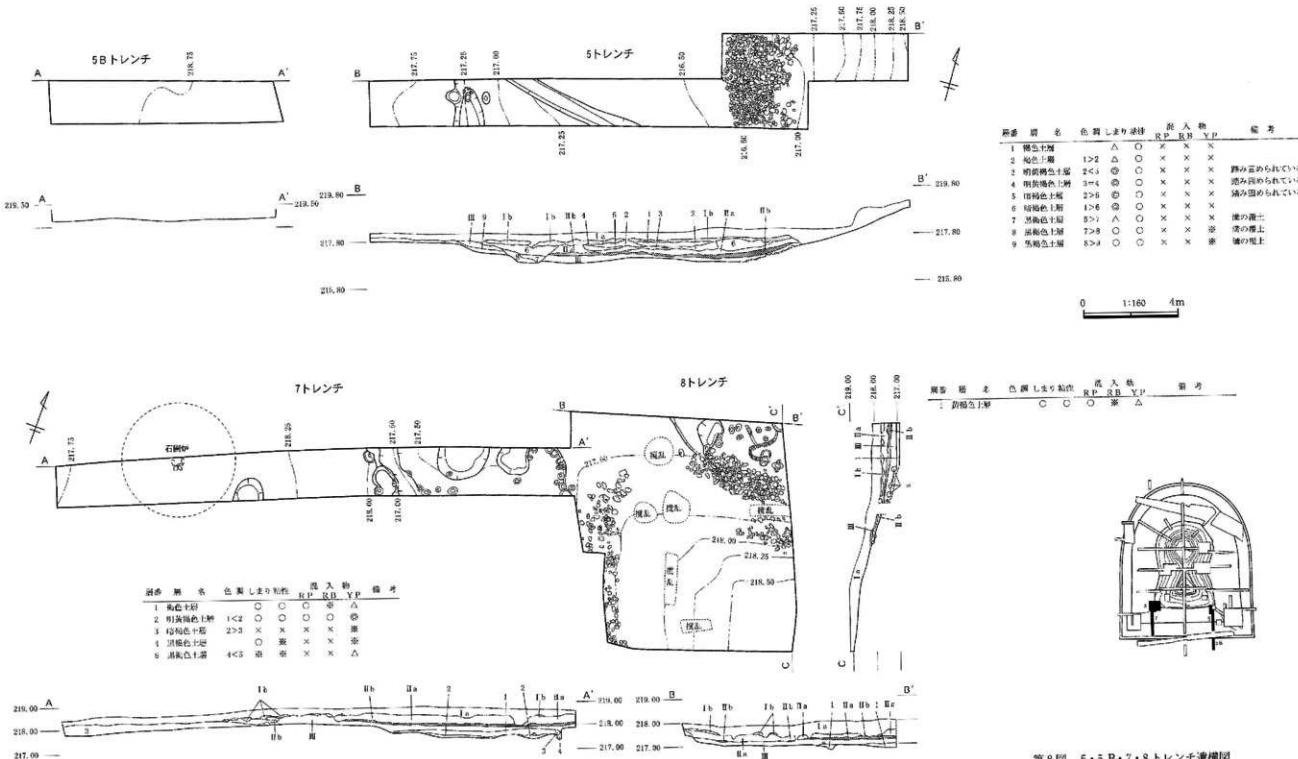


第6図 石室展開図(1)

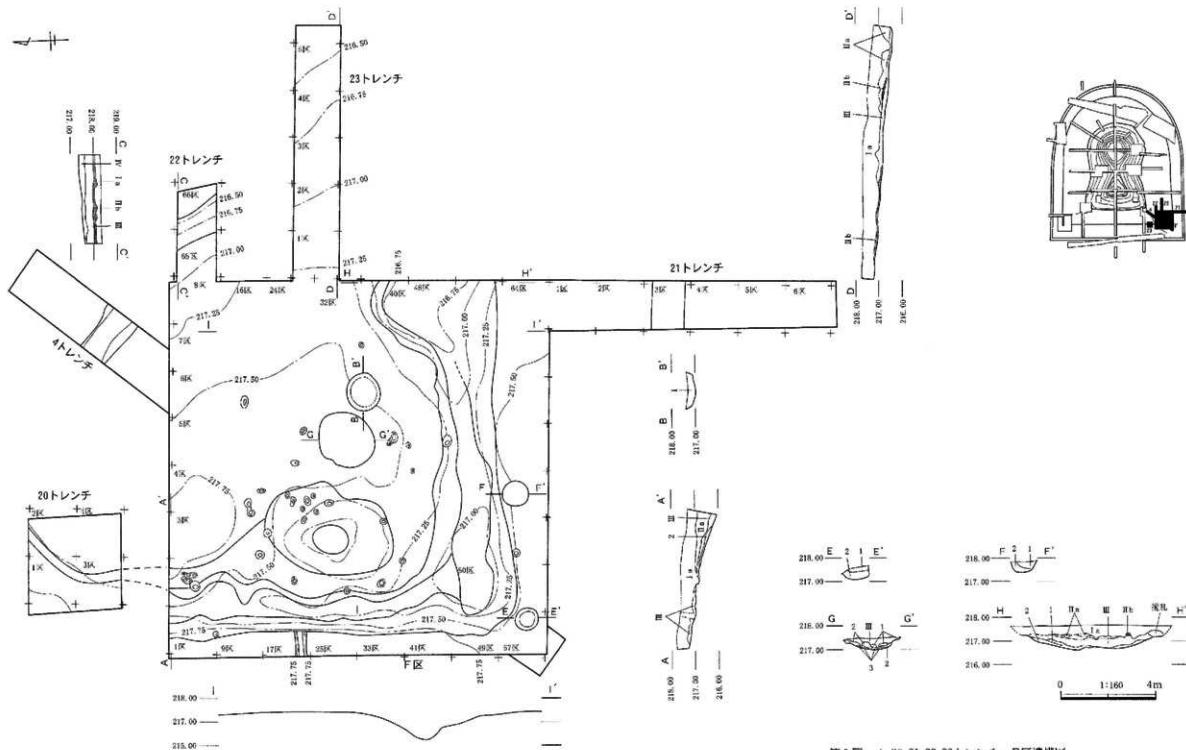
V 這勝各說



第7図 石室展開図(2)

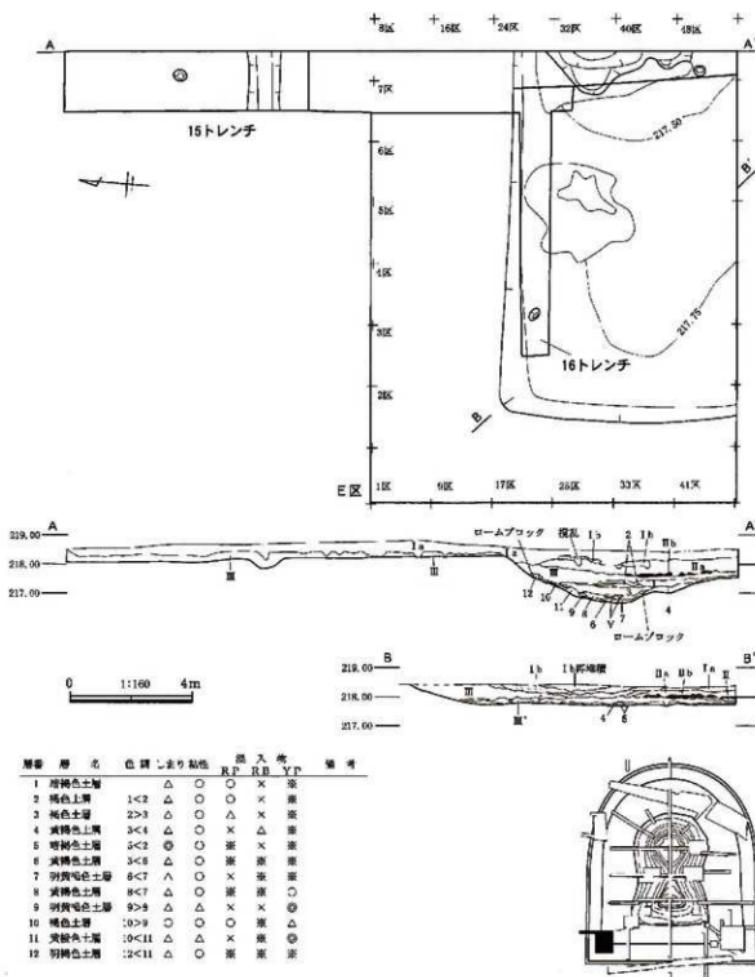


第8図 5・5B・7・8 ブランチ断構図



第9図 4・20・21・22・23トレンチ、F区遺構図

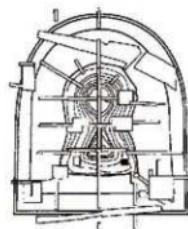
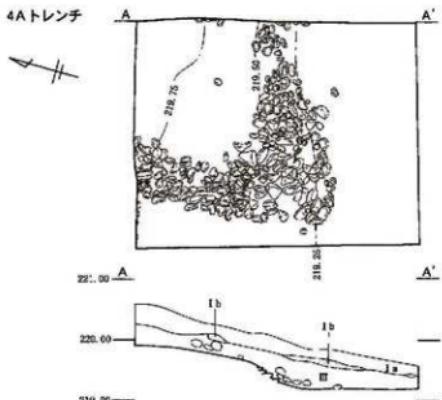
1 简述二子塚古墳



第10図 15トレンチ、16トレンチ、E区遺構図

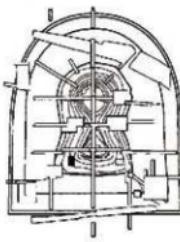
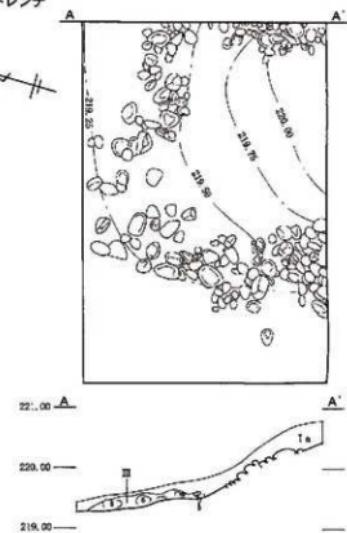
V 遺跡各説

4Aトレンチ

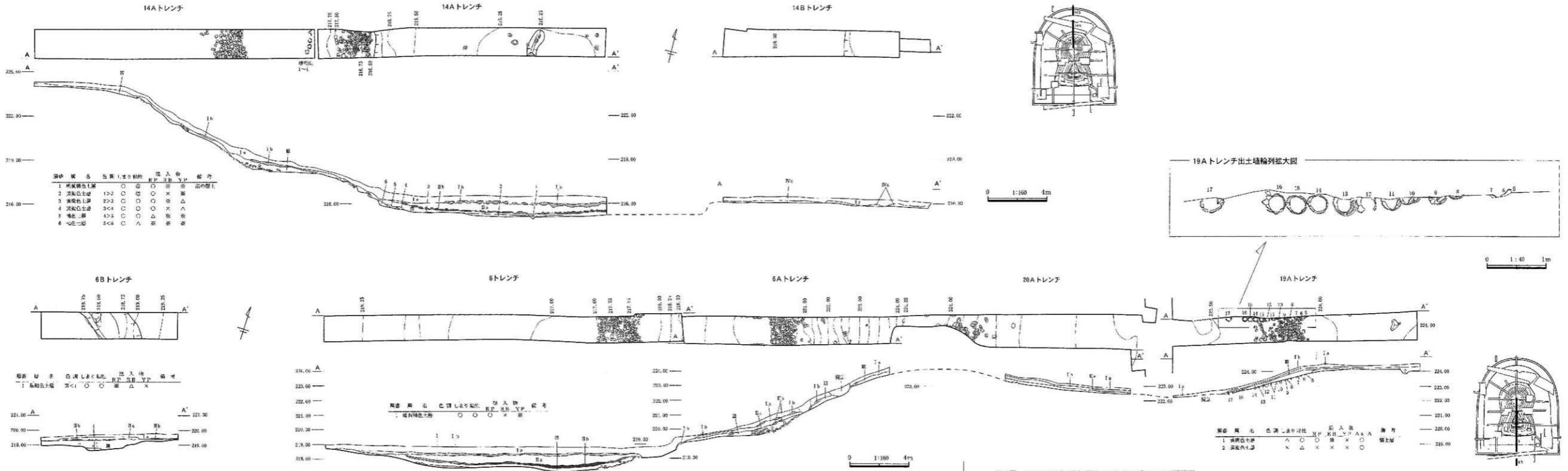


0 1:80 2m

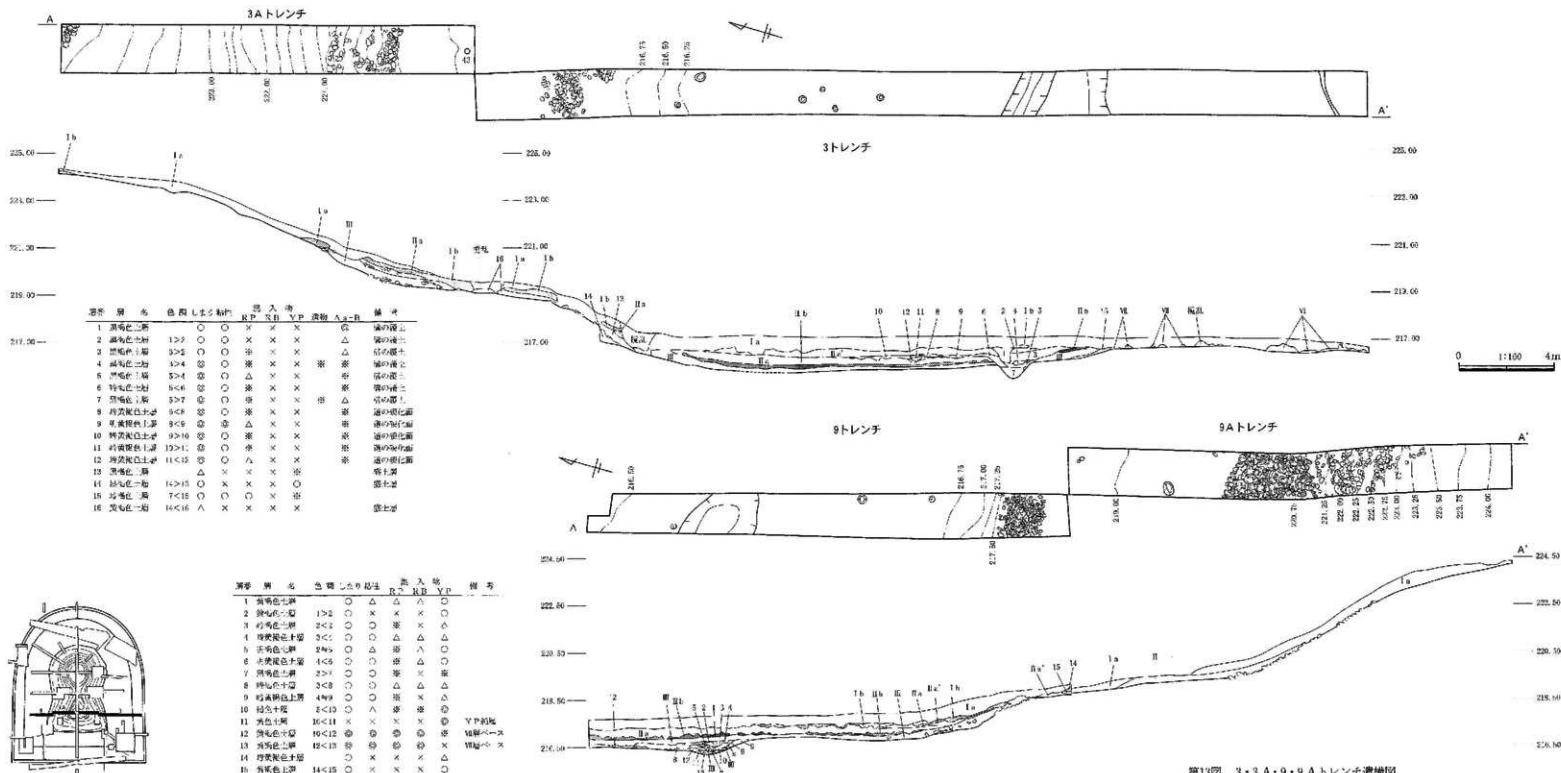
8Aトレンチ



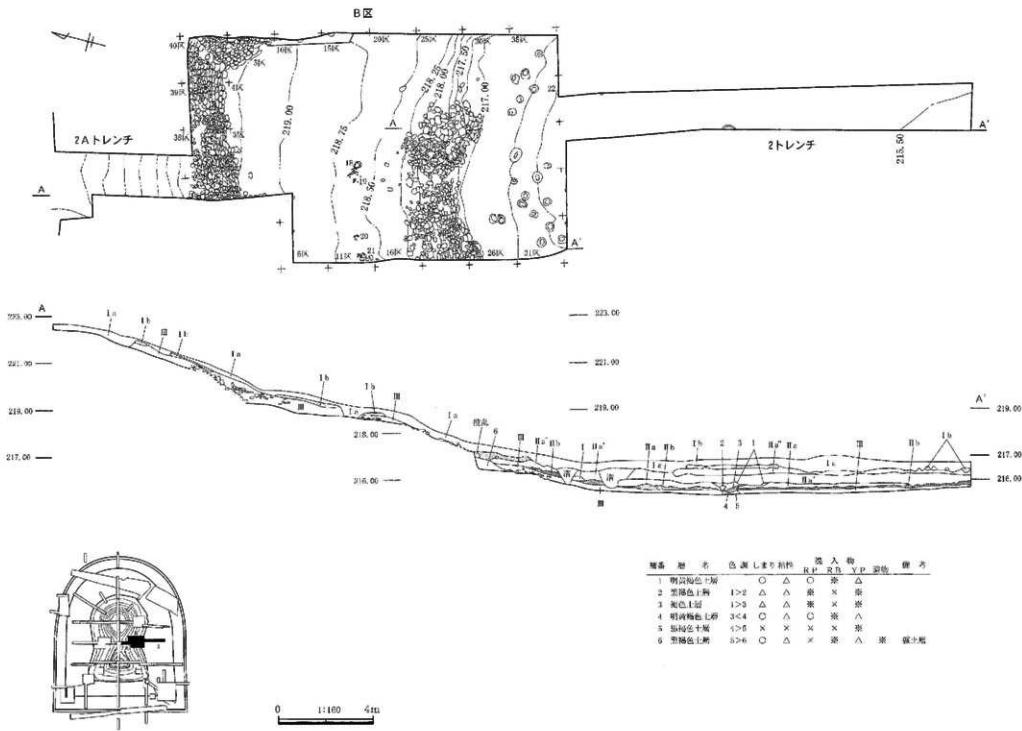
第11図 4Aトレンチ、8Aトレンチ遺構図



第12図 6・6A・6B・19A・20A・14・14A・14B トレンチ造構図



第13図 3・3 A・9・9 Aトレンチ遺構図

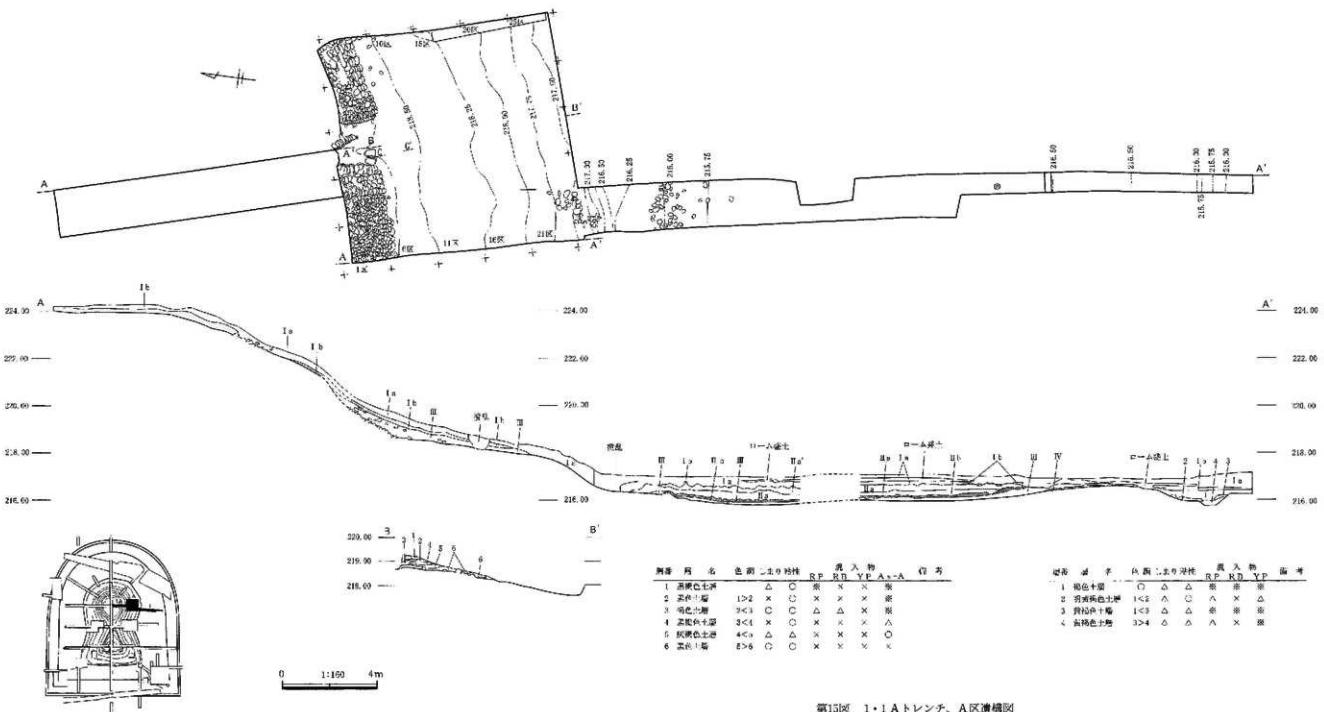


第14図 2・2Aトレンチ、B区遺構図

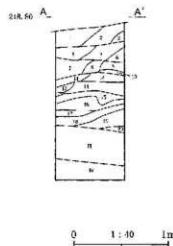
1A トレンチ

A区

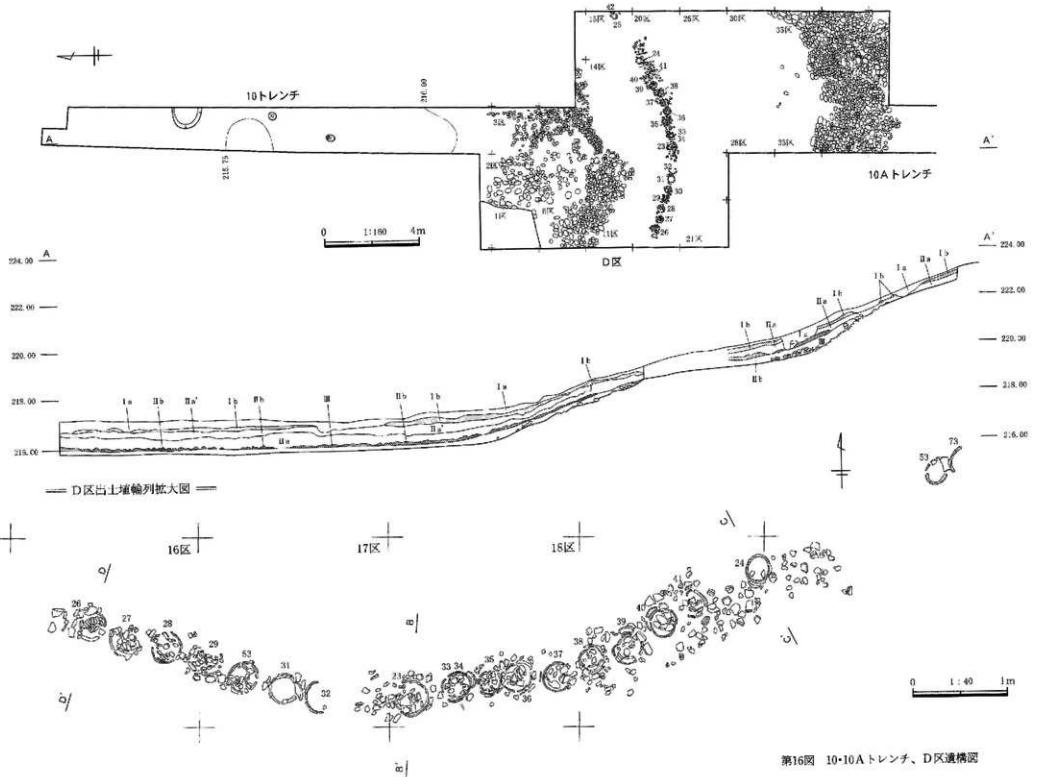
トレンチ



石炭紳士層確認トレント



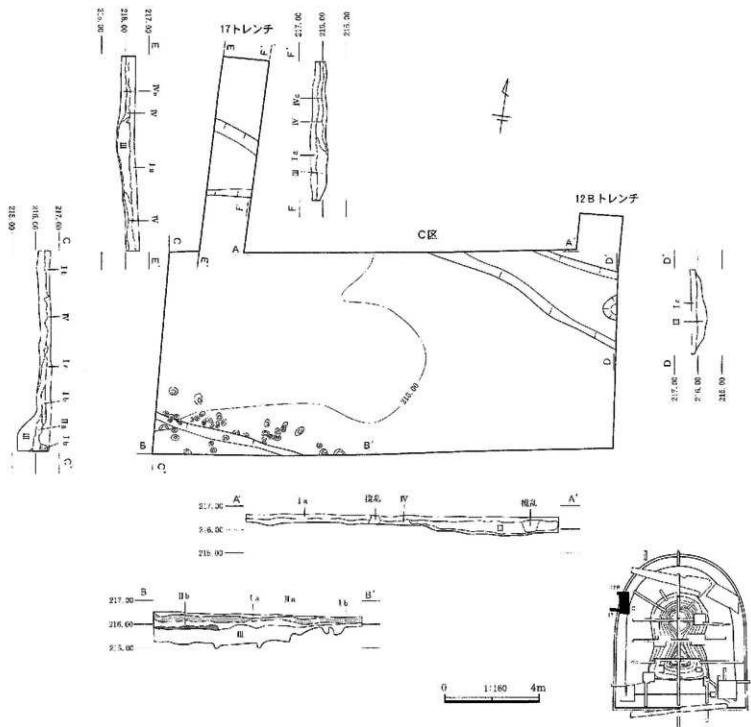
第15図 1:1 Aトビンチ A区遺傳図



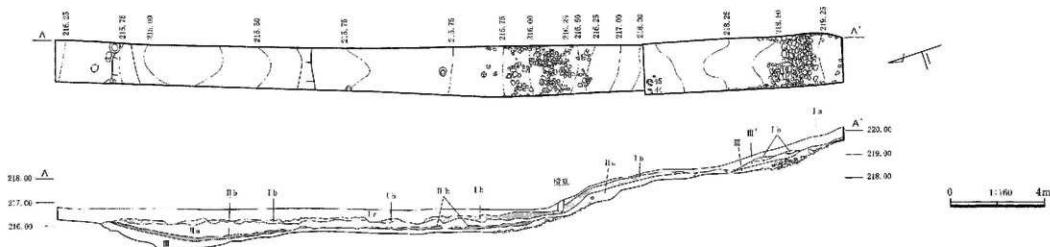
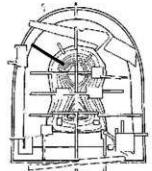
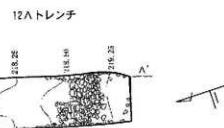
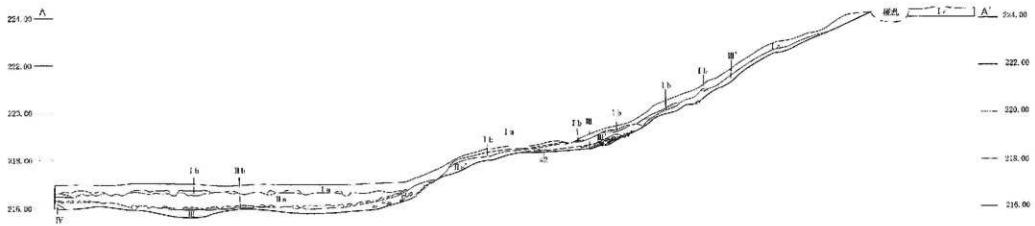
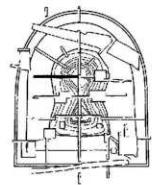
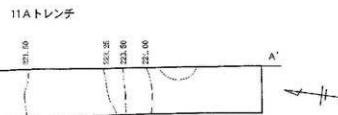
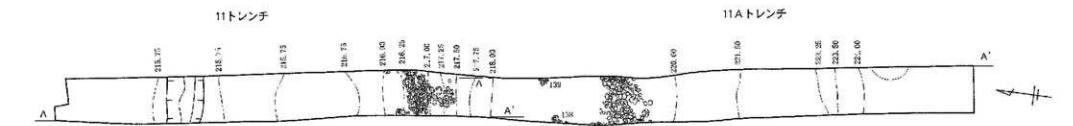
第16図 10・10A トレンチ、D区遺構図

編號	地名	色調	七彩性	塑性	裂入帶	R	B	G	Y	P
1	當陽	1>2	△	○	●	×	×	×	×	×
2	當陽上河	2>3	△	○	●	●	○	○	○	○
3	當陽上河	2<3	○	△	●	●	○	○	○	○
4	後河谷上層	2>3	△	○	△	△	○	○	○	○
5	黑龍江上層	1<5	△	○	●	●	○	○	○	○
6	明月山紅土	1>5	○	●	●	●	○	○	○	○
7	祁連山下層	7>8	△	○	●	●	○	○	○	○
8	祁連山下層	8>9	○	●	●	●	○	○	○	○
9	祁連山下層	7>9	○	●	●	●	○	○	○	○
10	祁連山下層	8>10	○	●	●	●	○	○	○	○
11	祁連山下層	9>11	○	●	●	●	○	○	○	○
12	祁連山下層	9>11	○	●	●	●	○	○	○	○

地層番号	地層名	色調	しまり特徴	測定點	標高
1	山積土と砂	△	○	×	218.600
2	漂砾土	△	○	×	218.600
3	山積土と砂	△	○	×	218.600
4	樹根腐土と砂	△	○	×	218.600
5	山積土と砂	△	○	×	218.600
6	樹根腐土	△	○	×	218.600
7	山積土	△	○	×	218.600



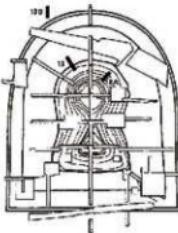
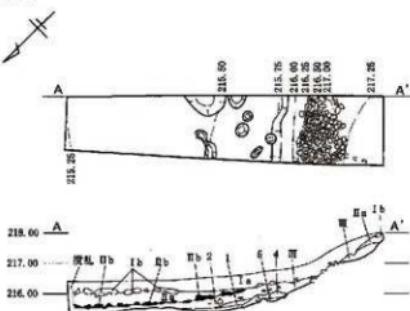
第17図 12B・17トレンチ、C区遺構図



第18図 11・11A・12・12Aトレンチ断面図

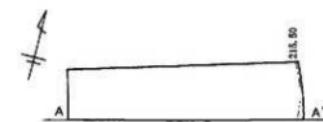
1 篠瀬二子塚古墳

13トレンチ

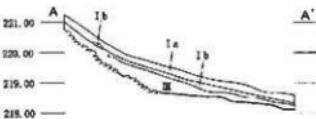


番号	層名	色	深さ	しまり	粒性	R _P	R _B	Y _P	備考
1	暗褐色土層			○	※	X	※		
2	黃褐色土層	1<2		○	○	○	※	C	
3	褐色土層	1<3		○	※	※	※	△	
4	深褐色土層	3>4		△	○	X	X	※	
5	褐色土層	4<5		△	△	X	X	※	盛土層

13Bトレンチ

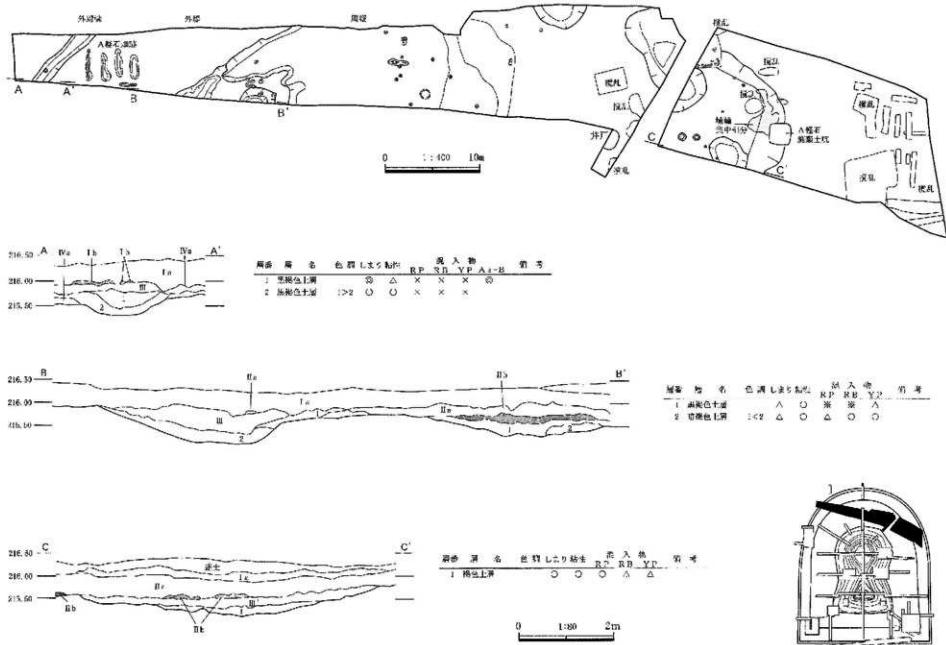


18Aトレンチ



0 1:160 4m

第19図 13・13B・18Aトレンチ造構図



第20図 市道部分断面図

(2) 出土遺物

円筒埴輪

普通円筒埴輪

完形品はないが、破片の觀察から3条4段構成と、完形の朝顔形埴輪から4条5段構成が推定される。口縁部は単口縁と貼付口縁に分類される。単口縁は外反口縁で、口唇部が面取りされ平坦なものと窪むものが大半を占める。その他、口辺上部で強く外反する52・62・96、口縁内面が窪む76・77などがある。貼付口縁は28・49～52・70・77～81があげられ、大部分は藤岡廃埴輪である。口縁部の高さについては、33のように短いものと、98のように長いものがある。

凸帯は断面台形が主体を占める。その他、上辺が突出するものに8・9・31・34・102・139、低い台形で中央が窪むものに2・3・5・134、三角形の58・82がある。ここで特記すべき事は、「断続ナデ技法A」が埴輪列の中にみられることがある。「断続ナデ技法」は川西宏幸氏よりV期の埴輪に、凸帯設定として提唱されたものであるが、中島和彦氏（1991年「菅原東道遊埴輪墓群をめぐる諸問題」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」奈良市教育委員会）により検討が行われ、この「断続ナデ技法」を凸帯成形技法と考え、粘土紐に横撫でを入れる「断続ナデ技法A」と従来の断続ナデ技法を「断続ナデ技法B」と区別した。本墳の場合、最下段の凸帯上下に斜めの擦痕と撫でがみられるものに18・34・36・37・40がある。また、凸帯の上面にあるものが5・37である。37は2条目にみられる。凸帯の下面にあるものが1・17・24・36・40である。24は爪痕が連続してみられる。また、40は2条目にみられる。重要なことは「断続ナデ技法A」が範内においては最下段の凸帯にだけ認められるという点である。そうした場合、18・34・36・37・40は「断続ナデ技法A」と解釈できるが、最下段以外の場合は、凸帯上下の一方を強く撫で付けることにより生じる痕跡であり、今後の類例をもって検討したい。

透孔の位置は第3段目で円形が主体を占め、60のように半円形もある。また、54・133のように小円孔もみられる。線刻は、「一」が71・78・103・120・144、「ノ」が73、「×」が145である。いずれも外面に施される。外面の調整は縱刷毛・斜刷毛が基本である。特に、3・16・25・36・118のように断続的に何回も施している例がある。また、刷毛目痕が浅く範撫でにみえるものに3・133・135がある。2次横刷毛は12・27・48・66～68・104・136・137・138にみられる。特殊なものとして、52・54のように刷毛目が極めて緻密な物がある。最下段の基底部については、1～45の埴輪列の円筒埴輪を中心みると、基部は幅4.5cm～8cmの粘土板1枚構成が中心である。2枚構成は9・23・30・42・44と少ない。なお、61・83・84・139は七興山古墳と同じ折り返し技法を用いて基部を作っている。最下段の凸帯位置については、段間とほぼ同じ高さが7・9・11にみられる。段間の1/2以内の設定が1・4・18・20・36・40、段間よりも高い設定が10・14・35にみられる。このうち、段間の1/2以内の凸帯設定位置は広義の低位置凸帯の範疇に入ると考えられる。

V 遺跡各説

朝顔形埴輪

口縁部から肩部にかけて赤色塗彩が施されているものが多い。142は高さ85.6cmの完形品である。肩部は丸みを有し、円筒部は4条5段構成で3・4段目に半円形の透孔を穿つ。

形象埴輪

人物

大型品は163・173・174の部品から全身立像が想定される。187・179は人物に着装された大刀と考えられる。167・177は腰帶部分と推定され綾杉文が施される。小型品は、166・168のように白色塗彩が施されている。その他、151・172は人物の腕、164・178は腰帶部分と推定される。

器財埴輪

家

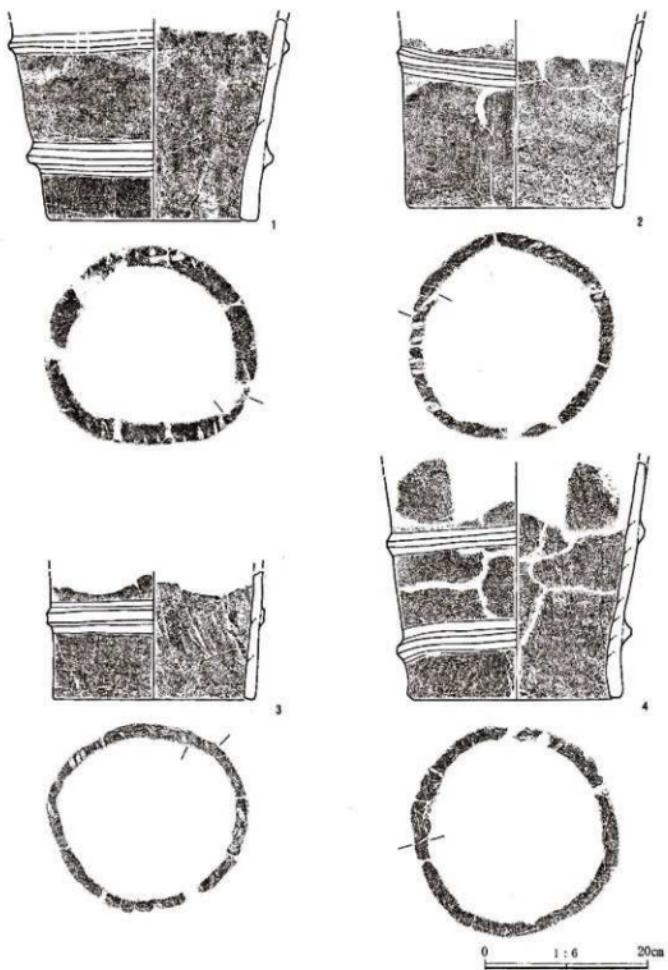
154・155・169・180～182があげられる。154・169は堅魚木、182は赤色塗彩と網目文を施すため、一体成形の入母屋造の屋根部分にあたる。

盾

156・165・171・185を参考に復元したのが184の盾である。盾面はⅡ字形に区画する。内区上辺は弧状の網目文で区画し、外区は網目文を巡らせ、外区上辺は綾杉文で縁取り、その下に網目文を巡らせている。富岡市一ノ宮4号古墳例に類似している。また、161のように平行沈線文を直交させる盾面も出土している。

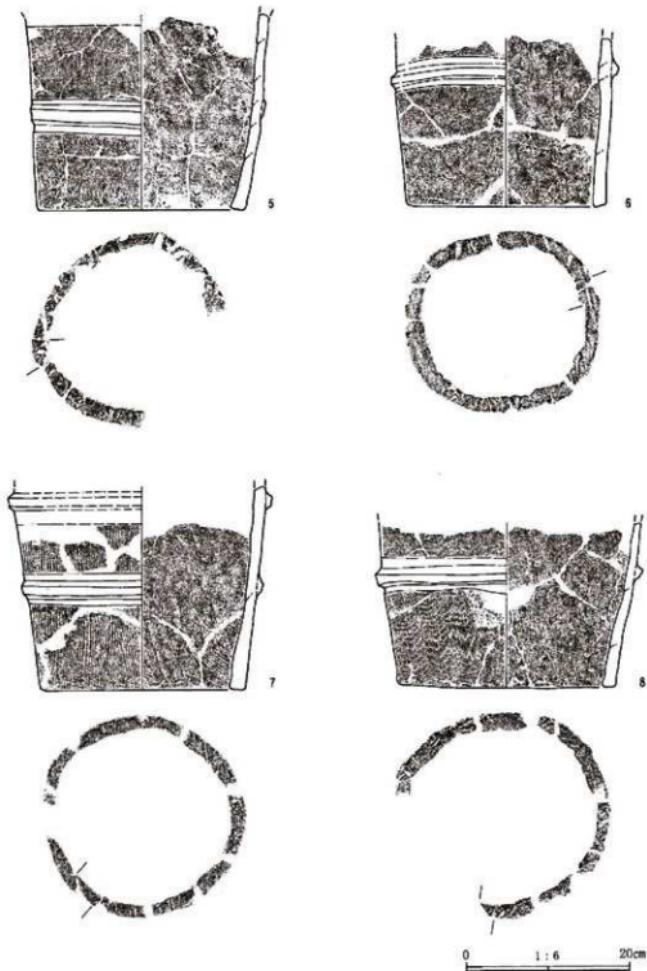
以上、種類別に埴輪を梗概してきたが、これら埴輪の胎土は大きく2種類に分類される。結晶片岩を含む一群と結晶片岩を含まないで、凝灰質砂岩や白色鉱物を多量に含む一群である。結晶片岩を含む一群は藤岡産埴輪で、さらに2つに細分される。一つは、結晶片岩とチャート粒・骨針を含むグループで、1・24・38・58～61・73・80・83・85～87・89～91・93・94・107・114・117・133・140・142・143・149～151・153・156・163・177・184があげられる。二つ目は、結晶片岩・チャート粒を含むグループで、2・22・37・39・40・41・64・79・82・84・99・102・103・113・115・116・118・120・123～127・157～159・164・167・170・171・173・174・178・183・185・189・190があげられる。藤岡産埴輪の中では猿田埴輪窯跡の可能性が高い。凝灰質砂岩・泥岩や白色鉱物を多量に含む一群は、5・9・10・13・14・17・19・20・28・33～35・42・43・65・98・100・104・105・108・122・131・134・136・155・161・162・169・176・179～182・186・188があげられる。焼成が硬質で灰色を呈し、コクス状に発泡しているのもみられることから、藤岡産埴輪のうち本郷埴輪窯址の結晶片岩を含まない一群に類似している。

1 築瀬二子塚古墳



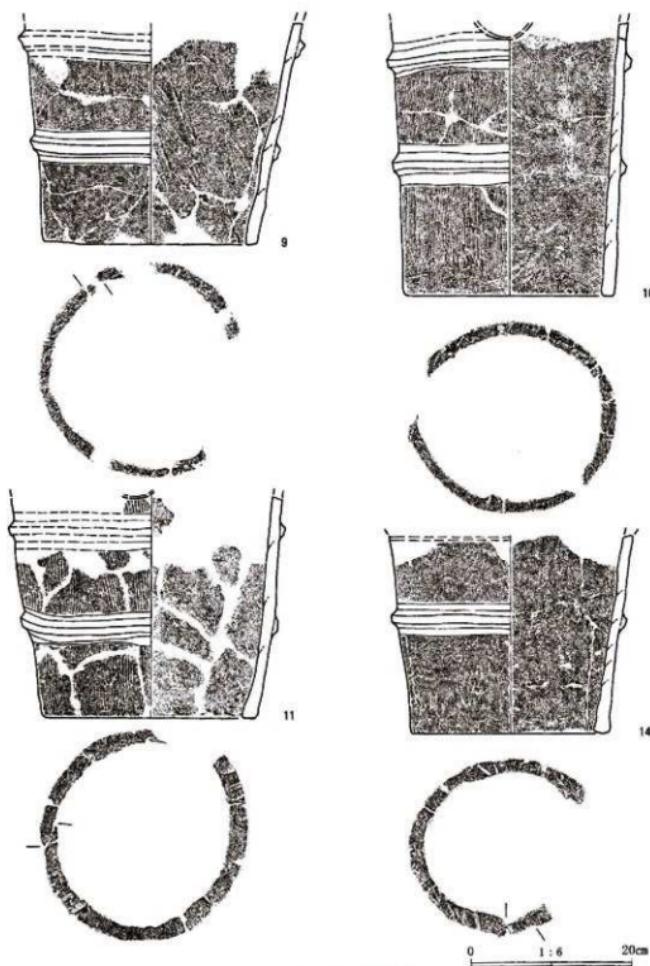
第21図 墓輪実測図(1)

V 遺跡各説



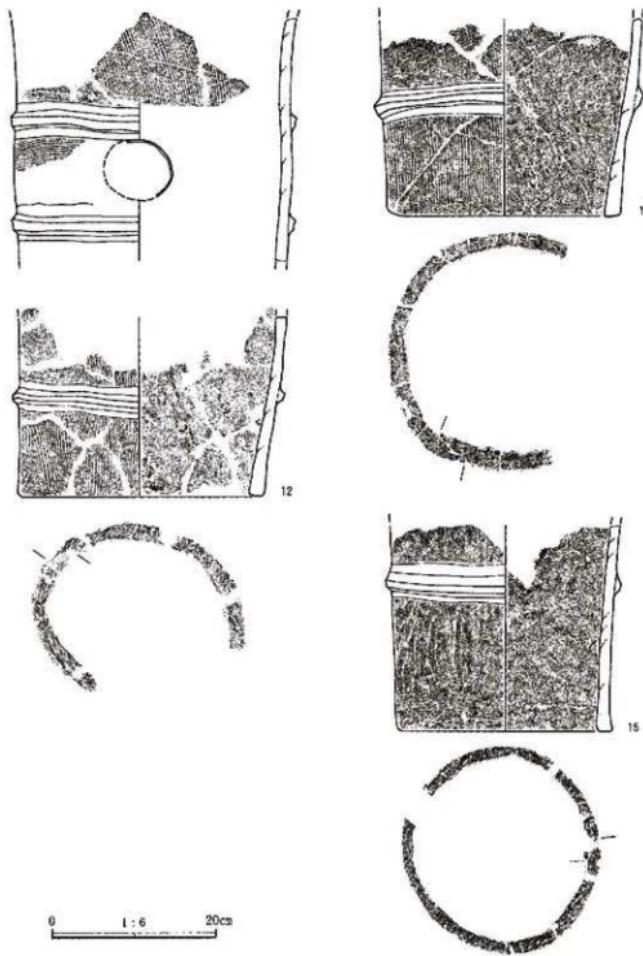
第22図 車輪実測図(2)

1 葉瀬二子塚古墳



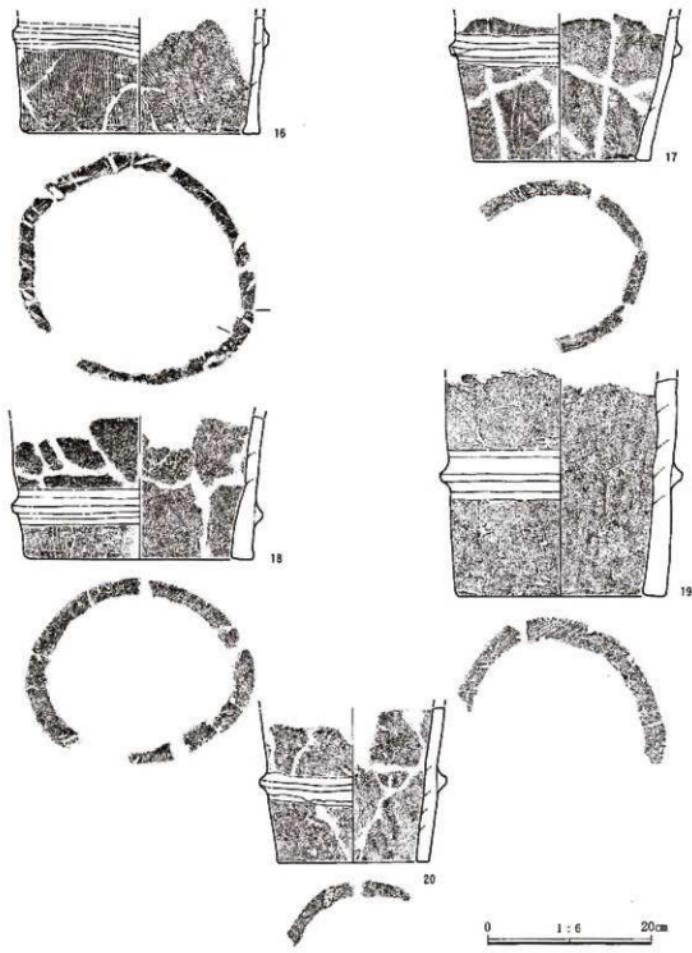
第23図 墓輪郭測図(3)

V 遺跡各説



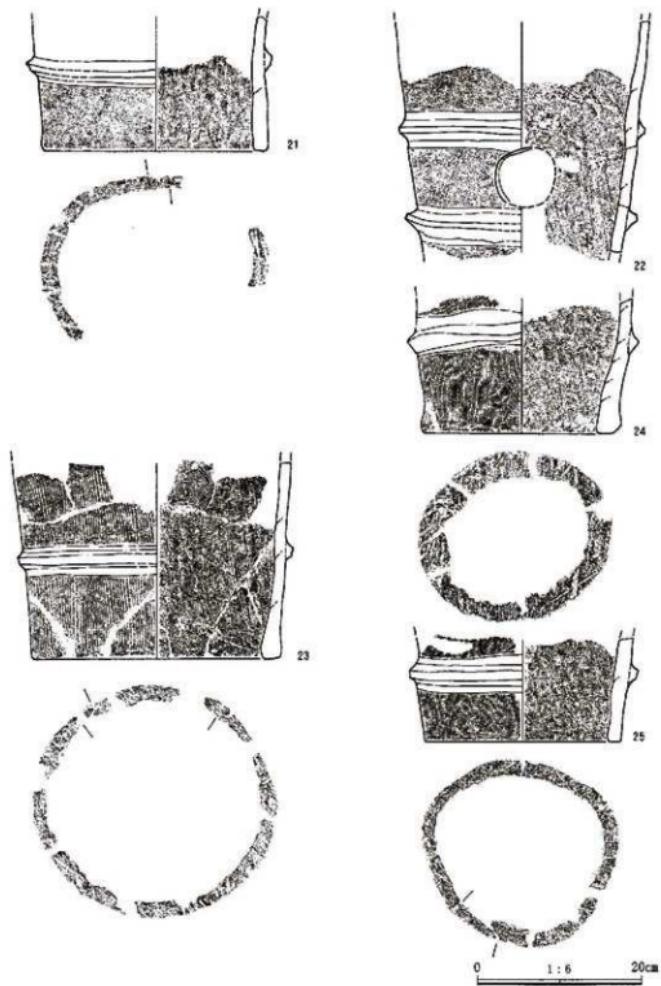
第24図 埋輪跡図(4)

1 築瀬二子塚古墳



第25図 墓室測定図(5)

V 遺跡各図



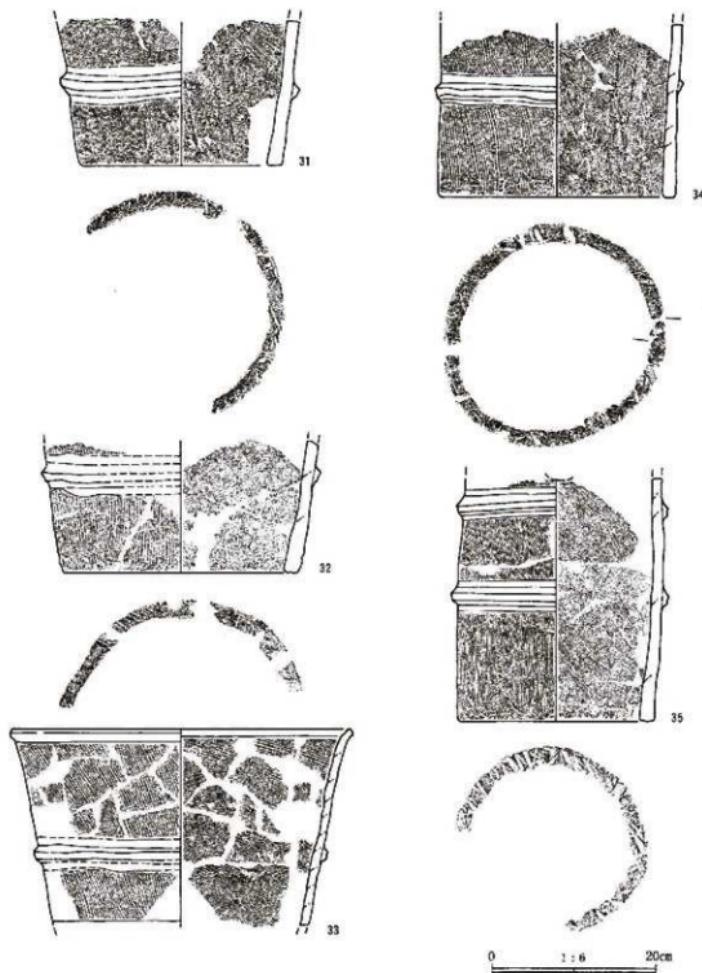
第26図 塵輪実測図(6)

1 畠瀬二子塚古墳



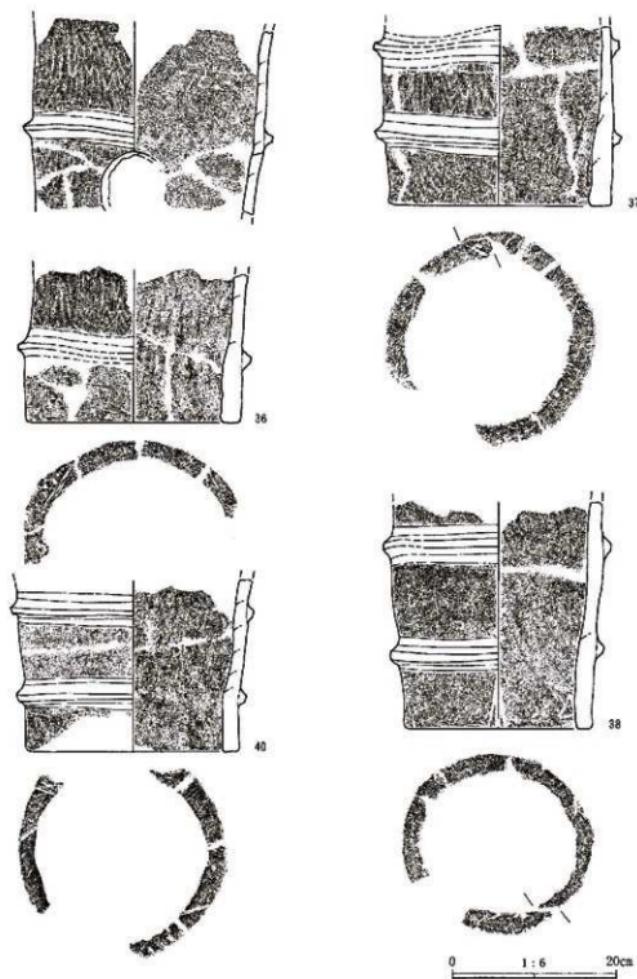
第27図 墓輪郭圖(7)

V 遺跡各説



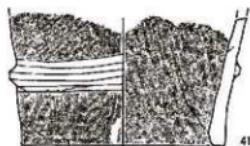
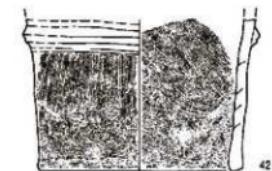
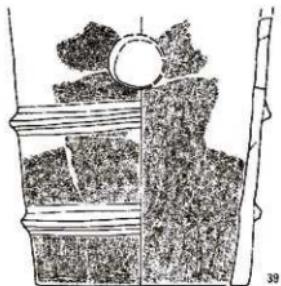
第28図 極輪窯跡(8)

1 斎瀬二子塚古墳



第29図 墓輪実測図(9)

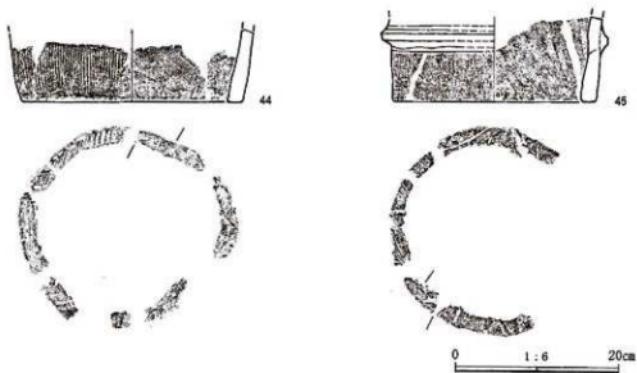
V 遺跡各說



0 1 : 6 20cm

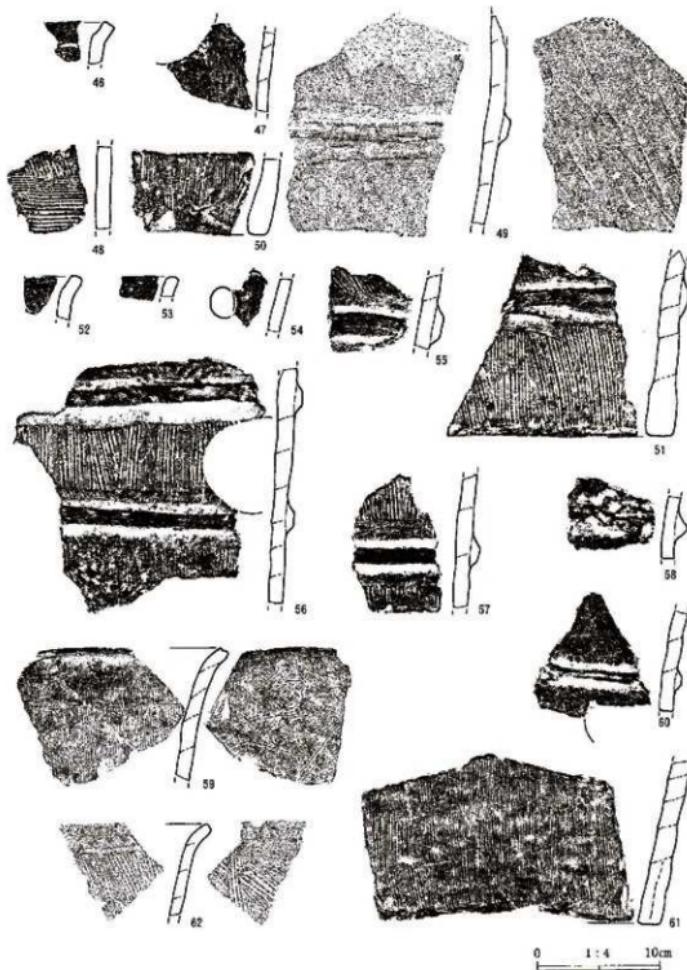
第30区 塚輪実測区(3)

1 篠瀬二子塚古墳



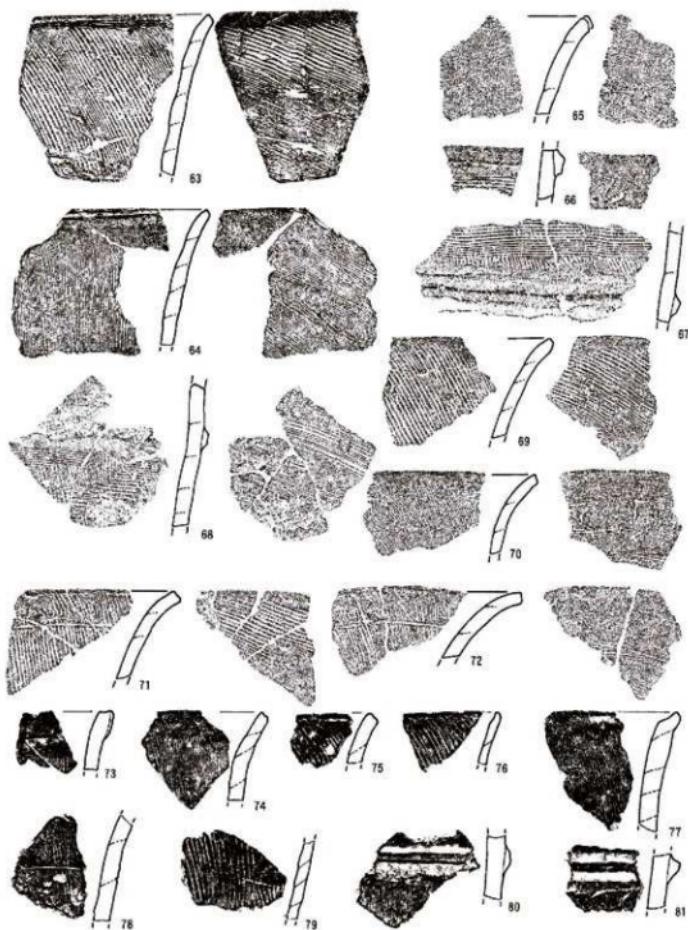
第31図 増輪実測図10

V 遺跡各説



第32図 墓輪実測図2

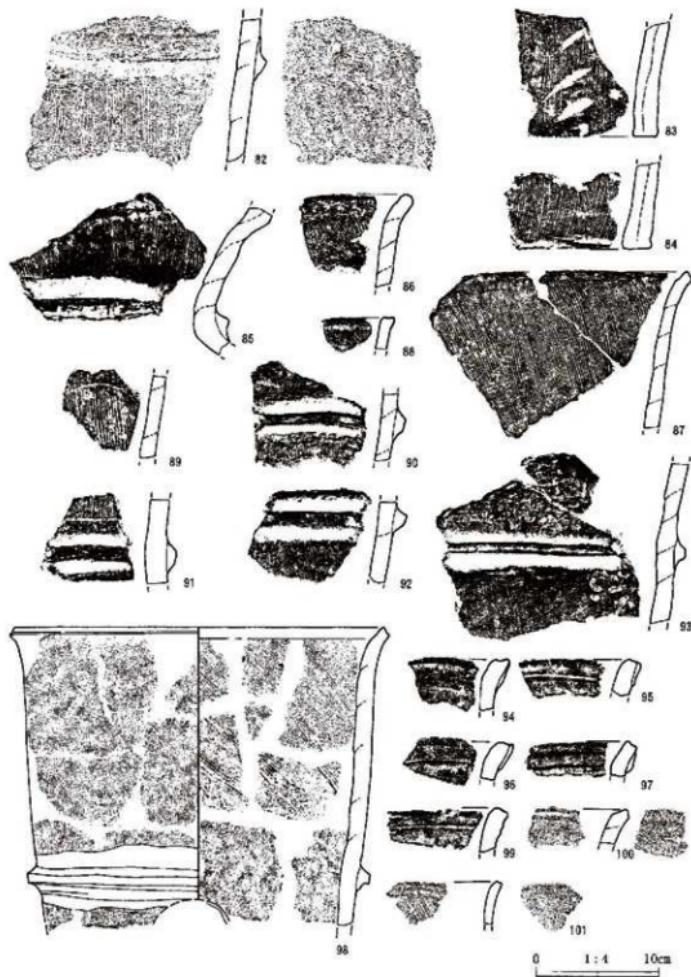
1 築瀬二子塚古墳



第33図 塗輪実測図13

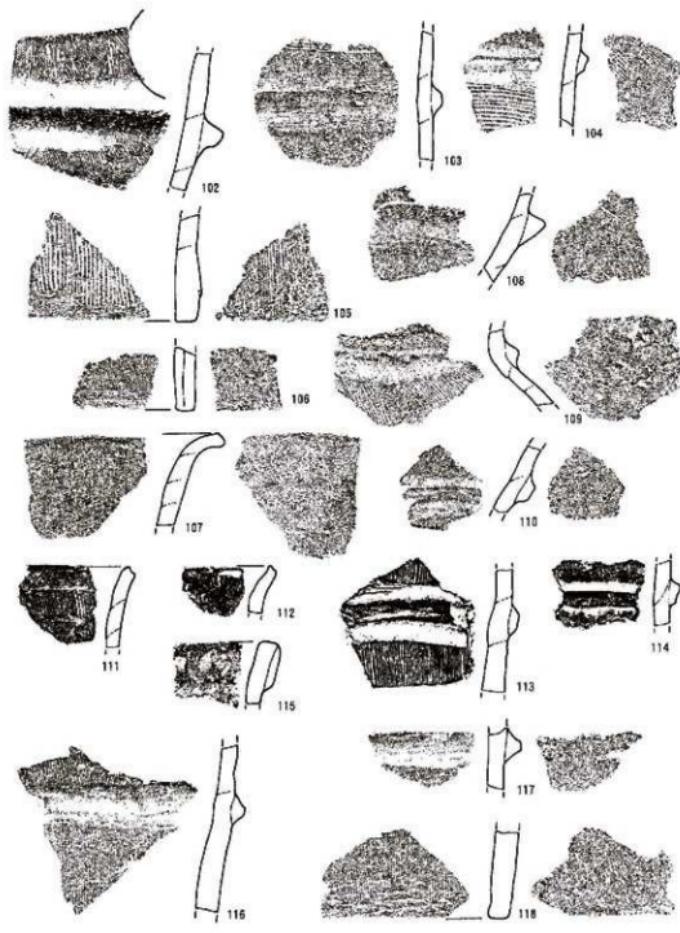
0 1:4 10cm

V 遺跡各説



第34図 地輪実測図10

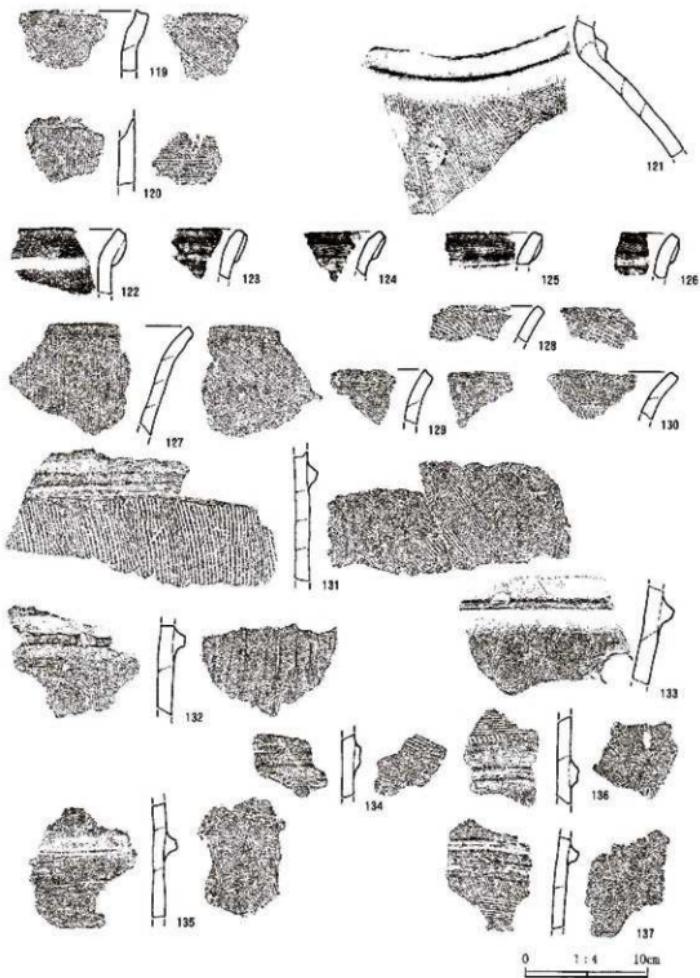
1 篠淵二子塚古墳



0 1:4 10cm

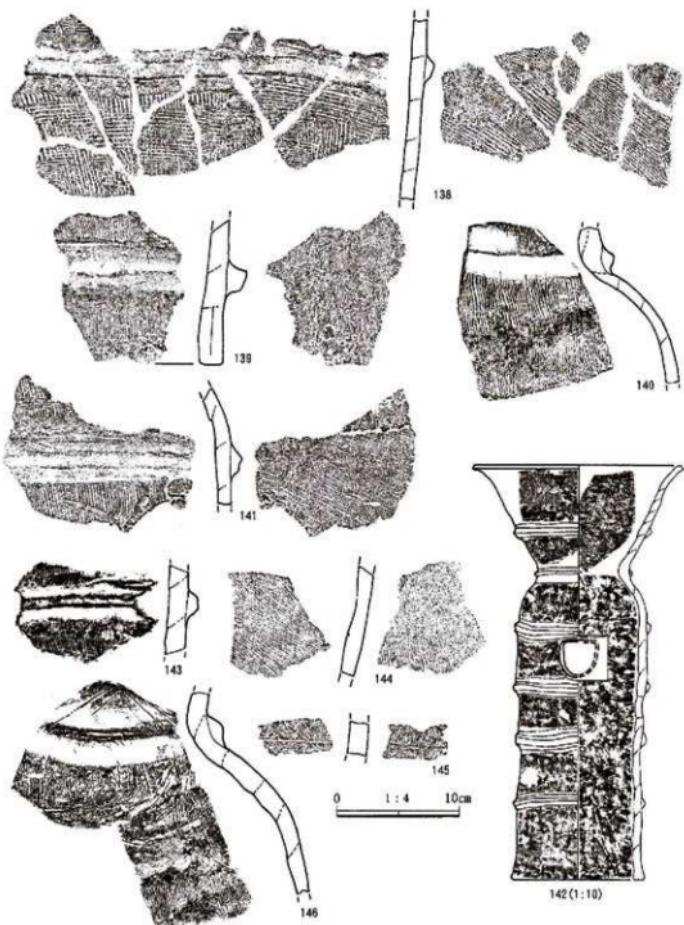
第35図 墓軸実測図(3)

V 滑跡各說



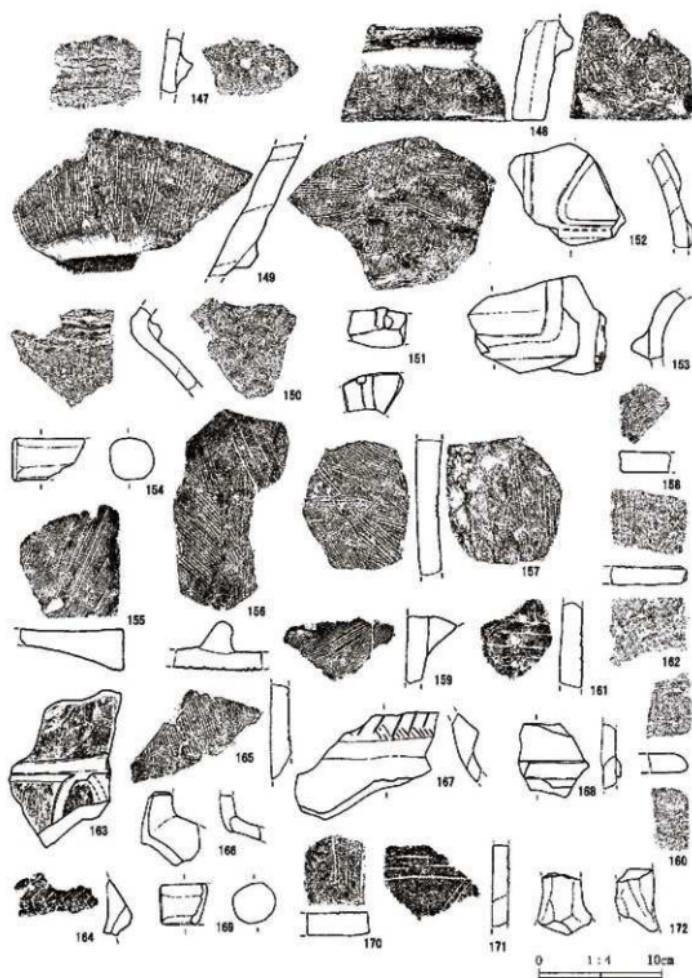
第36図 塗輪実測区09

1 築瀬二子塚古墳



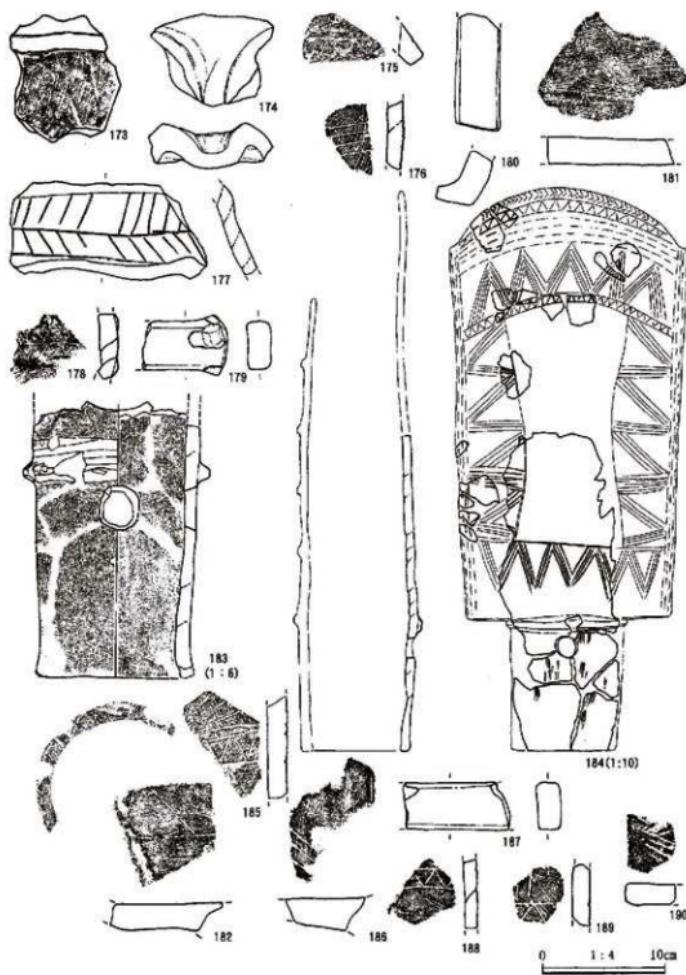
第37図 墓室実測図(7)

V 道跡各説



第38図 塗輪実測図08

1 築瀬二子塚古墳



第39図 墓輪実測図(1)

V 遺跡各説

番号	出土地	断形の特徴	外面刷毛	内面調査	色調・土・法質等
1	14Aトレ遺跡列21	円筒埴輪。凸凹断面は高い台形で1突出部は段間の1/2に位置する。基部は粘土板1枚。	鋸刷毛。	縦の指標で。	明褐色を呈し、出土に片岩・チャート・燧灰質砂岩粒、くされ繊を含む。器高(25cm)、底径25.4cm。
2	14Aトレ遺跡列22	円筒埴輪。凸凹断面は低い台形。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	断続的な斜め指標で、基部横縫で。	赤褐色を呈し、出土にチャート・白色砂粒を含む。器高(18.6cm)、底径26.4cm。
3	14Aトレ遺跡列23	円筒埴輪。凸凹断面は低い台形。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	刷毛目板が残り荒面でよう。	系統的な斜め指標で。	赤褐色を呈し、出土にチャート・褐色岩粒、くされ繊を含むが磨滅されている。器高(16cm)、底径24.8cm。
4	14Aトレ遺跡列24	円筒埴輪。凸凹断面は高い台形。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	斜めの指標で。	明褐色を呈し、出土に大粒のチャートを多量に含み砂質気味。器高(29.2cm)、底径23.4cm。
5	19Aトレ遺跡列6	円筒埴輪。凸凹断面は低い台形。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	系統的な斜め指標で、基部に成形跡の性状が残る。	外曲面褐色、内面淡褐色を呈し、出土に燧灰岩・チャート粒、くされ繊を含む。器高(24cm)、底径25.2cm。
6	19Aトレ遺跡列7	円筒埴輪。凸凹断面は高い台形。基部は幅7cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	系統的な斜めの指標で。	黄褐色を呈し、出土に大粒のチャート粒、くされ繊を含む。器高(29.8cm)、底径24.1cm。
7	19Aトレ遺跡列5	円筒埴輪。凸凹断面台形。基部は粘土板1枚。	鋸刷毛。基部に成形時の横刷毛が残る。	鋸刷毛後に斜めの指標で。	黄褐色を呈し、出土に大粒のチャート粒を多量に含む。器高(24.8cm)、底径24.8cm。
8	19Aトレ遺跡列9	円筒埴輪。凸凹断面は上端が突出する。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	斜めの指標で。	淡褐色を呈し、出土にチャート粒、くされ繊を含む。器高(20cm)、底径26.4cm。
9	19Aトレス跡列10	円筒埴輪。凸凹断面は上端が突出する。基部は幅6.5cm前後の粘土板2枚。	鋸刷毛。	系統的な斜め指標で。	淡褐色を呈し、出土にチャート粒、燧灰質砂岩粒、くされ繊を含む。器高(27.4cm)、底径25.6cm。
10	19Aトレス跡列11	円筒埴輪。凸凹断面台形。3段目に円形透孔。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。基部に成形時の横刷毛が残る。	系統的な斜め刷毛で、基部に成形時の横刷毛が残る。	淡褐色を呈し、出土に大粒のチャート・紀元社を多量に含む。器高(35cm)、底径26cm。
11	19Aトレ遺跡列12	円筒埴輪。凸凹断面台形。3段目に円形透孔。基部は幅8cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	急鋒の指標で、基部は鋸筋の指標で。	黄褐色を呈し、出土に大粒のチャート粒を多量に含む。器高(28cm)、底径26.4cm。
12	19Aトレ遺跡列13	3条4段成形埴輪。凸凹断面は台形で中央が突出。3段目に円形透孔。外側面(辺部)にXの強刻痕。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	1. 双刃斜削 2. 斜削 3. 3段目2 4. 横粗い横刷 5. 1・2段目 6. 網目鋸刷毛。	系統的な斜め刷毛で、1・2段目に斜めの指標でを入れる。 1・2段目 6. 網目鋸刷毛。	淡褐色を呈し、出土にチャート・安山岩粒を多量に含む。器高(30cm)の素形。
13	19Aトレ遺跡列14	円筒埴輪。凸凹断面台形。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	系統的な斜め刷毛で斜めの指標で。	明褐色を呈し、出土にチャート・泥炭粒、角閃石を含む。器高(24.3cm)、底径27.7cm。
14	19Aトレ遺跡列15	円筒埴輪。凸凹断面台形。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	1.段目右方向・2. 段目左方向の斜めの指標で。	赤褐色を呈し、出土に大粒のチャート粒を多量に含み、泥炭粒をやや含む。器高(24.8cm)、底径24.4cm。
15	19Aトレ遺跡列16	円筒埴輪。凸凹断面台形。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	鋸刷毛。	系統的な斜め刷毛。基部は横縫で。	淡褐色を呈し、出土にチャート・白色砂石、くされ繊を含む。器高(25.5cm)、底径26cm。
16	19Aトレ遺跡列17	円筒埴輪。凸凹断面低い台形。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	粗い鋸刷毛。	鋸刷毛後に斜めの指標で。	明褐色を呈し、出土に大粒のチャート・土粒を含む。器高(14.4cm)、底径28.8cm。
17	19Aトレ遺跡列19	円筒埴輪。凸凹断面高い台形。基部は幅6cm前後の粘土板。	鋸刷毛。	斜めの指標で。	褐色を呈し、出土にチャート・褐灰岩粒を含む。器高(18.3cm)、底径21.5cm。

第4表 墓輪観察表(1)

1 築造二子塚古墳

番号	出土場所	器形の特徴	外面経緯	内部調査	色調・胎土・洗浄等
18	B区埴輪列1	円筒埴輪。低位置正面で、断面台形。	被刷毛。	斜めの指撃で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。全体に少々黒。口径27.5cm、基高(18.7cm)。
19	B区埴輪列2	円筒埴輪。凸部正面は高い台形。基部は幅8cm前後の1枚の粘土板。	粗い被刷毛	横の指撃で。	灰色を呈し、全体にひび割れが目立ち、やや風化気味。全体に焼けている。胎土に長石・凝灰岩粒・片岩粒を多少含む。口径25cm、基高(18cm)。
20	B区埴輪列3	円筒埴輪。凸部正面台形。基部は幅4.5cm前後の粘土板。	被刷毛。	斜めの指撃で。	外表面褐色、内面部褐色を呈し、胎土にチャート・凝灰岩粒を含む。底径(18.6cm)、基高(20.8cm)。
21	B区埴輪列4	円筒埴輪。凸部正面心形で上端が突出。基部は幅7cm前後の粘土板。	被刷毛。	斜めの指撃で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート粒・くされ模を作り、通径26.8cm、基高(17.9cm)。
22	B区埴輪列5	円筒埴輪。円形透孔。凸部正面高い台形。赤色強着。	被刷毛。	上段被刷毛。下段後段の指撃で。	赤褐色を呈し、胎土に片岩粒、人粒のチャート粒を含む。基高(20cm)。
23	D区埴輪列51	円筒埴輪。凸部正面台形。基部は幅6.5cm前後の粘土板2枚。	被刷毛。	第1段段の指撃でに基部に焼けた。第2段段毛。	赤褐色を呈し、胎土に大粒のチャート粒を含む。底径30cm、基高(23.8cm)。
24	D区埴輪列52	円筒埴輪。凸部正面三角形。基部は幅4.5cm前後の粘土板。	被刷毛。	横の指撃で。	赤褐色を呈し、胎土に大粒の片岩粒・チャート粒・骨針を含む。腰同所、底径26cm、基高(25.7cm)。
25	D区埴輪列53	円筒埴輪。凸部正面低い台形。基部は幅7.5cm前後の粘土板1枚。	被刷毛。	斜めの指撃で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。底径24cm、基高(22.8cm)。
26	D区埴輪列54・55	円筒埴輪。基部は幅5cm前後の粘土板1枚。	被刷毛。	横の指撃で。	赤褐色を呈し、胎土に人粒のチャートを多量に含む。口径25.4cm、基高(15.3cm)。
27	D区埴輪列56	円筒埴輪。基部は幅4cm前後の粘土板。	2次調整焼成。	横の指撃で。	赤褐色を呈し、胎土に大粒のチャートを含む。底径25.5cm、基高(9.1cm)。
28	D区埴輪列57	円筒埴輪。凸部正面高い台形。基部は幅5cm前後の粘土板。	被刷毛。	所刷毛後にための指撃で。	赤褐色を呈し、所にチャート・凝灰岩粒・骨針を含む。底径27.4cm、基高(17.6cm)。
29	D区埴輪列58	円筒埴輪。凸部正面低い台形。基部は幅7.5cm前後の粘土板。	被刷毛。	所刷毛後に炭の指撃で。	赤褐色を呈し、胎土にくされ模や人粒のチャートを多量に含む。底径28.6cm、基高(17.9cm)。
30	D区埴輪列59	円筒埴輪。凸部正面台形で上端が突出する。基部は幅6.5cm前後の粘土板2枚。	被刷毛。	新刷毛後に斜めの指撃で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・くされ模を含む。底径(26.8cm)、基高(15.7cm)。
31	D区埴輪列60	円筒埴輪。凸部正面台形で上端が突出する。基部は幅5cm前後の粘土板2枚。	被刷毛。	1段目横の指撃で、2段目斜め毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・くされ模を含む。底径(24cm)、基高(15cm)。
32	D区埴輪列61	円筒埴輪。凸部正面台形で上端が突出する。基部は幅6.5cm前後の粘土板。	被刷毛。	被刷毛。	赤褐色を呈し、胎土に人粒のチャートを多量に含む。口径(28.3cm)、基高(16.3cm)。
33	D区埴輪列63-1	円筒埴輪。外に口縁。凸部正面台形で中央が窪む。円形透孔。器耳が2つ。	被刷毛。	被刷毛。	赤褐色を呈し、胎土に凝灰岩・砂岩粒や大粒のチャートを多量に含む。口径41.1cm、基高(23.8cm)。
34	D区埴輪列63-2	円筒埴輪。凸部正面台形で上端が突出する。基部は幅6.5cm前後の粘土板1枚。	粗い被刷毛。	新刷毛的斜面毛後斜面毛。	赤褐色を呈し、硬質。胎土にチャート・凝灰岩・砂岩粒を含む。底径29cm、基高(21.3cm)。

第5表 滋潤観察表(2)

V 漢跡各説

番号	出土地	器 形 の 特 徴	外面調査	内面調査	色調・胎土・法泉等
35	D区埴輪列64	円筒埴輪。凸唇断面高台形で中央が窪む。3段口に円形透孔。基部は幅5cm前後の粘土板。	縦刷毛。	断続的な斜刷毛。	赤褐色を呈し、出土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。底径(23.6cm)、器高(29.5cm)。
36	D区埴輪列65	3条4段の円筒埴輪。凸唇断面高台形。体部に横圓窓を複数。3段口に円形透孔。基部は幅3cm前後の粘土板。	縦刷毛。	第1・2段底の指觸で、第3・4段斜刷毛。	赤褐色を呈し、内外面に黒色の付着あり。胎土に大粒のチャートを多量に含む。底径(26.8cm)、器高(22cm)。
37	D区埴輪列66	円筒埴輪。凸唇断面高い台形。基部は幅5.5cm前後の粘土板1枚。	縦刷毛。	第1・2段底の指觸で。第3段斜刷毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。底径(26.8cm)、器高(22cm)。
38	D区埴輪列67	円筒埴輪。凸唇断面高い台形。基部は幅4.5cm前後の粘土板1枚。	縦刷毛。	基部横張で。その上・片岩粒、骨片を含む。胎土の指触で。	明褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨片の炭化物を含む。底径(22.6cm)、器高(27.7cm)。
39	D区埴輪列68	円筒埴輪。凸唇断面高台形。3段口に円形透孔。基部は幅3cm前後の粘土板1枚。	縦刷毛。	2・3段目右方指向・1段目左方向の斜めの指触で。	明褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。底径(33.1cm)、器高(25.6cm)。
40	D区埴輪列69	円筒埴輪。凸唇断面高い台形。基部は幅5cm前後の粘土板。	縦刷毛。	縦の指触で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、事状の炭化物を含む。底径(25.4cm)、器高(21cm)。
41	D区埴輪列70	円筒埴輪。凸唇断面高い台形。基部は幅7cm前後の粘土板。	縦刷毛。	斜めの指触で。	外側赤褐色。内面灰褐色を呈し、胎土上にチャート・片岩粒、白色物を含む。底径(25.4cm)、器高(15.8cm)。
42	D区埴輪列73	円筒埴輪。山型断面台形で上部がやや突出する。基部は幅5.5cm前後の粘土板2枚。	縦刷毛。	横張の指触で。	明褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、くされ縫を含む。底径(24.8cm)、器高(18.7cm)。
43	D区埴輪列74	円筒埴輪。基部は幅5cm前後の粘土板。	縦刷毛。	斜めの指触で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒を含む。底径(23.6cm)、器高(8cm)。
44	12Aトレ付埴輪列31	1周輪埴輪。基部は粘土板2枚。	縦刷毛。	斜めの指触で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒を多量に含む。底径(26.5cm)、器高(8.8cm)。
45	12Aトレ付埴輪列32	円筒埴輪。凸唇断面高い台形。基部は幅6cm前後の粘土板1枚。	縦刷毛。	斜めの指触で。	赤褐色を呈し、胎土上に轉写されるが、チャート・石英粒を含む。底径(24.7cm)、器高(11.3cm)。
46	5トレ9区基石下	円筒埴輪口被部。口辺部で強く外反する。滑部は平坦。	横張で。	上部横張で、下部横刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。
47	5トレM 1・2区上層	円筒埴輪。円形透孔。	縦刷毛。	横刷毛。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、白色物を含む。
48	5トレB軽石上	円筒埴輪。	斜刷毛後に横刷毛。	横刷毛。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、白色物を多量に含む。
49	5トレ13区上層	円筒埴輪。凸唇断面台形で中筋目直が強く突起である。	斜刷毛の指触で。	赤褐色を呈し、胎土は轉写され、滑部は硬質。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。
50	5トレ内上	円筒埴輪基部。	縦刷毛。	斜刷毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。
51	5トレM 1・2区上層	円筒埴輪基部。凸唇断面は低い台形。基部は幅4.5cm前後の粘土板。	縦刷毛。	凸唇より上は斜刷毛。下は横張で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。
52	8トレ北3区田畠	円筒埴輪口被部。口辺部で強く外反する。滑部は平坦。	縦斜刷毛。	横横刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。
53	8トレ北4区田畠	円筒埴輪口被部。	横刷毛。	横刷毛。	黄褐色を呈し、胎土にくされ縫を含む。
54	8トレ北9区田畠	円筒埴輪。円形の小fim。	縦刷毛。	横刷毛。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒、くされ縫を含む。

第6表 塩輪調査表(3)

1 斎滿二子塚古墳

番号	出土地	原形の特徴	外削調整	内削調整	色調・胎土・量等
55	8トレ北4区中層	円筒埴輪、凸面は幅広く、所 面台形、外面は赤色旋彩。	斜削毛。	横削毛。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・雲母粒を含む。
56	8トレ8区B上	円筒埴輪、凸面前面は低い台 形。円筒造孔。	縱削毛。	縱削毛後に、底の 指圧で。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・雲母粒を含む。
57	8トレB側石上	円筒埴輪、凸面断面台形。	縱削毛。	縱削毛後に、底の 指圧で。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・粒、白色鉱物、赤色鉱物を含む。
58	4トレ北	円筒埴輪、凸面断面三角形。	縱削毛。	横削で。	褐色を呈し、胎土に片岩、チャート粒、骨針を含む。藤園産。
59	F区50区III層	円筒埴輪口唇部。外反口縁で 端部は壓む。	縱削毛。横削 でを一字の縫で。	斜削毛後に、横削 で。	暗褐色を呈し、胎土に片岩、チャート粒、骨針を含む。焼成は硬質・藤園産。
60	6BトレM2上	円筒埴輪、凸面断面台形。半 円溝孔。	斜削毛。	横削で。	淡褐色を呈し、胎土に大粒の 片岩・チャート粒、骨針。くされ繊を含む。藤園産。
61	6BトレM2上	円筒埴輪底部。基部は幅5.5cm 底後の約十枚の折り重し。	縱削手。	横削で。	淡褐色を呈し、胎土に大粒の 片岩・チャート粒、骨針を含む。藤園産。
62	14Aトレ23	円筒埴輪口縁部。外反口縁で 口縁部はやや壓む。	斜削手。	粗い斜削毛。	褐色を呈し、胎土は薄造され、 チャートを含む。
63	19Aトレ埴輪列14	円筒埴輪口縁部。外反口縁。 窓の斜削毛。	口辺上部斜削毛。 下部粗い斜削毛と 横削で。	黃褐色を呈し、胎土に人粒の チャート・石英粒を多量に含む。	
64	D区66	円筒埴輪口縁部。外反口縁。	斜削毛。	斜削毛。	赤褐色を呈し、胎土に片岩、 チャート粒を含む。藤園産。
65	19Aトレ47	円筒埴輪口縁部。外反口縁。 外面に一の線彫。	縱削毛。	斜削毛。	赤褐色を呈し、胎土に褐灰岩・チャート粒を含む。
66	19Aトレ埴輪列13	円筒埴輪。凸面断面台形。	横削毛。	横削で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート粒、くされ繊を含む。
67	19Aトレ埴輪列13	円筒埴輪。凸面断面台形。	1次縱削毛。 2次橫削毛。	斜削毛後に横の指 圧で。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・粒を含む。
68	19Aトレ埴輪列6	円筒埴輪。凸面断面低い台形。	1次縱削毛。 2次橫削毛。	斜削毛。	褐色を呈し、胎土にチャート粒、角閃石、くされ繊を含む。
69	19Aトレ埴輪列13	円筒埴輪口縁部。外反口縁。 外面に赤色旋彩。	粗い斜削毛。	口辺上部粗い斜削 毛、下部横削で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。
70	19Aトレ埴輪列17	朝顔形埴輪口縁部。外面赤色 旋彩。	斜削毛。	粗い斜削毛。	褐色を呈し、胎土にチャート粒、くされ繊を含む。
71	19Aトレ埴輪列8	朝顔形埴輪口縁部。外面に一 の線彫。	窓の斜削毛。	口辺上部粗い斜削 毛、下部横削で。	褐色を呈し、胎土は薄造され、 チャート粒を含む。
72	19Aトレ6区2層	朝顔形埴輪口縁部。外面赤色 旋彩。	縱削毛。	口辺上部横削で、 下部粗い斜削毛。	黃褐色を呈し、胎土に大粒の チャート粒を含む。
73	3トレ周18盛土	円筒埴輪口縁部。貼付口縁で、 口縁部がやや壓む。	縱削毛。	口辺上部横削で、 下部斜削毛。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・粒、骨針を含む。藤園産。
74	3トレ周兼田中層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、 口縁部がやや壓む。	縱削毛。	口辺上部横削で、 下部斜削毛。	暗褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針、くされ繊を含む。藤園産。
75	3トレ周18盛土	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、 口縁部がやや壓む。	粗い斜削毛。	口辺上部横削で、 下部斜削毛。	黃褐色を呈し、胎土にチャート・粒、纏砂粒を含む。
76	3トレ周17田上層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、 内窓がやや壓む。	粗い斜削毛。	口辺上部横削で、 下部斜削で。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・粒、石英粒を多量に含む。
77	3トレ周17田上層	円筒埴輪口縁部。内窓口縁で、 端部は突出する。	縱削手。	口辺上部横削で、 下部斜削毛。	黃褐色を呈し、胎土にチャート・粒、砂粒、白色鉱物を多量に含む。焼成は硬質。
78	3トレ周B上	円筒埴輪。外面に一の線彫。	縱削毛。	斜削毛。	暗褐色を呈し、胎土にチャート・粒、白色鉱物、骨針を多量に含む。

第7表 塩輪観察表(4)

V 遺跡各説

番号	出土地	器形の特徴	外面調査	内面調査	色調・胎土・法螺等
79	3トレ周18田盛土	円筒埴輪。斜削毛。	斜削毛。	紙の指撫で。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
80		円筒埴輪。凸帯断面台形で下端が突出する。	斜削毛。	凸帯より上は紙の指撫で、下は斜削毛。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
81	3トレ周17田下層	円筒埴輪。凸帯断面丸みを持った高い台形。	斜削毛。	紙無地。	褐色を呈し、胎土にチャート粒、白色鉱物を含む。
82	3Aトレ7区IIb層	円筒埴輪。凸帯断面三角形。	斜削毛。	斜めの指撫で。	外表面灰褐色、内面褐色を呈し、胎土に大粒の片岩・チャート粒を含む。淡褐色は底質。藤岡産。
83	3トレ・M1	円筒埴輪底部。基部は幅9.5cm 前後の粘土板の折り返し。	斜削毛。	痕と斜めの指撫で。	淡褐色を呈し、胎土に片岩粒、骨針、くされ縫を含む。藤岡産。
84	3トレ・S M1	円筒埴輪底盤。高部は幅7cm 前後の粘土板の折り返し。	斜削毛。	紙の指撫で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
85	3トレ周18田下層	瓶形埴輪暗頂部。凸帯断面三角形。外面赤褐色。	斜削毛。	頭部横削毛。堆合部横無地、肩部横撫で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針、くされ縫を含む。藤岡産。
86	2トレIII層	円筒埴輪口縁部。外反口唇で、口唇部が丸い。	斜削毛。	口辺上部横撫で、下部横削毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
87	2トレ11基	円筒埴輪口縁部。外反口唇で、口唇部がやや窪む。	斜削毛。	口縁部横撫で、口辺部斜削毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。淡褐色は底質。藤岡産。
88	2トレ周9田上層	円筒埴輪口縁部。外反口唇で、口唇部が窪む。	斜削毛。	口縁部横削毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。白色鉱物を含む。
89	2トレ1III上層	円筒埴輪。外面にへ形の線刻。	斜削毛。	斜削毛	明褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
90	2トレ周8II・III中層	円筒埴輪。凸帯断面台形。	斜削毛。	凸帯上よりは紙の指撫で、下は斜削毛。	外表面黄褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。淡褐色は底質。白泡気味。藤岡産。
91	2トレ周8III中層	円筒埴輪。凸帯断面台形で上端がやや突出する。	斜削毛。	紙の指撫で。	外表面赤褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。淡褐色は底質。白泡気味。藤岡産。
92	2トレB上	円筒埴輪。凸帯断面高い台形。	斜削毛。	紙の指撫で。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。くされ縫、砂粒を多量に含む。
93	2トレ周9III中層	円筒埴輪。凸帯断面高い台形。	斜削毛。	凸帯より上は斜めの指撫で、下は斜削毛。	淡褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
94	B区	円筒埴輪口縁部。貼付口縁で口唇部は窪む。	横撫で。	口辺上部横撫で、下部斜削毛。	褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
95	B区表土	円筒埴輪口縁部。貼付口縁で口唇部はやや窪む。	横撫で。	横撫で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。藤岡産。
96	B区X18区II層	円筒埴輪口縁部。貼付口縁で口唇部はやや窪む。	横撫で。	横撫で。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒、くされ縫を含む。藤岡産。
97	B区表土	円筒埴輪口縁部。貼付口縁で口唇部は窪む。	貼付 斜 横 斜 毛。	横撫で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。
98	B区5区II層	円筒埴輪口縁部。外反口縁。凸帯断面高い台形。円形透孔。	口辺 斜 横 斜 毛。凸帯より下1次斜削毛。 2次横削毛。	口辺部斜切毛。凸帯より下紙の指撫で。凸帯裏部に2段の指撫痕。	外表面赤褐色、内面灰褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒、泥岩粒を含む。

第8表 墳輪観察表(5)

1 築造二子塚古墳

番号	出土地	器形の特徴	外側鉢底	内側鉢底	色調・胎土・法蓋等
99	B区14区II層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で口唇部はやや窪む。	横幅で。	粗い横刷毛。	褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
100	B区21区II層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で口唇部は尖る。	斜刷毛。	粗い斜刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。
101	B区40区II層	円筒埴輪口縁部。外反口縁。	粗い斜刷毛。	斜刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。
102	B区16区II層	円筒埴輪。凸薄断面高い台形で、上端が突出する。凸形透孔。	斜刷毛。	横の指擦で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒・骨粉を含む。藤岡産。
103	B区33区II層	円筒埴輪。凸薄断面台形で、中央は丸い。外面に一の線刻。	斜刷毛。	凸部より上斜刷毛、下横刷毛。	外表面褐色、内面灰色を呈し、胎土に大粒の片岩粒、くされ縫を含む。藤岡産。
104	B区3区II層	円筒埴輪。凸薄断面台形で、上端が突出する。	1次線刷毛、2次横刷毛。	凸部より上斜刷毛、下横刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、くされ縫を含む。
105	B区埴輪列3	円筒埴輪底部。蓋部は幅6cmほどの胎土板。	粗い斜刷毛。	斜刷毛。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。
106	B区北西表土	円筒埴輪底部。基部は沿土版の折り返し。	所定的な斜刷毛。	指擦で。	外表面褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート灰・白色粘物を含む。
107	B区14区II層	輪郭形埴輪口縁部。	斜刷毛。	横幅で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、纏かい骨粉、くされ縫を含む。藤岡産。
108	B区6区II層	輪郭形埴輪口縁部。凸薄断面三角形。	斜刷毛。	斜刷毛と横幅で。	外表面褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート灰・白色粘物、藤岡産。
109	B区16区II層	輪郭形埴輪頭部。凸薄断面三角形。	斜刷毛。	横の指擦で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート灰を含む。
110	B区40区II層	輪郭形埴輪口縁部。凸薄断面台形で、中央がやや窪む。	斜刷毛。	横幅で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート灰・片岩粒・砂玉を含む。
111	Iトレ2田層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、口唇部がやや窪む。	斜刷毛。	口唇部横刷で、口辺部斜刷毛。	暗褐色を呈し、胎土にチャート灰・白い粘物を多量に含み、全体に砂質気味。
112	Iトレ10田層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、口唇部内側が上方につまみ上げられる。	斜刷毛。	口唇部横刷毛で、口辺部斜刷毛。	暗褐色を呈し、胎土にチャート灰・砂玉・砂質粘物を含み、全体に砂質気味。
113	IトレB上	円筒埴輪。凸薄断面台形で山尖がやや窪む。	斜刷毛。	凸部上は斜刷毛、下は紙の指擦で、凸部部は横刷毛で。	外表面褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。焼成は硬質・藤岡産。
114	Iトレ9田下層	円筒埴輪。凸薄断面台形で上端が突出する。	斜刷毛。	斜刷毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨粉を含む。焼成は硬質・藤岡産。
115	A区14	円筒埴輪口縁部。胎土口縁で貼付跡が広い。	横幅で。	横幅で。	褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
116	A区2区II層	円筒埴輪。凸薄断面高い台形で、中央が丸みをもつ。	斜刷毛。	斜刷毛。	褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
117	A区7区II層	円筒埴輪。凸薄断面高い台形で、中央がやや窪む。	斜刷毛。	横幅で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨粉を含む。藤岡産。
118	A区5区II層	円筒埴輪底部。	所定的な斜刷毛。	斜めの指擦で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
119	10トレB上	円筒埴輪口縁部。外反口縁、頸部で内写する。	斜刷毛。	斜刷毛。	外表面褐色、内面灰色を呈し、胎土にチャート灰を含む。
120	10トレB上	円筒埴輪。外面に一の線刻。	斜刷毛。	斜刷毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。藤岡産。
121	10Aトレ38区田層	輪郭形埴輪頭・肩部。凸薄断面二角形。	斜刷毛。	頸部横刷で、肩部斜刷毛。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・石英粒を含む。焼成は硬質。

第9表 埋輪観察表(6)

V 滝 跡 各 説

番号	出 土 地	縁 形 の 特 徴	外面調整	内面調整	色調・沾土・状態等
122	D区33区田層	内面埴輪口縁部。貼付口縁で貼付中央は丸みをもつ。	貼付部削除毛、 口縫部削除毛、 下部斜削毛。	口縫上部横削で、 下部斜削毛後に横 削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。焼成は硬質。
123	D区34区田層	内面埴輪口縁部。貼付口縁。	貼付部削除毛、 口縫部削除毛。	口縫上部横削で、 下部斜削毛。	褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。難開窓。
124	D区29区田層	内面埴輪口縁部。貼付口縁。	貼付部削除毛、 口縫部削除毛。	横削で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。難開窓。
125	D区40区田層	内面埴輪口縁部。貼付口縁。	貼付部削除毛、 口縫部削除毛。	横削で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。難開窓。
126	D区29区田層	内面埴輪口縁部。貼付口縁。	貼付部削除毛、 口縫部削除毛。	横削で。	褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。難開窓。
127	D区66	内面埴輪口縁部。外反口縁、 口唇部はやや窪む。	斜削毛。	口縫上部斜削毛、 下部横削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。少許気泡味。
128	D区11区IIa層	内面埴輪口縁部。外反口縁。	粗い斜削毛。	粗い斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土は構造され、チャート粒を含む。
129	D区11区IIb層	内面埴輪口縁部。外反口縁。 外面赤色彫形。	横削で。	横削で。	赤褐色を呈し、沾土は構造され、チャート粒を含む。
130	D区33区II層	内面埴輪口縁部。外面赤色彫形。	斜削毛。	横削で。	赤褐色を呈し、沾土は構造され、チャート粒を含む。
131	D区63	内面埴輪。凸帯所高い台形で、上端が突出する。	斜削毛。	斜削毛後に炭の指 標で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・硬灰質砂岩。白色鉱物を含み、砂質気泡。
132	D区	内面埴輪。凸帯断面高い台形、透孔。	粗削毛。	炭の指標で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート粒、白色鉱物を含む。焼成は硬質。
133	D区69	内面埴輪。凸帯断面高い台形、 小円形透孔。	斜削毛を已底が改く偏削でふう。	炭の指標で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒を含む。難開窓。
134	D区30×田層	内面埴輪。凸帯所低い台形で中央がやや窪む。外面赤色彫形。	斜削毛。	斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・硬灰質砂岩を含む。
135	D区68	内面埴輪。凸帯所高い台形で、下端が突出する。	粗削毛目直が浅く底削でふう。	斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート粒、白色鉱物を含む。外面に黒色の付着物。
136	D区3区II層	内面埴輪。凸帯所平台形で中央がやや窪む。外面赤色彫形。	1次粗削毛、 2次横削毛。	凸唇より上斜削 毛、下横削。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・硬灰質砂岩を含む。
137	D区56	内面埴輪。凸帯所高い台形で、上端が突出する。外面赤色彫形。円形透孔。	1次粗削毛、 2次横削毛。	横削で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート粒、くされ縫を含む。焼成は硬質。
138	D区51	内面埴輪。凸帯所高い台形で、上端が突出する。円形透孔。	1次粗削毛、 2次横削毛。	斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・石英粒を含む。
139	D区北西表土	内面埴輪底部。凸帯断面高い台形で、上端が突出する。基部は折り返した幅3cm前後の船底板。	粗削毛。	炭の指標で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート粒を多量に含み、くされ縫も含む。
140	D区17	朝鮮形埴輪底部。凸帯断面二角形。外面赤色彫形。	斜削毛。	頭部横削で、肩部斜めの指標で。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒、骨針、くされ縫を含む。焼成は硬質。難開窓。
141	D区34区田層	朝鮮形埴輪底部。凸帯断面台形で上端が突出する。外面赤色彫形。円形透孔の上部に粘土紐。	斜削毛。	肩上部横削で、下部斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート粒を含む。
142	D区33区田層	朝鮮形埴輪。口縫部・断面・ 1枚目の凸帯所前三角形、その他の凸帯所台形。3・4枚目に半円形の透孔。	斜削毛。	口縫部斜削毛、 部横削。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒、骨針、くされ縫を含む。難開窓。断面35.6cm、口囲43.2cm、英径27.2cm。
143	12Bトレ周IV層上	内面埴輪。凸帯所平台形で、中央が窪む。	斜削毛。	斜削毛。	赤褐色を呈し、沾土にチャート・片岩粒、骨針を含む。難開窓。

第10表 塩輪観察表(7)

1 窪瀬二子塚古墳

番号	出土品	器形の特徴	外面調査	内面調査	色調・胎土・法量等
144	17トM-1下唇	円筒埴輪。外側に一の線刻。	鉢刷毛。	鉢刷毛。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
145	C区28区II層	円筒埴輪。外側にXの線刻。	鉢刷毛。	横撫で。	外表面赤色、内面灰褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒を含む。蓋開窓。
146	12HトN-3区III層中	帆船形埴輪舟一羽前。凸帯断面三角形。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
147	13トレ周4区III層	円筒埴輪。内面断面V形で、上端が突出する。透孔。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート粒、くされ縫を含む。
148	13トレ周4区D-5	円筒埴輪底部。内面断面V形で、胎土部は片岩のザリ返り。	鉢刷毛。	斜めの毛撫で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。
149	13トレ周6区III層	帆船形埴輪口縁部。凸帯断面台形。外側赤色変形。	鉢刷毛。	口縁上部斜面毛、下部斜面撫で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針、くされ縫を含む。蓋開窓。
150	13トレ周5区III層	帆船形埴輪舟一羽前。凸帯断面台形。外側赤色変形。	鉢刷毛。	斜めの毛撫で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。傾成せ底質。蓋開窓。
151	6トレ周B上	人物軀、実接法。	横撫で。		青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
152	6トレ周B上	馬、隙歛部分。	輪郭部剥突。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。
153	6トレ周B上	馬、鞍部分。若二絆で胎本を表現。	横撫で。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
154	14Aトレ10区II層	家、腰魚本部分。	横撫で。		青褐色を呈し、胎土は稍過され、チャート粒、くされ縫を含む。
155	14Aトレ4区II層	家、腰板部分。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート粒、泥斑を含む。
156	14AトレII層	表、上部内外に網眼文を施す。外側赤色変形。	筋状的な斜面毛。	横の毛撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
157	14Aトレ8区II層	表、外区上間に網眼文を施す。外側赤色変形。	筋状的な斜面毛。	鉢刷毛。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、白色變物を含む。蓋開窓。
158	14AトレII層	表、外区に網眼文を施す。外側赤色変形。	鉢刷毛後。	鉢刷毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。蓋開窓。
159	14Aトレ3区II層	表、沈拂で外区全區面。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。蓋開窓。
160	14Aトレ10区II層	表、外区は2本の平行沈拂線による縦取りと輪郭。	鉢刷毛。	鉢刷毛。	青褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、蓋状炭化物を含む。蓋開窓。
161	19Aトレ6区II層	表、外区に平行沈拂線を直交させる。	横撫で。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。
162	19Aトレ造輪98-II層	表、外区は平行沈拂線。練は胎土貼付。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート・泥炭粒を含む。
163	9トレB上	全身立像人物の頭部。粘土板により耳朧を表現。全体に白色変形。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土に大粒のチャート・片岩粒、骨針を含む。蓋開窓。
164	9Aトレ7区III層	人物。練板に被杉文、断面は三角形。	横撫で。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土に片岩・泥炭性を多量に含む。蓋開窓。
165	B区II層	表、網眼文により内区と外区を分ける。外側赤色変形。	鉢刷毛。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土にチャート粒を多量に含む。
166	A区8	人物首～脚部。白色変形。	丁寧な撫で。	横撫で。	青褐色を呈し、胎土に練済され、チャート粒を含む。

第11表 滋輪観察表(8)

V 遺跡各説

番号	出土地	器形の特徴	外削調整	内削調整	色調・土質・状況等
167	A区2区II層	人物。腰紐は縦の平行沈鉛、断面は乍角形。	鋸削削毛。表層は粗削毛。	横削で。	暗褐色を呈し、胎土に片岩・チャート・青岩粒を含む。薄肉質。
168	A区15区II層	人物。粘土紐部分が赤茶色、その他の白色と黒色混在。	丁寧な削で。紐の粗削毛。	横削で。	暗褐色を呈し、胎土は厚さあれ、チャート粒、くされ砂を含む。
169	A区2	家、堅魚木部分。赤色染影。	丁寧な削で。	横削で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート・藍灰色地を含む。
170	A区5区II層	床、外区は1本の平行沈鉛による縫取り。外縁が赤茶色。	横削削毛後に磨で。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を含む。薄肉質。
171	A区3区II層	床、外区上部は断続的な平行沈鉛と継ぎ文。	粗削毛。	横削で。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩・青岩粒、くされ砂を含む。薄肉質。
172	10トレ蓋石中段	人物。手。	削で。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土は厚さあれ、チャート粒を含む。
173	10トレB上	全身立像人物の脚部。粘土紐により足踏を表現?	粗削毛。	横削で	黄褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を多く含む。薄肉質。
174	10トレB上	全身立像人物の尻腰付け根部	横削で。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土に大粒の片岩・チャート粒を含む。薄肉質。
175	10トレB上	人物。腰部に堅魚木。	横削で。	横削で。	明褐色を呈し、胎土にチャート粒、白色物を含む。
176	D区40区II層	底、蓋側に平行沈鉛文。	粗削毛。	横削で。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・瓦岩粒を含む。
177	IIAトレ4	人物。腰紐は透杉木で赤色染影。	削で。	削で。	半褐色を呈し、胎土に大粒の片岩・チャート粒、白色物を含む。薄肉質。
178	IIAトレ中段II層	人物。腰に2段の継ぎ文を施す。	削で。	削で。	半褐色を呈し、胎土に片岩・堅岩粒を多量に含む。薄肉質。
179	IIAトレ上段	人物。付属の大刀柄頭。	丁寧な削で。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土に構造され、チャート・瓦岩粒を含む。
180	IIAトレ	家、基部。	丁寧な削で。	削で。輪削痕。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・泥岩粒、白色物を含む。
181	IIAトレ上段	家、屋根部分。	斜削毛。	断続的な削で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・泥岩粒を含む。
182	IIAトレ中段	入版床底東尾頭部分。腰紐は横縫に堅魚木を施し、堅魚木内に赤色染影。	断続的な斜削毛。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・泥岩粒を含む。
183	IIAトレ41	底、基部。内側断面高い台形、円形透孔。	粗削毛。刃痕が長いもの。	粗削毛でふくらみ。	半褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を多量に含む。薄肉質。
184	IIAトレ42	底。腰側に丁字形に区画し、内区上辺は誤曲文の堅魚木で区画。外区は例重ねを施し、上辺に透杉木と堅魚木を施す。	断続的な斜削毛。	断続的な削で。	半褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒・骨片を含む。薄肉質。高さ(11.5cm)、底径21.5cm、最大幅(49cm)。
185	IIAトレ9区II層	底、内区上辺は堅魚木で区画。外区に堅魚木。全面に赤色染影。	粗削毛。	肩の粗削で。	半褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒、白色物を含む。薄肉質。
186	IIAトレ8区II層	底、外区に堅魚木。	斜削毛。	斜削毛。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・泥岩粒を含む。
187	12トレ9区III層	人物。付属の大刀。赤色染影。	丁寧な削で。	横削で。	黄褐色を呈し、胎土は構造され、チャート粒を含む。
188	12Aトレ2区II層	底、内区上辺は堅魚木で区画。	斜削毛。	削で。	明褐色を呈し、胎土にチャート・泥岩・堅岩粒を含む。
189	12Aトレ2区II層	底、内区上辺は堅魚木、外区に堅魚木。	斜削毛。	横削で。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を含む。薄肉質。
190	12Aトレ上	底、外区は堅魚木。	削で。	粗削毛。	明褐色を呈し、胎土に片岩・チャート・瀬灰岩粒を含む。薄肉質。

第12表 横輪観察表(9)

鉄製品**直刀（第40図1）**

後円部埴頂にある石碑の脇から出土している。小森谷家に伝わる「石室の発掘調査後に後円部頂上に出上品の一部を埋めた。」話に該当する遺物である。

刀子（第40図2）

鹿角袋の革。

石突（第40図3）

石突または矛の袋状の縁辺部と推定される。

鉄錐（第40図4～8）

4～6は長三角形錐の錐身で、5は片逆刺。

弓両頭金具（第40図9）

両端面は平坦になっている。

小札（第40図10～18）

小札の頭部形は2種類に分類される。一つは偏円頭系で鍼孔一列が10～12で、幅2.5cm前後を測る。二つ目は円頭系で鍼孔二列4個が15・16である。幅が1.9cm前後あることから17・18も同じ系列と考えられる。

馬具（第40図19～36）

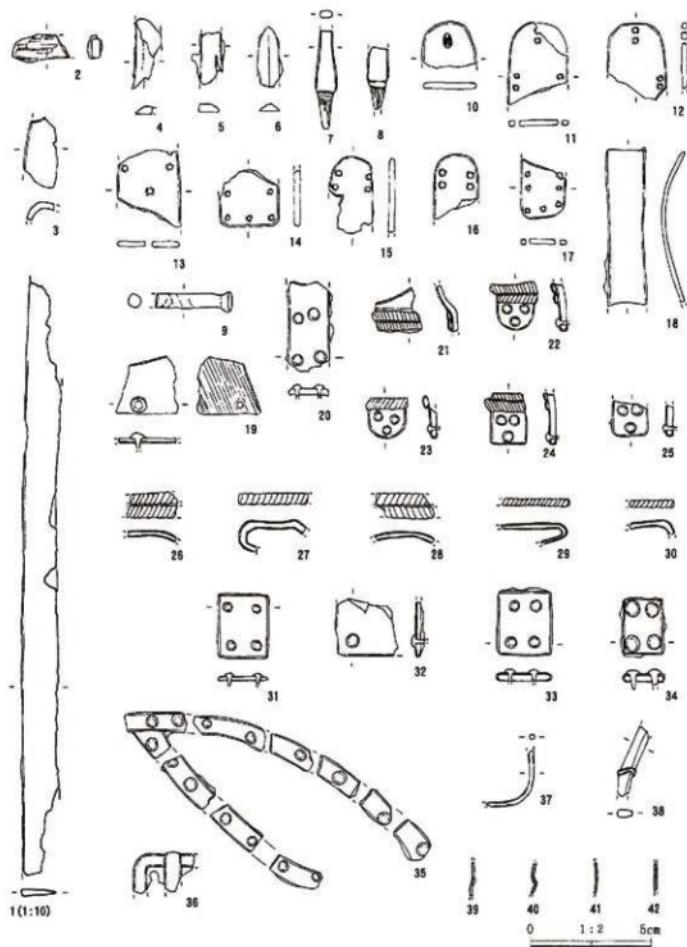
19・20は裏面に木質痕があることから木芯鉄板張蓋鏡の側板と推定される。21～25は辻金具の脚部で、鉄地金銅張。26～30は辻金具の資金具で鉄地銀張である。脚部は円頭形の22・23、方形の24・25がある。資金具の大きさから大小の2種類がある。31～34は帶金具で、鉄地金銅張が32～34、青銅製が31である。35は小破片になっているが鞍緑金具と考えられる。

その他（第40図37～42）

37は断面が円形で釣針と考えられる。39は断面が方形を呈し、針と推定される。また、39～42は細い針金を撲ったもので、使用目的は不明である。

(志村 哲)

V 遺跡各説



第40図 金器製品実測図

1 篠瀬二子塚古墳

番号	器種	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	大刀	(122.5)	7.5	1.5		
2	刀子	(8.3)	3	1	(1.7)	虎角鉄。
3	矛又は石突	(2.9)	(1.4)	0.25	(4.2)	
4	鉄鎌	(2.8)	(1.0)	0.3	(2.0)	馬三角形鐵で短い逆鉤。
5	鉄鎌	(2.2)	0.8	0.4	(2.1)	馬三角形鐵で短い逆鉤。
6	鉄鎌	(2.5)	0.9	0.3	(3.0)	馬三角形鐵。
7	鉄鎌	头部(2.5) 茎部1.6	頭部0.5 茎部0.4	頭部0.2	(2.9)	頭部～茎部。
8	鉄鎌	头部(1.4) 茎部(1.3)	頭部0.8 茎部0.5	頭部0.2	(1.7)	頭部～茎部。
9	弓向頭金具	(3.2)		0.5	(2.5)	
10	小札	(1.8)	2.3	0.2	(2.0)	側面頭系、鍼孔一列、社痕。
11	小札	(3.4)	2.4	0.2	(5.25)	側面頭系、鍼孔一列。
12	小札	(3.1)	2.5	0.2	(3.3)	側面頭系、鍼孔一列。
13	小札	(3.2)	2.7	0.2	(5.8)	
14	小札	(2.4)	2.6	0.2	(4.6)	
15	小札	(3.2)	1.9	0.2	(3.65)	円頭系、鍼孔二列4個。
16	小札	(2.6)	1.85	0.2	(3.6)	円頭系、鍼孔二列4個。
17	小札	(2.5)	1.8	0.2	(3.1)	
18	小札	(6.5)	1.6	0.15	(11.2)	腰札。
19	木芯鉄板張合蓋	(2.5)	(2.4)	0.2	(3.5)	資金具、新留め。更側に木背済。
20	木芯鉄板張合蓋	(3.3)	1.8	0.25	(4.5)	資金具、2列の斜留め。
21	社會具	(1.8)	(2.0)	0.2	(2.4)	鉄地金附張。資金具は鉄地鋼張。
22	社會具	(2.5)	1.5	0.2	(3.4)	円頭形頭部、斜留め3カ所、鉄地金附張。資金具は鉄地鋼張。
23	社會具	(1.2)	1.6	0.2	(1.9)	円頭形頭部、斜留め3カ所、鉄地金附張。資金具は鉄地鋼張。
24	社會具	(2.0)	1.5	0.2	(3.4)	方形頭部、斜留め3カ所、鉄地金附張。資金具は鉄地鋼張。
25	社會具	(1.4)	1.5	0.2	(1.6)	方形頭部、斜留め3カ所、純地金附張。
26	資金具	(1.5)	1.1	0.2	(1.4)	幅5mmの資金具2本。鉄地鋼張。
27	資金具	(2.8)	0.5	0.3	(1.5)	鉄地鋼張。
28	資金具	(1.9)	1.1	0.2	(1.7)	幅5mmの資金具2本。鉄地鋼張。
29	資金具	(2.7)	0.3	0.2	(1.1)	鉄地鋼張。
30	資金具	(1.8)	0.3	0.2	(0.3)	鉄地鋼張。
31	帶金具	2.7	2.1	0.15	7.2	方形、斜留め4カ所。青銅製。
32	帶金具	(2.6)	(2.4)	0.2	(3.8)	方形、斜留め。鉄地金附張。
33	帶金具	2.6	2.3	0.25	5.1	方形、斜留め4カ所。鉄地金附張。
34	帶金具	2.3	1.7	0.3	5.8	方形、斜留め4カ所。鉄地金附張。
35	鞍頭金具	(13.5)	(5.2)	0.25	(14.1)	鉄製、新留め。
36	鞍頭金具	(1.7)	(2.6)	0.3	(5.4)	鉄製。
37	釣針	(2.3)	(2.0)	0.2	(0.6)	鉄製、新面円形。
38	不明	(3.0)	(0.6)	0.25	(1.5)	鉄製、新面丸方形。
39	針	(1.4)		0.1	(0.06)	鉄製。
40	不明	(1.3)		0.1	(0.05)	鉄製、張っている。
41	不明	(1.2)		0.1	(0.03)	鉄製、張っている。
42	不明	(1.2)		0.1	(0.03)	鉄製、張っている。

第13表 鉄製品観察表

V 造跡各説

玉類

碧玉製管玉（第41図1～3）

3点が出土しており、いずれも濃緑色を呈している。孔は片面穿孔で、両面穿孔をした様子はないが、3点のうち1と3には下端の孔周囲に穿孔時の剝落があり、1はその剝落部分の周囲をさらに回転整形したものと考えられる。また、2・3に顕著なように、上面の穿孔位置は必ずしも中央ではない。

水晶製丸玉（第41図4～6）

3点が認められる。厚さは6.0～7.0mmでまとまりがあるが、形態はあまり統一されていない。1は扁平度が強く上面に平坦面を広くもつ。2は上下にわずかな平坦面をもち扁平気味で、小森谷家所蔵資料の水晶製丸玉の多くを占めるのと同様である。3は厚さと最大径がほぼ等しく上下にわずかな平坦面をもっている。穿孔はいずれも片面穿孔で、1は下端の孔周囲に穿孔時の剝落が大きく残る。3は孔上径と下径に大きな差はない。

水晶製算盤玉（第41図7）

発掘調査では1点だけ出土した。水晶製丸玉と同様に、片面穿孔で上下の孔周囲に少しの平坦面を設けている。側面の稜線自体はあまり鋭くはないが、全体に扁平であるため、その外形は際立って見える。小森谷家所蔵資料と比較するとかなり小形である。

ガラス製丸玉（第41図8～13）

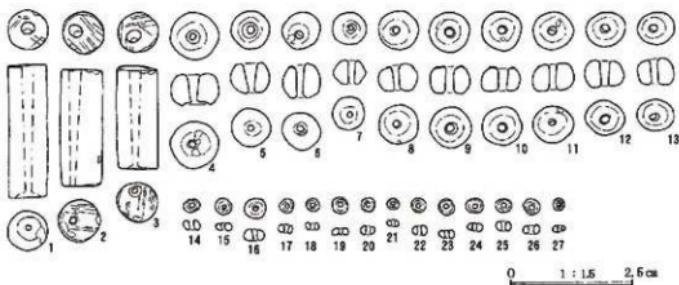
発掘調査では6点が出土している。いずれも紐孔に平行に気泡列が観察されることから、引き伸ばした管状のガラスを切断・再加熱して成形した、管切り技法で製作されたものと考えられる。色調は紺色のものが3点、水色のものが3点あるが、両者に大きな相違点はない。重さもほぼ0.5gで揃っている。全体に保存状態は良好で、風化は進んでおらず、銀化したものもない。最大径は7.6～8.2mmで、最大厚は紺色系が5.3mm前後に集中、水色系は4.7mm～5.5mm前後にばらつく。全体に扁平で上下に平坦面を広くもつ形態である。小森谷家所蔵資料のうち2割ほどを占めるような背が高く扁平度の小さい形態は発掘調査では得られなかった。

ガラス製小玉（第41図14～27）

純数で14点が出土している。紐孔に平行に気泡列が観察されるものが多く、ガラス製丸玉と同様に管切り技法で製作されたと考えられる。全体に小形の製品が多く、側面の面付けは行われていない。厚さは0.13～0.23mm、最大径は0.24～0.42mmの範囲をもつが、最も多いのは厚さ0.17～0.20、最大径0.28～0.36mmの間である。色調は黄緑、淡緑色、緑色、青緑色、青色、紺色、水色の各色があり、水色系が5点と多い。重さはいずれも0.1gないしはそれ以下である。

1 篠塚二子塚古墳

【附記】ガラス小玉の点数について『安中市史』では57点が出土したことになっているが、実物をカウントしたものではないようで、市史の図版がガラス丸玉の実測図にガラス小玉と誤ったキャプションが付いているために、カウントし間違えたものと思われる。



第41図 玉類実測図

玉類以外の装身具

空玉 (第42図1)

1点だけ出土している。その形状から丸玉と判断できる。全体に銹化が著しいが、わずかに金色の光沢を見て取ることができ、金銅製空玉と考えられる。孔周囲の内側に穿孔時のめくり込みが見られるため、穿孔は外側からなされたものと考えられる。体部の崩ぎ目は不明瞭である。高さ6.3mm、最大径6.2mm、孔径は1.2mm程度、重さは1.0gである。

垂飾付耳飾 (第42図2・3)

兵庫鎖が2点出土している。緑青に全体を覆われているが、わずかに金色の光沢を見て取ることができ、金銅製と考えられる。小森谷家所蔵資料の花籠と組み合わせるものと考えて善い。しかし、これらと対になる土環や垂下飾りは見あたらない。

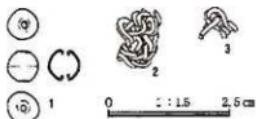
兵庫鎖は0.7~0.8mmほどの細い金銅線を環にして、これを半分に折り曲げてつないでいる。2

は重さ0.4gほどの塊となっており、銹化のためはっ

きりしないが、7単位と5単位の連続が観察できる。

3は3単位が遺存する。重さわずか0.1gの断片であ

る。



第42図 空玉・兵庫鎖実測図

V 滑跡各説

滑石製模造品

有孔円板（第43図1）

やや横円形を呈する双孔円板が1点出土している。上下の側縁部を多く欠失する。表裏面を平滑に研磨し、側縁部は表裏面に対して船直方向に粗く整形研磨している。小森谷家所蔵資料の有孔円板と比較すると、その最も大形の部類に属するが、最大幅ではそれらを上回っている。

不明器種（第43図2～10）

2・3は側縁部が直線的な下半部から肩をもち内側に湾曲しながら折れていく破片である。いずれも片面が剥離しているため、石製品の種別は不分明である。刃の肩部かと思われるが、小森谷家所蔵資料と比べると、肩部から上方の整形が刃の抉り込みにしては整美に見えるため、盾上部の破片の可能性もある。2は残存長3.2cm、残存幅1.2cm、重さ2.2g、3は残存長2.7cm、残存幅1.1cm、重さ0.8gを測る。

4は盾に見られるような把手部分の突起が剥落したものである。小森谷家所蔵資料と比べると、盾とするには小形にすぎるであろうか。下半部は欠損。残存幅0.9cm、残存長2.9cm、重さ1.0g、厚さは2mmほどを残している。

5は短甲形石製品の上端部の破片と考えられる。穿孔が二重になっているところが、小森谷家所蔵資料の穿孔の仕方と合致している。

6は小森谷家所蔵資料と比較しても類似の部位は見あたらない。板状材の下縁を直線的にしその左端を下方に突出させる。左側縁は緩やかな弧を描くようである。鎌の刃部先端であろうか。残存長2.4cm、残存幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.9gを測る。

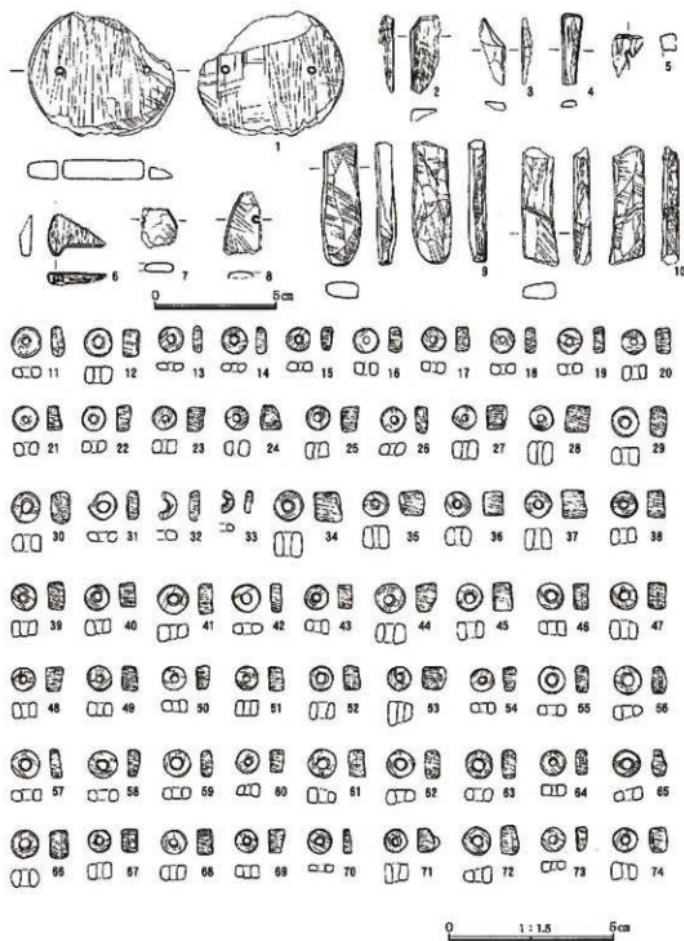
7・8は薄い板状材に穿孔をした破片で、側縁部が円弧を描くことから、有孔円板の可能性がある。7は双孔円板と考えるにはいさか薄く、单孔円板であろうか。8は孔と側縁部の位置関係から見ると、鎌の可能性も残る。

9・10の2点は厚みの小さい台形断面の細長い破片である。表裏面にはいくぶん丸味をもつ。9は上方を欠失するが、下方は端部となり丸く仕上げられている。上方は少し幅狭くなっている。残存長5.0cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ10.7gを測る。10は上下両端を欠失し、厚みがある側の側縁はわずかに反りが見られる。残存長4.8cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ8.2gを測る。これらは小森谷家所蔵資料の刃部を欠く刀子柄部に似ており、刀子の柄部の可能性がある。ただ、9の端部近くに穿孔がない点は、刀子としてしまうには疑問が残る。

滑石製臼玉（第43図11～74、第44図75～129）

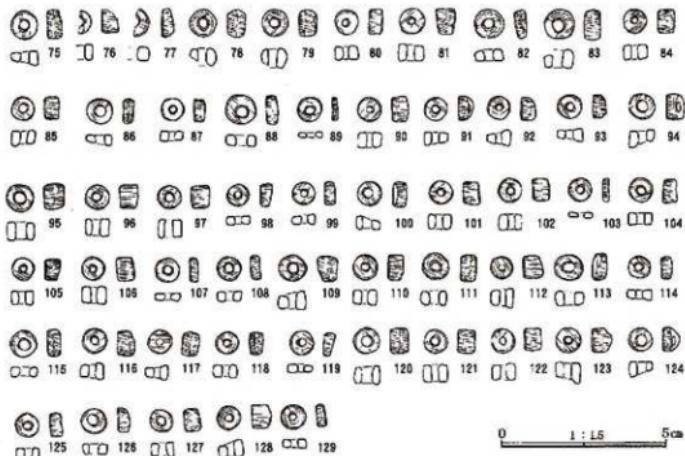
119点が出土した。最大径は6.0～9.2mmであり径の細いものはないが、厚さは1.7～7.1mmと散つきが際立っている。ただ、最大径6.0～8.0mm、厚さ2.1～5.3mmの範囲に発掘調査出土品の9割が収まる。孔径は1.4mm～3.0mmを測る。孔径2.2mm以下のものは、孔内面に上下いずれかの平坦面

1 築瀬二子塚古墳



第43図 石製模造品実測図(1)

V 遺跡各説



第144図 石製模造品実測図(2)

に平行する条痕、つまり孔主軸に対して直角の条痕が見られ、回転力を強くして穿孔していると考えられる。これに対して孔径2.3mm以上のものでは孔主軸に対して斜方向や平行方向の条痕も見られ、工具を回転させつつも押圧力を強く加えていることが観察される。前者の方が穿孔された孔の形状は整っており、後者は孔の上下端に穿孔時と思われる剥落が時折認められる。白玉の厚さが5.0mmを超えるものは前者に属するものが多い。白玉の重さは薄手のもので0.1g、厚手のものでも0.7gを越るにすぎない。

(荒木勇次)

白玉振管玉

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	備考
1	2.73	0.80	3.5	
2	2.45	0.85	3.6	
3	2.14	0.68	2.8	

水晶製丸玉・黄碧玉

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	備考
4	0.65	1.01	0.9	丸玉
5	0.60	0.82	0.5	丸玉
6	0.71	0.74	0.6	丸玉
7	0.48	0.69	0.3	黄碧玉

第14表 玉類計測値一覽表(1)

1 篠瀬二子塚古墳

ガラス製丸玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	色調
8	0.53	0.81	0.5	褐色
9	0.55	0.82	0.5	水色
10	0.47	0.89	0.5	水色
11	0.53	0.82	0.5	褐色
12	0.52	0.89	0.5	水色
13	0.52	0.76	0.5	褐色

ガラス製小玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	色調
14	0.29	0.35	黄緑色
15	0.13	0.32	黄緑色
16	0.23	0.42	淡緑色
17	0.17	0.29	緑色
18	0.18	0.28	青緑色
19	0.14	0.35	青緑色
20	0.19	0.32	青色
21	0.14	0.24	緑色
22	0.20	0.39	緑色
23	0.17	0.31	水色
24	0.18	0.33	水色
25	0.20	0.32	水色
26	0.18	0.36	水色
27	0.14	0.25	水色

滑石製有孔円板

番号	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔間距離(cm)	重さ(g)	備考
1	(5.10)	(6.05)	0.75	3.32	40.7	双孔円板

滑石製臼玉

番号	厚さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
11	0.30	0.78	0.22	0.3
12	0.47	0.76	0.29	0.4
13	0.22	0.71	0.21	0.2
14	0.24	0.73	0.20	0.1
15	0.29	0.68	0.18	0.2
16	0.35	0.70	0.19	0.4
17	0.36	0.64	0.21	0.3
18	0.28	0.67	0.18	0.2
19	0.31	0.72	0.19	0.2
20	0.40	0.67	0.21	0.3
21	0.36	0.65	0.18	0.3
22	0.36	0.67	0.18	0.3
23	0.45	0.62	0.18	0.4
24	0.50	0.64	0.20	0.4
25	0.45	0.68	0.21	0.4
26	0.32	0.67	0.16	0.3
27	0.56	0.64	0.20	0.4
28	0.62	0.69	0.21	0.6
29	0.46	0.89	0.26	0.4
30	0.49	0.84	0.28	0.5
31	0.28	0.76	0.27	0.3
32	0.27	(0.78)	(0.29)	0.1
33	0.21	(0.61)	(0.19)	0.1
34	0.71	0.90	0.23	0.7
35	0.62	0.66	0.18	0.4

番号	厚さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
36	0.52	0.68	0.18	0.4
37	0.61	0.73	0.20	0.5
38	0.45	0.70	0.21	0.3
39	0.42	0.73	0.23	0.3
40	0.43	0.67	0.22	0.3
41	0.44	0.83	0.23	0.4
42	0.30	0.77	0.28	0.3
43	0.49	0.68	0.22	0.3
44	0.55	0.52	0.26	0.5
45	0.48	0.74	0.26	0.3
46	0.42	0.70	0.25	0.3
47	0.50	0.74	0.25	0.5
48	0.46	0.67	0.20	0.4
49	0.41	0.68	0.19	0.4
50	0.35	0.63	0.20	0.3
51	0.42	0.64	0.19	0.3
52	0.44	0.64	0.26	0.3
53	0.67	0.64	0.20	0.4
54	0.35	0.62	0.19	0.2
55	0.31	0.73	0.28	0.3
56	0.40	0.78	0.29	0.4
57	0.30	0.78	0.26	0.3
58	0.32	0.79	0.28	0.3
59	0.30	0.72	0.27	0.3
60	0.37	0.62	0.18	0.3

第15表 玉類計測値一覧表(2)

V 遺跡各説

番号	厚さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
61	0.43	0.74	0.26	0.3
62	0.40	0.75	0.27	0.4
63	0.35	0.76	0.27	0.3
64	0.32	0.66	0.15	0.2
65	0.40	0.75	0.25	0.2
66	0.49	0.77	0.24	0.4
67	0.43	0.63	0.14	0.4
68	0.41	0.70	0.20	0.3
69	0.35	0.65	0.19	0.3
70	0.21	0.68	0.22	0.1
71	0.55	0.63	0.18	0.3
72	0.49	0.78	0.26	0.4
73	0.26	0.64	0.22	0.2
74	0.48	0.67	0.21	0.4
75	0.40	0.78	0.26	0.3
76	0.43	(0.67)	(0.22)	0.4
77	0.34	(0.76)	(0.23)	0.2
78	0.48	0.74	0.22	0.4
79	0.50	0.72	0.23	0.5
80	0.40	0.66	0.15	0.3
81	0.52	0.69	0.19	0.4
82	0.31	0.80	0.24	0.4
83	0.42	0.80	0.28	0.4
84	0.42	0.64	0.16	0.4
85	0.43	0.64	0.20	0.3
86	0.31	0.70	0.26	0.3
87	0.31	0.69	0.18	0.2
88	0.31	0.81	0.25	0.4
89	0.17	0.64	0.24	0.1
90	0.44	0.66	0.18	0.3
91	0.40	0.75	0.20	0.2
92	0.42	0.65	0.18	0.3
93	0.35	0.66	0.21	0.3
94	0.47	0.71	0.26	0.4
95	0.50	0.75	0.29	0.5

番号	厚さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
96	0.49	0.65	0.22	0.4
97	0.50	0.66	0.22	0.4
98	0.31	0.62	0.18	0.2
99	0.29	0.61	0.18	0.2
100	0.33	0.67	0.24	0.3
101	0.43	0.63	0.19	0.3
102	0.45	0.64	0.20	0.3
103	0.18	0.62	0.17	0.2
104	0.37	0.65	0.20	0.3
105	0.40	0.61	0.19	0.3
106	0.48	0.63	0.17	0.4
107	0.22	0.66	0.18	0.2
108	0.28	0.67	0.21	0.3
109	0.52	0.74	0.24	0.4
110	0.43	0.70	0.20	0.4
111	0.42	0.73	0.24	0.4
112	0.53	0.60	0.15	0.4
113	0.46	0.72	0.29	0.4
114	0.31	0.61	0.21	0.2
115	0.36	0.70	0.24	0.3
116	0.48	0.66	0.20	0.4
117	0.47	0.65	0.17	0.3
118	0.33	0.62	0.19	0.3
119	0.28	0.65	0.19	0.2
120	0.48	0.71	0.30	0.5
121	0.48	0.66	0.20	0.4
122	0.47	0.63	0.18	0.4
123	0.52	0.67	0.19	0.4
124	0.48	0.62	0.25	0.2
125	0.34	0.65	0.23	0.3
126	0.30	0.68	0.28	0.3
127	0.44	0.62	0.23	0.3
128	0.52	0.63	0.19	0.4
129	0.27	0.70	0.19	0.2

第16表 玉類計測値一覧表(3)

土器

本墳出土の土器類を胎土・焼成から大別すると大きく三種類に分類される。一つは一般的な須恵器で、高杯、坏蓋、坏身、罐、大甌、長頸甌等の器種が確認されている。もう一種類は瓦質土器に類似するもので、ここでは一応、須恵器として扱った。長頸甌、坏身、坏蓋などが確認されている。最後の一種類は土師質の胎土で内外面を焼して黒色処理したもので、本稿では軟質土器として扱った。坏身、坏蓋などが確認されている。

軟質土器蓋（第45図1）

石室内玄室部の前面部分から出土している。8点が接合した結果、全体のほぼ半分ぐらに復元された。また、接合できないが、同一個体と考えられる破片が数点ある。口縁部径11.4cm、推定高は4.3cmの法量を測る。天井部は丸味を帯び、外稜をもって口縁部と区画する。口唇部分はややつまみ出す感じで外湾する。口唇端部はしっかり面取りしており、中央がやや凹む。天井部回転ヘラケズリ、口縁部ナデ調整で、製作技法的には須恵器と全く遜色ない。しかし、胎土・焼成がありにも異質である。色調は外面5Y3/1、内面N3/、断面7.5YR6/3を呈し、土師質の土器を焼して内外面黒色処理しているようである。胎土中に長石粒、網雲母片岩粒を含むことから藤岡産と考えられる。

軟質土器蓋（第45図2）

石室内玄室部の前面部分から出土している。4点が接合した結果、天井部の1/4程度が復元された。器形、胎土・焼成はNo.1に類似するが、接点が無く、調整・色調が若干、異なることから別個体と考えた。天井部は復元径10.8cmを測り、全体に丸味を帯びる。口縁部は全く欠損するが外稜をもって天井部と区画する。色調は外面2.5Y2/1、内面N4/、断面10YR7/4を呈し、土師質の土器を焼して内外面黒色処理している。胎土中に針状鉱物、網雲母片岩粒を含むことから藤岡産と考えられる。

須恵器蓋（第45図3）

石室内玄室部の前面部分から出土している。5点が接合した結果、全体の1/5程度が復元された。口径13.8cm、復元高3.6cmを測る。器高の割りに口径の大きい器形で、天井部は緩やかな丸みを帯びる。口縁部はほぼ中位を幾分窪めることにより口唇部を突出させており、端部はしっかり面取りされている。内面は整形時に生じたナデおよびロクロ痕が明瞭に残る。天井部と口縁部の境界は沈線状に窪んだ外稜によってしっかりと区画されている。色調は外面2.5Y5/1、内面2.5Y6/1、断面10YR6/1を呈し、胎土中に長石粒、網雲母片岩粒を含んでいることから藤岡産と考えられる。

須恵器蓋（第45図4）

石室内玄室部の前面部分から出土している。破片4点が接合しており、全体の2/5程度が残存している。口径11.5cm、復元高3.8cmを測る。天井部は緩やかな丸みを帯び、中心部はやや平坦である。口縁部は中位を幾分窪めることにより口唇部を突出させており、端部はしっかり面取りされている。内面は整形時に生じたナデおよびロクロ痕が明瞭に残る。天井部と口縁部の境界は沈線状に窪んだ外稜によってしっかりと区画されている。色調は外面N5/、内面N4/、断面2.5Y6/2を呈し、胎土中に長石粒を多量に含んでいる。内面に微量ながら赤色顔料の付着が認められる。

V 遺物各説

軟質土器杯（第45図5）

石室内玄室部の前面部分から出土している。破片9点が接合しており、全体の2/5程度が残存している。また、接合できないが、同一個体と考えられる破片が数点ある。口径9.7cm、器高4.3cmの法量を測る。丸底で、鋸状に突出する蓋受部の下位を擬口縁状に造っているため、沈線状に窪んでいる。口縁部は中位で内溝した後にやや外反気味に直立する。口唇端部はしっかりと面取りされている。土師質であり、焼すことにより内外面黒色処理している軟質土器である。胎土中に長石粒、絹雲母片岩粒を含んでいることから藤岡産と推定される。

須恵器杯（第45図6）

埋葬主体部前面の前庭部で出土している。表上層から検出されており、明治12年の石室開口時の際に石室内より持ち出された遺物の可能性が高い。口径10.3cm、器高3.3cmの規模をもつ全体の1/5程度の破片である。底部は比較的平坦で、ヘラケズリ調整に影響されて弱く屈曲しながら緩やかに丸みを帯びて蓋受部へと至る。口縁部は内傾しており、口唇端部は面取りされているものの、やや丸みを帯びている。瓦質であり、内外面を焼しによる黒色処理を施す。胎土中に長石粒、絹雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器杯（第45図7）

石室内玄室部の前面部分で出土している。破片2点が接合しており、全体の1/6程度が残存している。口径8.8cm、器高4.2cmの法量を測る。底部下半を欠損するが、ヘラケズリ調整の範囲が明瞭に段として残り、緩やかに丸みを帯びて蓋受部へと至る。口縁部はやや内反して、口唇部付近で直立する。端部はしっかりと面取りをおこなう。色調は外面N5/、内面N6/、断面7.5Y5/1、胎土に長石粒、絹雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器高杯（第45図8）

埋葬主体部前面の前庭部西北隅から3片まとめて出土している。もう1点、埋土中の資料が接合したことにより杯部分の3/4を復元することができた。しかし、脚部は全く欠損している。出土状況からあるいは石室外に供獻された可能性をもつ。脚部の透孔切開痕から3方透かしだったことは確実である。杯部外縁は途中まで2段の波状文を描いているが、途中からヘラ状工具を交互にジグザグに押圧することによって描かれたギザギザ模様に変化している。その上面には2条の沈線で区画して口縁部へと至る。口唇端部は丸く仕上げられている。杯部の内面見込部分に焼成段階に生じたと考えられる亀裂が走っており、その部分の延長上で割れている。口径12.8cm、杯部の器高5cmを測る。色調は外面5Y5/1、内面7.5Y4/1、断面5Y5/2、胎土に絹雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器高杯（第45図9）

埋葬主体部前面の前庭部中央部分から3片まとめて出土している。杯部の1/3程度の破片であ

1 篠森二子塚古墳

る。出土状況からはあるいは石室外に供獻されたものもある。脚部は全く欠損しており、接合部分も剥落していて透かし孔の数も明らかでない。下半にヘラケズリを施し、その上面にヘラ状工具を交互にジグザグに押圧することによって描かれた波状文を施文する。その上面には2条の沈線で区画して口縁部へと至る。口唇端部は丸く仕上げられている。坏部の内面見込部分にカキメ状の調整痕が残る。口径13.3cm、坏部の器高4.9cmを測る。色調は外面10Y5/1、内面10Y4/1、断面の表層は5Y5/1、中間2.5YR6/4、芯は10YR5/1と層状になっている。

須恵器高坏（第45図10）

墳丘上からの出土である。高坏脚部分1/4程度の破片で、坏部は全く欠損する。透孔の配列が均等に開けられていると仮定して四方透かしと考えているが、均等でない場合はこの破片からでは判断できることになる。脚端部で屈曲して明瞭な外縁を残す器形で、ロクロ水挽き後、内面の坏部との接合部付近のみユビナゲが施されている。底径9.6cm、脚部高さ5.5cmの法量である。色調は外面2.5Y4/2、内面2.5Y5/1、断面は2.5Y6/1、であった。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器高坏（第45図11）

石室内玄室部分の前面からの出土である。高坏脚部の1/3程度の破片で、坏部は全く欠損する。透孔の配列は三方透かしと考えられる。脚端部の底面付近で屈曲して突出する明瞭な外縁を残す器形である。底径9.7cm、脚部高さ5.3cmの法量である。色調は外面2.5Y6/1、内面2.5Y6/1、断面は2.5Y6/1、であった。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器壺（第45図12）

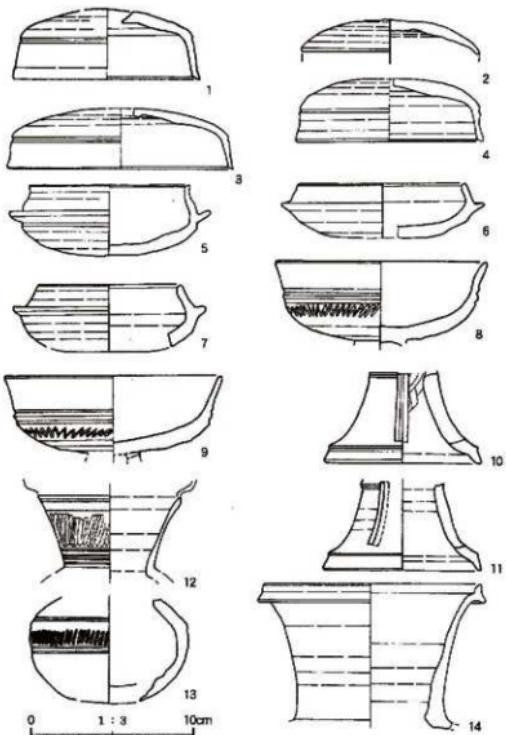
埋葬主体部前面の前庭部攢乱層から出土した。壺の頸部付近1/6程度の破片である。比較的頸の短い寸胴な器形と考えられる。別個に体部の破片もあり胎土は類似するものの、接合しなかった。頸部の根元付近は、カキメ状の陸線で横方向に施文した後、ヘラ状の工具を縱方向に押圧することによって施文されたと考えられるピッチの細かい波状文が施されている。

法量は頸部の根元での直径5.4cm、頸部残存高4.3cmであった。色調は外面2.5Y5/1、内面5Y5/1、断面は2.5Y5/3、であった。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器壺（第45図13）

石室外の出土である。壺の体部1/4程度の破片である。比較的横膨れの器形であり、時期的には若干後出すると考えられる。中位に輪齒状工具による刺突文がありその上下を沈線で区画する。法量は最大径9.6cm、残存高6.6cmであった。色調は外面5Y5/1～5Y6/1、内面5Y6/2、断面は2.5Y6/3であった。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

V 遺跡各説



第45図 須恵器実測図

須恵器壺（第45図14）

墳丘上からの出土であり、時期的に古墳の年代よりも後出するのは明らかである。頸部1/2程度の破片である。やや広口気味の長頸壺で外面は自然釉の付着が著しい。法量は口縁部径13.2cm、頸部高8.5cmであった。色調は外面7.5Y6/1、内面10Y7/1、断面は5R6/1であった。胎土は微滑でひじょうに良く精選されており、少量ながら融解した黒色鉱物粒が確認できることから、あるいは在地の製品かもしれない。

(加部二生)

2 築瀬首塚古墳

(1) 遺構

1 トレンチ (第46図)

石室入り口を中心に設定したトレンチである。調査の結果、石室の羨道、前庭が確認された。横穴式石室で、羨道の天井石は欠失していた。羨門幅88cm、羨道長2.4m以上、東壁は6石まで残存していた。前庭部は中世板碑群により改変されていたが、東側は良好に残存していた。東側の羨門石から東に1.7mのところで台形状に開く石垣が約90cm確認された。

2 トレンチ (第47図)

1 トレンチから西方へ45度振ったトレンチである。調査の結果、第1・2段目と周溝が確認された。第1段は高さ80cmで法面から葺石が検出されている。平坦面は標高218m前後で幅3.84mを測る。第2段法面は、標高218.3mに根石を置き、葺石面は44度の傾斜で立ち上がる。周溝の底面は標高217.5mである。

3 トレンチ (第47図)

石室の主軸線に直交して西側に設定したトレンチである。調査の結果、第1目と周溝が確認された。第1段の法面から葺石が検山されている。根石は標高218.2mで、30度の傾斜で敷石積み上げている。周溝の底面は標高218.1mである。

4 トレンチ (第48図)

3 トレンチから北側へ45度振ったトレンチである。調査の結果、第1・2段目と周溝が確認された。第1段は高さ85cmで法面から葺石が検出されている。根石は標高218.4mに設置され、平坦面は標高218.95m前後で幅4.2mを測る。第2段法面は、標高219.25mに根石を置き、葺石面は34度前後の傾斜で立ち上がる。周溝の底面は標高218.4mで、底面の幅5.6m、上端で6.5mを測る。

5 トレンチ (第48図)

石室主軸線の北側に設定したトレンチである。調査の結果、第1・2段目と周溝が確認された。第1段は高さ80cmで、根石は標高218.5mに設置される。第2段法面は、標高219.25mに根石を置く。周溝の底面は標高218.5mで、平坦になっている。

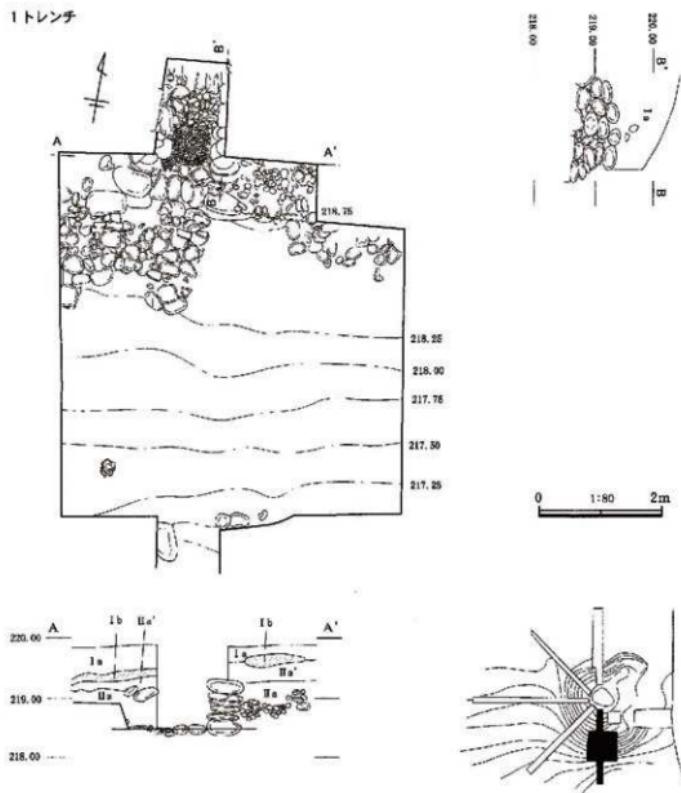
(志村 哲)

中世板碑群 墳丘南側に設定した拡張区（A区）において、室町時代と推定される板碑群と敷石遺構が検出された。板碑は東西2群に分かれて樹立されており、西群4基・東群3基であった。1基には建武4年（1337）の年号が刻まれていた。板碑の下部については3基のみ調査を行った。いずれの板碑下にも石組が施された小ピットがあり、中及び周囲からは焼骨片が検出された。また、周囲からは北宋錢（政和通寶：1111年初鋤）と刀の鐔が検出された。

V 這跡各說

首塚関連 首塚に関連する遺構・遺物は全く検出されなかった。したがって、首塚は古墳東側(石室の奥込めの外側)のごく限定された部分に頭骨が並べられていたのみであった可能性が高い。
近現代馬墓 埋葬馬の検出された墓塚が埴丘北側トレレンチで確認された。馬骨の遺存状態は良好であり、生後半年ほどの仔馬であることが宮崎重雄氏の鑑定により明らかとなった。覆土には浅間A解石が混入しており、近現代の馬が埋葬されていた場所と判断される。

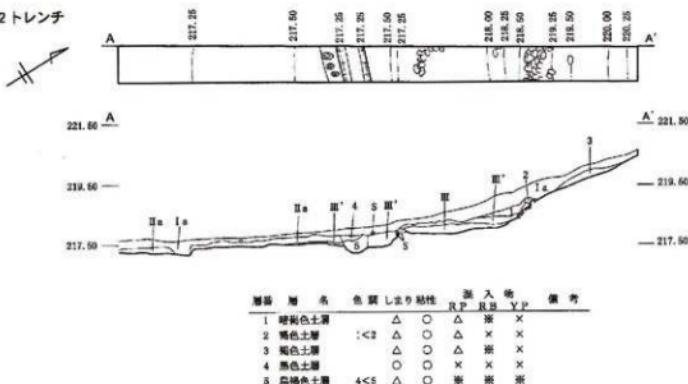
(大原 豊)



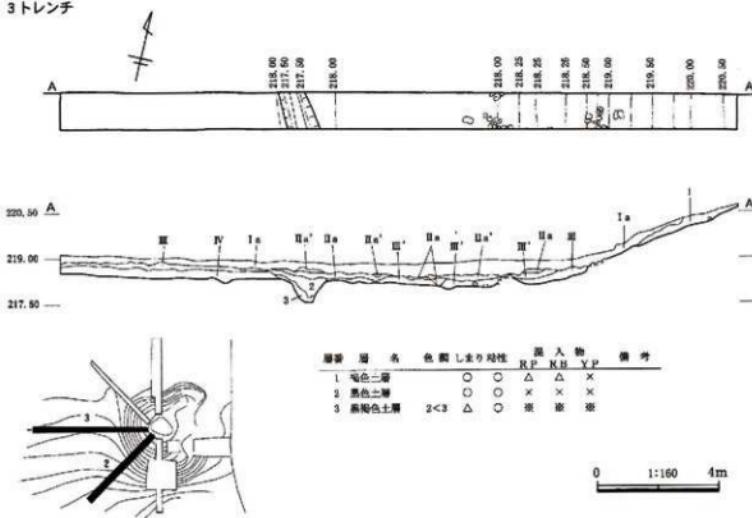
第46図 1トンチ凍樹図

2 築塁首塚古墳

2 トレンチ



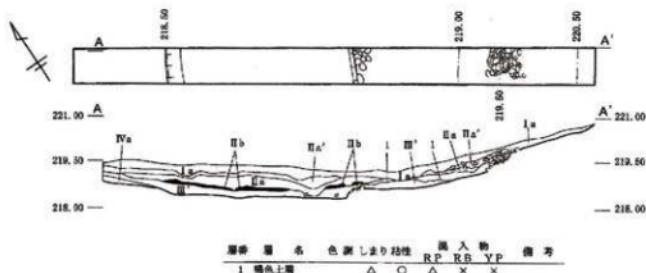
3 トレンチ



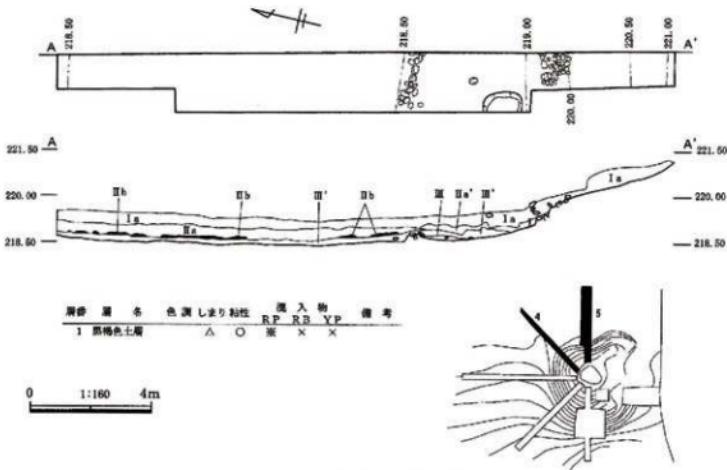
第47図 2・3 トレンチ造構図

V 遺跡各說

4 トレンチ



5 トレンチ



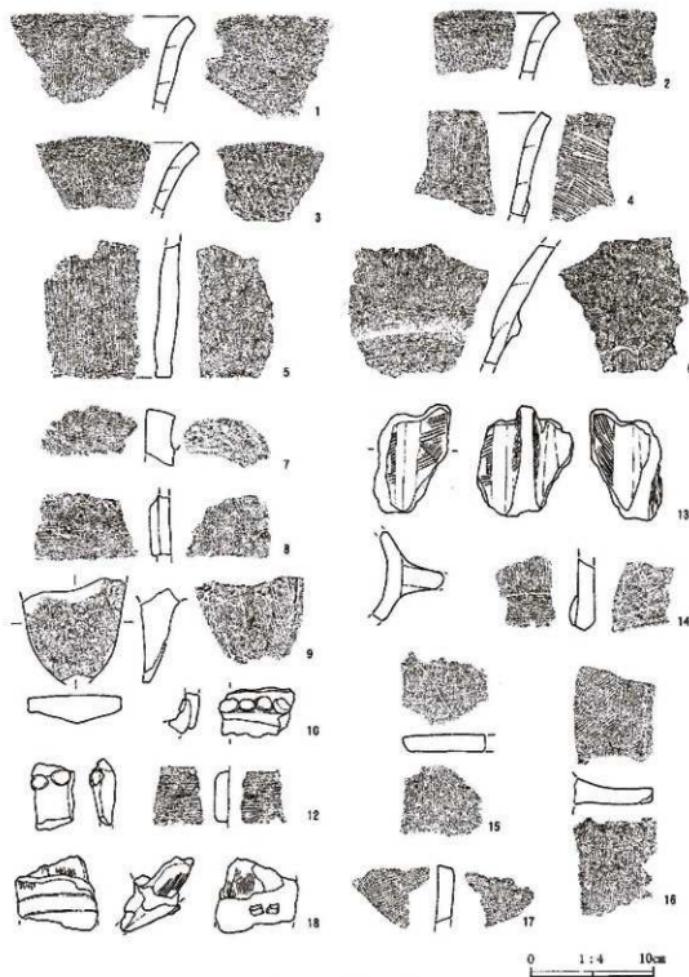
第48図 4・5 トレンチ遺構図

(2) 出土遺物

円筒埴輪

普通円筒埴輪（第49図1・2・4・5）

器形を復元できるものがなかった。1・2・4は外反口縁で、凸唇断面は低い台形を呈する。



第49図 墓輪実測図(1)

0 1:4 10cm

V 遺跡 各説

1・5は胎土に片岩粒を含む藤岡産埴輪である。

朝顔形埴輪 (第49図3・6)

器形を復元できるものがなかった。3・6は口縁部で、焼成が良好で硬質である。

形象埴輪

人物 (第49図7~11)

7は女性の像である。9は全身立像の右側の範で、大型の人物が樹立していたことがわかる。

7~9・11が藤岡産埴輪。

馬 (第50図19~21)

19は尻撃、20は面撃の部分である。21は鈴雲珠で、先端が尖った形態である。すべて藤岡産埴輪である。

器財埴輪

鞍 (第49図13・14)

破片のため全体像は不明である。14は藤岡産埴輪。

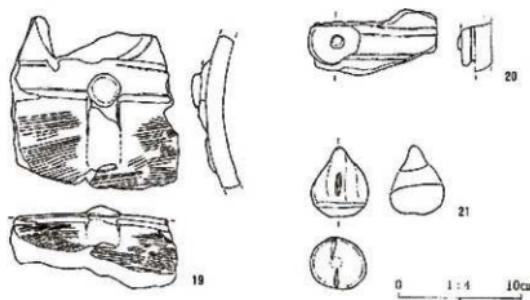
盾 (第49図15~17)

破片のため全体像は不明であるが、16・17は盾面に2条の渦巻き文を施す。16・17は藤岡産埴輪。

鞘 (第49図18)

藤岡産埴輪。

(志村 哲)



第50図 墳輪実測図(2)

2 築瀬首原古墳

番号	出土地	器 形 の 特 徴	外向測定	内向測定	色調・胎土・法蓋等
1	5トレ7区	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、縁部は厚む。	継剥毛。	横剥で。	褐色を呈し、胎土にチャート粒を多量に含み、片岩粒を少額含む。胎同底。
2	4トレ7区1層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、縁部は平ら。	継剥毛。	粗い裏剥毛後に横剥で。	褐色を呈し、胎土は焼造され、チャート粒を含む。焼成は硬質。
3	4トレ7区1層	朝顔形埴輪口縁部。	継剥毛。	粗い裏剥毛後に横剥で。	暗褐色を呈し、胎土は焼造される。焼成は硬質。
4	4トレ4区1層	円筒埴輪口縁部。外反口縁で、縁部は厚む。凸帯貼付いい。継剥手形。	継剥手形。	斜剥毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・深灰岩粒を含む。焼成は硬質。
5	3トレ8区1層	円筒埴輪基部。	継剥手。	継剥毛、底部は横剥で。	褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。胎同底。内面に墨色の付着物。
6	5トレ7区	朝顔形埴輪口縁部。凸帯貼付台形。	継剥毛。	継の指剥で。	灰褐色を呈し、胎土にチャート・深灰岩粒を含む。焼成は硬質。
7	2トレ6区	人物、女性の頭。	継剥毛。		褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒を含む。胎同底。
8	5トレ4区1層	人物、粘土帶により腰帶を表現。	横剥毛。	横剥で。	褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒、骨片を含む。胎同底。
9	4トレ5区1層	全身立像人物、双肩部右側の頭。	横毛。	横毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート・片岩粒、骨片を含む。胎同底。
10	4トレ5区	人物、円形貼付文による首飾り表現。	横剥で。	横剥で。	暗褐色を呈し、胎土にチャート・深灰岩粒を含む。焼成は硬質。
11	2トレ7区田耕	人物、円形貼付文により首飾り表現。	横剥で。	横剥で。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を含む。胎同底。
12	1トレ3区	形象埴輪。斜椎の繪刻。	横剥毛。	横剥毛。	赤褐色を呈し、胎土は焼造されチャート粒を含む。焼成は硬質。
13	4トレ5区1層	双頭的な頭部。	凸頭的な頭部。	継の指剥で。	黄褐色を呈し、胎土にチャート・深灰岩粒を含む。焼成は硬質。
14	3トレ6区1層	双頭・肩部下端。粘土帶貼付。	継剥毛。粘土帶に横剥毛。	横剥で。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を含む。胎同底。
15	3トレ6区1層	盾、外区に船頭文。	継剥毛。	継剥毛。	赤褐色を呈し、胎土にチャート粒を含む。
16	2トレ7区1層	盾、外区に溝書き文。	斜剥毛。縁邊は歯剥毛。	斜剥毛。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒を含む。焼成は硬質。胎同底。
17	5区1層	盾、溝書き文、中は赤色塗彩。	斜剥毛。	斜剥毛。	暗褐色を呈し、胎土に片岩・チャート・深灰岩粒を含む。焼成は硬質。
18	4トレ5区1層	盾上面部分。板状の差込み。	斜剥毛。	横で。	暗褐色を呈し、胎土に片岩粒を含む。胎同底。焼成は硬質。
19	4トレ5区1層	馬、雪球から腰带部分。	横剥毛。	斜剥毛。	赤褐色を呈し、胎土に片岩・チャート粒、角閃石を含む。胎同底。焼成は硬質。
20	3トレ6区	馬、圓盤の社會具。円形の鞍部を表現。	斜剥毛。	斜剥毛。	赤褐色を呈し、胎土は焼造されチャート・片岩粒を含む。胎同底。
21	4トレ5区	馬、鉛器類。	横剥毛。	横剥で。	褐色を呈し、胎土は焼造されチャート・片岩粒を含む。胎同底。

第17表 墳輪観察表(1)

VI 小森谷家所蔵資料

鉄製品

大刀関係（第51図43～48）

43は直刀、44は刀子が2本重なっているものである。45・46は振り環頭大刀の柄頭である。環は鉄地を振りその上に銀張を施している。X線撮影の結果、46の基部に銀張が取れないように針金で巻いていることが観察できた。いずれも長さ1.5cmほどの木質が付着しており、柄頭部分に打ち込まれた部分である。47・48は金銅製の三輪玉である。これらの資料から振り環頭大刀と、三輪玉で装飾された勾金付きの装飾大刀が副葬されていることがわかる。

鉄錠（第51図49～73）

すべて長三角形鐵に属し、大きく3種類に分類される。一つは長三角形鐵でナデ間を有するもので49～56があげられる。二つ目は長三角形鐵で左右対称に逆刺が付くもので57～59があげられる。また、片側に逆刺が付くものに60～62がある。ただし破片資料のため間が段違いの形態の可能性もある。三つ目は長三角形鐵で鐵身が長く、両側に付く逆刺の位置が段違いになるもので63～65があげられる。このうち、60・63の茎部に径1.5cm前後、幅1cmほどの鉄製金具が付けられている。おそらく後の2種類の鐵身に取り付けられたものと推定される。この鉄製金具は、高崎市少林山台遺跡12号古墳出土例と同じである。

小札（第51図74～75）

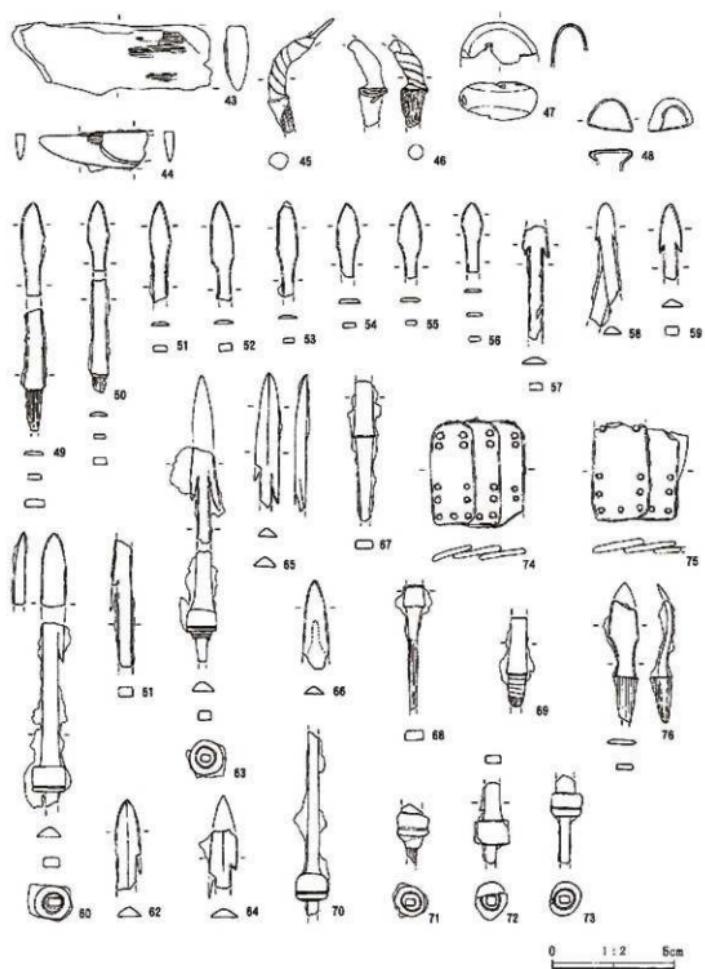
74は偏円頭系で鍼孔2列4個の形態である。3枚重なっているが、1枚の大きさは4.2cm×1.8cmの大きさである。75は2枚重なっているが幅が2.2cmと広くなっている。

ヤリガンナ（第51図76）

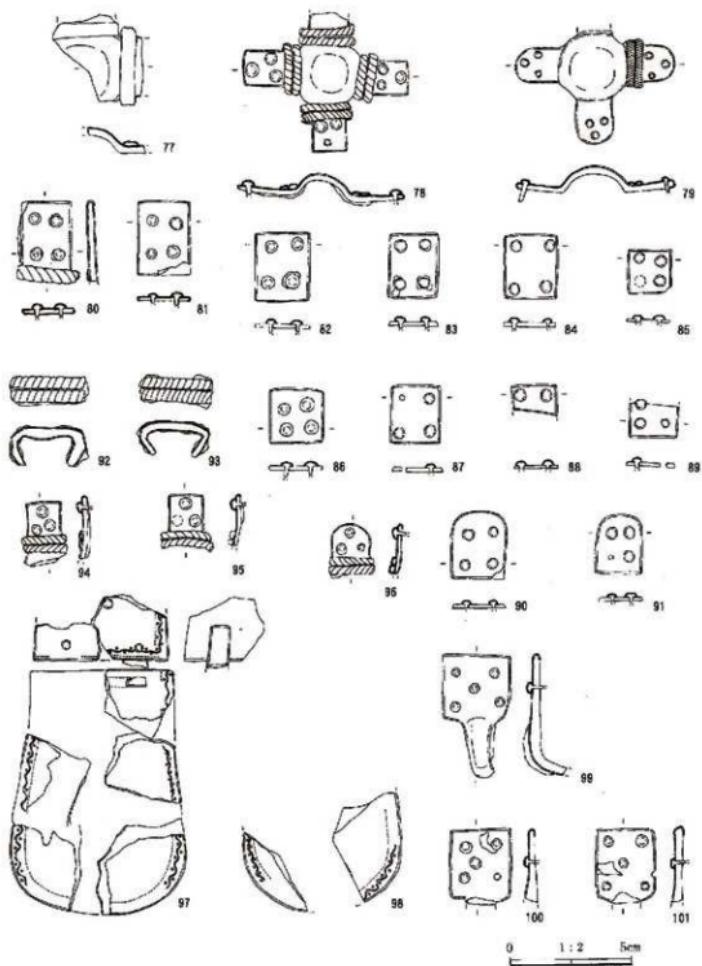
全長4.9cm、刃部3.1cm、茎部1.8cmの大きさで、刃部の幅は1.2cmである。

馬具（第52図77～101）

77～79・80・92～96は辻金具である。本体は鉄地金銅張で、資金具は鉄地銀張である。77は径2.6cmの伏鉢部で脚部は4枚構成である。脚部の幅が2.3cm前後を測るために、80・92・93は同一規格のものである。78は径2.7cmの伏鉢部で、脚部は幅1.4cmの方形脚部4枚構成である。79は径2.8cmの伏鉢部で、脚部は幅1.5cm前後の円頭脚部4枚構成である。96が同一規格のものである。82～91は替金具である。81が鉄地金銅張で、その他は青銅製である。大きさから85・88が同一規格である。97・98は鉄地金銅張の花弁形杏葉である。杏葉は方形金具と花弁形金具が吊下金具で結合されたものである。花弁形金具は長さ約10cmで、中央がややくびれ、下部が丸みを帯びる花弁形を呈している。花弁形杏葉の方形金具と花弁形金具の周囲には1条の線とその内側に波状列点文が



第51図 金属製品実測図(1)



第52図 金属製品実測図(2)

彫られている。施文方法はタガネによる彫り彫りである。奈良県高市郡明日香村上に所在する5号墳例に類似している。98~99は舟金具で99は2.8cm×2.7cmの方形板に吊手が付く。100は2.4cm×2.8cm、101は2.4cm×3cmの方形板で同一規格と考えられる。

(志村 哲)

番号	器種	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
43	大刀	(8.1)	3.0	0.9		鉄製。
44	刀子	(4.4)	1.5	0.4	(7.7)	2本の刀子が重なっている。
45	渡り脚頭大刀	(4.2)		0.7		鉄地銀張。木質が付着する基部は長さ1.5cm。
46	渡り脚頭大刀	(2.6)		0.6		鉄地銀張。木質が付着する基部は銀紙が取れないように針金で縛る。長さ1.5cm。
47	三輪玉	3.1	(1.7)	1.6	(2.5)	金網綴。
48	三輪玉	1.8	1.3	(0.9)	(0.9)	金網綴。
49	鉄鎌	(9.5) 鍔身2.0	0.9 鍔身0.9	0.3 鍔身0.15	(6.9)	長三角形鎌、ナゲ開。
50	鉄鎌	(7.7) 鍔身1.6	0.8 鍔身0.9	0.3 鍔身0.15	(9.6)	長三角形鎌、ナゲ開。
51	鉄鎌	(4.1) 鍔身1.7	0.5 鍔身0.9	0.25 鍔身0.15	(2.4)	長三角形鎌、ナゲ開。
52	鉄鎌	(4.0) 鍔身2.5	0.5 鍔身0.9	0.3 鍔身0.15	(2.6)	長三角形鎌、ナゲ開。
53	鉄鎌	(3.6) 鍔身2.0	0.5 鍔身0.8	0.2 鍔身0.15	(2.4)	長三角形鎌、ナゲ開。
54	鉄鎌	(3.0) 鍔身1.8	0.5 鍔身0.9	0.2 鍔身0.2	(1.4)	長三角形鎌、ナゲ開。
55	鉄鎌	(3.1) 鍔身2.2	0.5 鍔身1.0	0.2 鍔身0.1	(2.0)	長三角形鎌、ナゲ開。
56	鉄鎌	(2.8) 鍔身1.0	0.5 鍔身0.9	0.2 鍔身0.15	(1.3)	長三角形鎌、ナゲ開。
57	鉄鎌	(4.6) 鍔身(0.7)	0.5 鍔身(1.1)	0.3 鍔身0.3	(3.5)	長三角形鎌、左右対称の逆刺。
58	鉄鎌	(4.1) 鍔身0.8	0.5 鍔身0.8	0.3 鍔身0.3	(6.9)	長三角形鎌、左右対称の逆刺。
59	鉄鎌	(3.1) 鍔身1.7	0.7 鍔身0.9	0.3 鍔身0.3	(2.0)	長三角形鎌、左右対称の逆刺。
60	鉄鎌	(11.2) 鍔身(4.1)	0.6 鍔身1.0	0.4 鍔身0.4	(18.9)	長三角形鎌、片逆刺。茎部に鉄製金具を付ける。
61	鉄鎌	(5.2) 鍔身1.7	0.6 鍔身0.8	0.4 鍔身0.4	(4.4)	長三角形鎌、左右非対称の逆刺。
62	鉄鎌	(3.6) 鍔身2.3	0.5 鍔身1.0	0.4 鍔身0.4		長三角形鎌、左右非対称の逆刺。
63	鉄鎌	(8.8) 鍔身1.4	1.0 鍔身1.7	0.4 鍔身0.4	(14.7)	長三角形鎌、左右非対称の逆刺。茎部に鉄製金具を付ける。
64	鉄鎌	(2.4) 鍔身2.0	0.7 鍔身1.2	0.4 鍔身0.4		長三角形鎌、左右非対称の逆刺。
65	鉄鎌	(5.5) 鍔身4.3	0.5 鍔身1.0	0.3 鍔身0.4	(5.2)	長三角形鎌、左右非対称の逆刺。
66	鉄鎌	鍔身3.6	鍔身(1.1)	鍔身0.3	(3.0)	長三角形鎌。
67	鉄鎌	(5.7) 茎深(3.4)	0.9	0.3	(7.2)	茎部～茎部。
68	鉄鎌	(5.1) 茎深(4.2)	0.9 茎深0.4	0.4	(3.3)	茎部～茎部。
69	鉄鎌	(3.5) 茎深(1.2)	0.9 茎深0.8	0.3	(4.9)	茎部～茎部。
70	鉄鎌	(7.5) 茎深(1.6)	0.5	0.3	(15.0)	茎部～茎部。茎部に鉄製金具を付ける。

第18表 小森谷家所蔵鐵製品觀察表(1)

VI 小森谷家所蔵資料

番号	器種	長幅(cm)	短幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
71	鉄瓶	(2.4) 蓋部(1.1)	0.9 蓋部0.4	0.3 蓋部0.15	(4.3)	瓶部～蓋部。蓋部に鉄製金具を付ける。
72	鉄瓶	(3.3)	0.6 蓋部0.5	0.3	(5.1)	瓶部～蓋部。蓋部に鉄製金具を付ける。
73	鉄瓶	(3.6)	0.8 蓋部0.5	0.4	(5.2)	瓶部～蓋部。蓋部に鉄製金具を付ける。
74	小札	4.2	3.9	0.4	10.6	偏円頭部、鍔孔二列4個の小札(4.2cm×1.8cm)が3枚。
75	小札	(4.0)	3.9	0.3	(15.5)	(4.0cm×2.3cm)の小札が2枚。
76	ヤリカンン	刃部(3.1) 蓋部(1.8)	刃部1.2	刃部0.2		
77	辻金具	伏鉢部径2.6		0.3	(11.6)	鉄泡金鋼製。資金具は鉄地銀張。
78	辻金具	伏鉢部径2.7			(20.5)	鉄泡金鋼製。刃形脚部は新留め3カ所、4枚構成。資金具は鉄地銀張。
79	辻金具	伏鉢部径2.8			20.1	鉄泡金鋼製。刃形脚部は新留め3カ所、4枚構成。資金具は鉄地銀張。
80	辻金具	(3.3)	2.1	0.2	(7.3)	新君令銅製。方形脚部は鎖止め4カ所。資金具は鉄地銀張。
81	辻金具	3.0	2.2	0.2	5.5	鉄泡金鋼製。方形、鎖止め4カ所。
82	辻金具	2.9	2.2	0.2	8.6	青銅製。方形、鎖止め4カ所。
83	辻金具	2.7	2.0	0.2	8.6	青銅製。刀形、鎖止め4カ所。
84	辻金具	2.7	2.2	0.2	7.1	青銅製。方形、鎖止め4カ所。
85	辻金具	1.8	1.8	0.1	2.4	青銅製。方形、鎖止め4カ所。
86	辻金具	2.3	2.2	0.2	5.5	青銅製。方形、鎖止め4カ所。
87	辻金具	2.4	2.0	0.2	6.4	青銅製。方形、鎖止め4カ所。
88	辻金具	(1.3)	1.8	0.1	(2.6)	青銅製。
89	辻金具	(1.6)	2.0	0.2	(3.1)	青銅製。
90	辻金具	2.8	2.2	0.15	(6.4)	青銅製。円頭形、鎖止め4カ所。
91	辻金具	2.4	1.9	0.1	4.6	青銅製。円頭形、鎖止め4カ所。
92	資金具	3.0	1.4	1.1	2.3	幅5mmの資金具2本。鉄地銀張。
93	資金具	3.1	1.7	1.2	5.1	幅5mmの資金具2本。鉄地銀張。
94	辻金具	(2.5)	1.4	0.2	(2.0)	方形脚部、新留め3カ所、鉄地金鋼製。資金具は鉄地銀張。
95	辻金具	(2.1)	1.4	0.2	(2.9)	方形脚部、新留め3カ所、鉄泡金鋼製。資金具は鉄地銀張。
96	辻金具	(2.0)	1.6	0.2	(3.2)	円頭形脚部、新留め3カ所、鉄地金鋼製。資金具は鉄地銀張。
97	花弁形赤葉	(13.2)	5.4	0.25	(42.0)	鉄地金鋼製。方形金具と花弁形金具が吊下金具で結合。花弁形金具は中央がやくびれ。下部は丸みをもつて取り彫りによる1条の区画内に波状列点文を施す。
98	花弁形赤葉	(5.1)	(6.6)	0.25	(9.1)	鉄地金鋼製。花弁形金具は下部が丸みをもつて取り彫りによる1条の区画内に波状列点文を施す。
99	昂手金具	5.0	2.8	0.3	(15.5)	鉄地金鋼製。2.8×28cmの方形板に昂手が付く。新留め5カ所。
100	昂手金具	(2.9)	2.5	0.3	(10.0)	鉄地金鋼製新留め3カ所。
101	昂手金具	(3.1)	2.4	0.3	(10.1)	鉄地金鋼製新留め5カ所。

第19表 小森谷家所蔵鐵製品觀察表(2)

玉類

勾玉（第53図1～10）

勾玉は10点あり、5点が石製、5点がガラス製である。石製勾玉の材質はヒスイである。このほかに本資料の「ベンガラ」の箱の中に混ざっていた薄青色のガラス玉の小片があり、形状からガラス製勾玉の可能性が高い。

ヒスイ製勾玉（1～5）は、基本的にC字状の形態を示している。勾玉としては小形であるため、腹部の抉りは少なく、どちらかと言えばく字状に近寄ったものが多い。ガラス製勾玉に比べて胸部の幅が広く、尾部は断面台形に近いか、背部に稜をもって扁平になる傾向にある。全長は1.8～2.2cmで、大きさは比較的揃っている。穿孔はいずれも片面穿孔である。孔の位置は頭部中央に穿孔されるが、4は穿孔下面が背部寄りに位置している。

ガラス製勾玉（6～10）も、ヒスイ製勾玉と同様の形態をとる。ただ、ヒスイ製勾玉と比べると、胸部から尾部にかけて幅が小さくすっきりとした形状をもち、背部に稜ではなく尾部断面は全体に丸味をもつ。9・10は紺色、6は水色、8は薄青色を呈する。7は淡緑色で少し銀化している。全長が1.8cm以下のものと、2.3cm以上という大小がある。孔の位置は6・9が頭部先端寄り、8・10が頸部中央、7が頸部寄りの頭部と、あまりまとまりはない。孔の両端面はわずかにくぼむ傾向にある。8の孔の片面は大きく広げられている。

金層ガラス三連玉（第53図11・12）

金層ガラスで形作られた三連玉は2点ある。管状の内玉・外玉からなる二重構造をもち、内玉と外玉の間は三連玉に形成するためにつくられたくびれの部分を除いて中空となっている。くびれの溝は切断用の工具を当てて回転させ、絞り込みながら形作ったと思われ、溝の最も深い部分に若干の不整合が生じている。

内玉の外側に金箔を付しているのだろうが、陳らに細かく培養しているようで、内玉・外玉が合わさってはじめて鮮やかな金色の発色に観察される。12は三連のうち図最下段の外玉が一部欠損し、内部の状態が良好に観察できたが、「ベンガラ」箱内に混ざっていたガラス玉片がここに接合することが判明した。その外玉の破片は、わずかに黄色味を帯びていることから、もともとのガラス自体にそのような発色が行われていたものと思われる。

外玉には孔主軸に平行する微小な気泡列が観察でき、外玉が巻き付け技法ではなく、引き伸ばし技法によって管状につくられたことがわかる。上述の欠損部の断面観察からも肯定されるところである。

金層ガラス玉については、埼玉県美里町の『白石古墳群II』（美里町教育委員会 2003）に詳述されている。その集成によれば、金層玉・銀層玉を出土している古墳は全国で18例あり、中部・北陸以東の東日本に限ると梁瀬二子塚古墳のほかは埼玉県美里町白石18号墳・同町白石久保1号

VI 小森谷家所蔵資料

墳、岩手県北上市の長沼3号墳に過ぎない。そのうちで金層ガラス三連玉は葉瀬二子塚古墳と白石久保1号墳のみであり、本資料の方が白石久保1号墳例より長さ・最大径とも2~3mm大振りである。この三連玉が葉瀬二子塚古墳の築造に伴うものであれば、金層ガラスの連玉としては最古のものとなる。

碧玉製管玉（第54図13~33）

管玉は21点あり、いずれもいわゆる碧玉製（緑色凝灰岩）で、深い濃緑色を呈している。大きさは散つきが少なく、全長は1.9~2.7cm、最大径は0.7~1.0cmの範囲に収まる。重さは2.2~4.3gで少し散つきがある。形態は直線的なものが多く、17・25・31にはわずかに中膨れ傾向が見られる。穿孔方法は片面穿孔で、15・29・32・33は穿孔下側に発掘調査出土品と同様の回転整形が見られる。また、14・26では穿孔下面に穿孔時にできたと思われる剝落痕跡を残す。側面の研磨は丁寧で、整形時の研磨痕はほとんど見られないが、上下両端面は研磨痕がわずかに観察できる。

水晶製算盤玉（第54図34~39）

算盤玉は6点あり、いずれも水晶製である。穿孔方法は片面穿孔で、下面に穿孔時にできたと思われる剝落痕を残すものが2点ある。形態的には扁平気味で最大径と上下面径の差が大きいもの（34~36）と、少し高さがあり最大径と上下面径の差が小さいもの（37~39）の2種がある。

水晶製切子玉（第54図40）

小形の切子玉が1点ある。水晶製で、穿孔方法は片面穿孔、下面には穿孔時に思われる剝落が見られる。側面は鏡を有し中央部の横断面は八面体をなすが、上下両端につくり出された面は円形に近い。

碧玉製秦玉（第54図55・56）

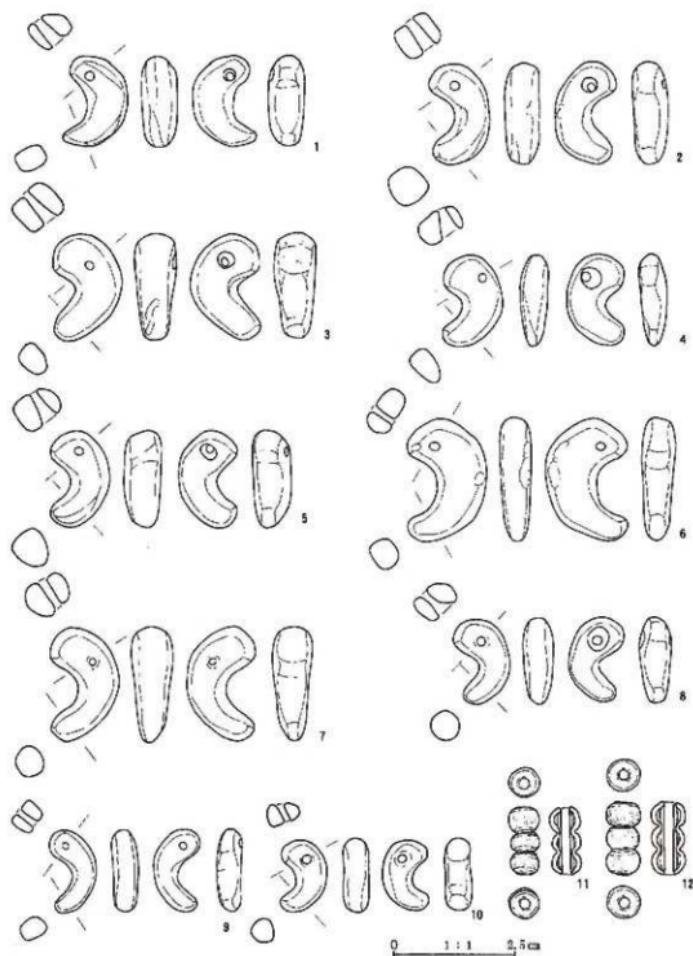
秦玉は2点ある。碧玉製と見られる。穿孔方法は両面穿孔である。上下両面は平坦な面をつくり出している。56は全体に歪な形状で、上面が孔に斜行する面をもっている。55は中央部に最大径をもち、均整のとれた形状を示す。

琥珀製丸玉（第55図150）

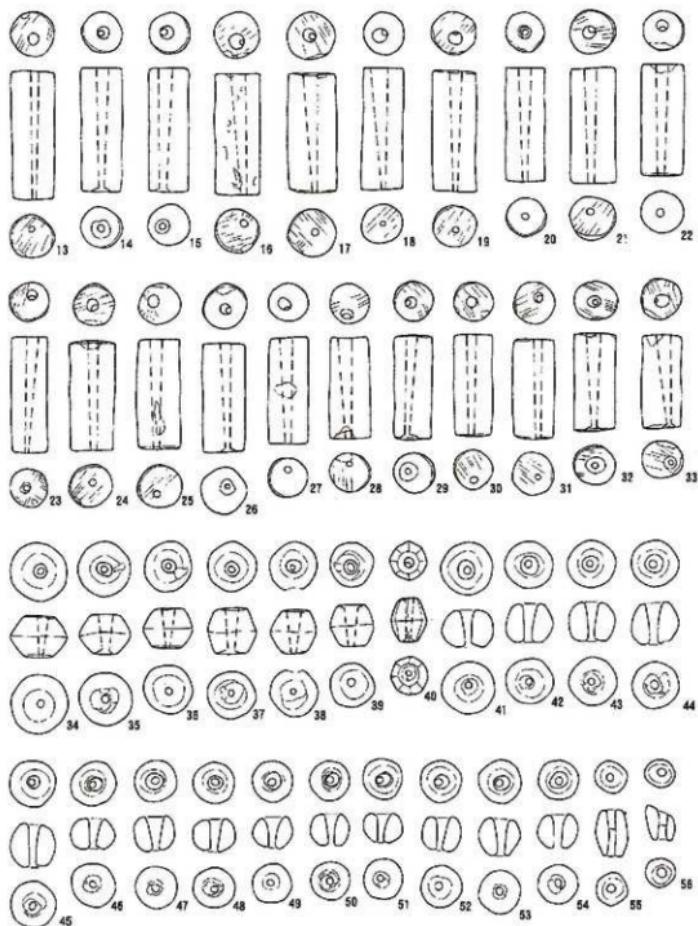
「ペンガラ」箱内に混ざっていたもので、安中市史の段階では資料化されていない。

水晶製丸玉（第54図44~56、第55図57~63）

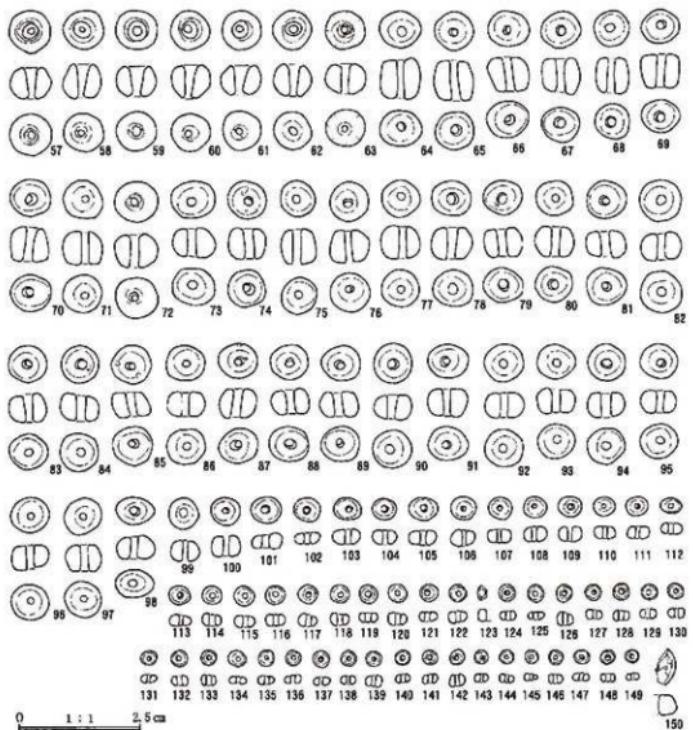
水晶製丸玉は21点ある。穿孔方法は片面穿孔で、剝離性のある素材と丸玉の形状ゆえか、下面に大小の剝落痕を残すものが18点ある。大きさでほぼ二分でき、厚さ7.5mm以下のもの（46~64）は最大径8mm前後に集中し、厚さ7.9mm以上のもの（41~45）は最大径9mm以上に集中してくる。後者は上下面、とくに上面にある程度の平坦面をもつが、前者ではあまり顕著な平坦面はつくらない。



第53圖 玉類実測図(1)



第54図 玉類実測図(2)



第55図 玉類実測図(3)

ガラス製丸玉（第55図64～98）

ガラス製丸玉は35点ある。色調はすべて紺色である。いざれも紐孔に平行に気泡列が観察されることから、引き伸ばした管状のガラスを切断・再加熱して成形した、管切り技法で製作されたものと考えられる。形態的に背が高く扁平度の小さいもの（64～70・74～75）が2割強を占めている。厚さは4.7mm～0.83mm、最大径5.7～8.9mmの範囲にあるが、厚さ0.52～0.55mm、厚さ／最大径が0.6～0.7の範囲への集中度が高い。

VI 小森谷家所蔵資料

ガラス製小玉 (第55図99~149)

【安中市史】では48点となっているが、大きさからガラス製丸玉としていた1点を小玉に含めたのと、そのほかに「ベンガラ」箱内に2点混ざっていたため、計51点となった。このうち青色系統が23点、黄緑色系統が37点、紺色1点である。重さは11点が0.2gを測るが、残りは0.1gかそれ以下である。

玉類以外の装身具

垂筋付耳飾 (第56図1~4)

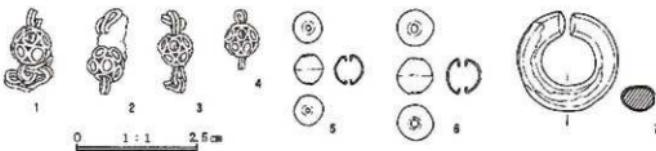
中间部にあたる花籠が4点ある。縁背に被われているが、わずかに金色の光沢を見て取ることができ、金銅製と見なされる。花籠は直径約7~8mmの球状を呈し、0.7mm強の細線でつくられた長径3.5~4.0mm程度の小環をつなげて球形に形成している。花籠の上下両端ではそれぞれ、上下面中央に位置する小環を通して、長めのU字状の環をつくった2本1単位の細線が外部に出ていて。ここに兵庫鎖が取り付き、1では実際に兵庫鎖が3単位残存している。花籠内部でこの細線がどのようにになっているかは、鈍化が著しいため充分に観察できないが、上下とも一繋がりとなって貫通しているように見える。なお、花籠を形成する小環に刻み目等はない。残存長は1が3.35cm、2が3.53cm、3が3.37cm、4が2.45cm、重さは順に1.4g、1.2g、0.8g、0.6gを測る。

空玉 (第56図5・6)

縁背に被われた空玉が2点存在する。形状的には丸玉である。発掘調査出土品と同種のつくりであり、この2点も金銅製空玉と考えられる。孔周囲の内側に穿孔時のめくり込みが見られるため、空玉は外側からなされたものと考えられる。体部の縦ぎぬがわずかに観察できる。5は高さ6.1mm、最大径6.0mm、孔径は1.0mm程度、重さは0.9gである。6は高さ7.3mm、最大径7.0mm、孔径は1.5mm程度、重さは0.8gを測る。

耳環 (第56図7)

小森谷家所蔵資料には金銅製の耳環が1点含まれている。表面は一部剥落し、鈍化も進んでいる。時期的に他の小森谷家所蔵資料と同時期とは考えられない。追葬による可能性もあるが、ほかに似いそうな遺物を確認できないため、むしろ他の古墳の資料が混在してしまったとも考えられる。高さ2.02cm、幅2.08cm、厚さ0.70cm、重さ11.9gを測る。



第56図 金属製装身具測定図

句五

番号	全長(cm)	全体幅(cm)	頸部幅(cm)	頸部厚さ(cm)	重さ(g)	材質・色調
1	1.85	1.24	0.78	0.65	3.4	ヒスイ
2	2.08	1.20	0.83	0.71	3.6	ヒスイ
3	2.22	1.42	1.05	0.80	4.7	ヒスイ
4	1.88	1.24	0.95	0.58	1.9	ヒスイ
5	2.03	1.22	0.87	0.71	2.5	ヒスイ
6	2.58	1.64	1.04	0.53	3.2	ガラス・水色
7	2.37	1.42	0.93	0.78	3.0	ガラス・淡緑色
8	1.78	1.07	0.82	0.62	1.2	ガラス・薄青色
9	1.73	0.93	0.62	0.48	1.1	ガラス・紺色
10	1.49	0.95	0.68	0.46	0.9	ガラス・紺色

金屬ガラス三連三

番号	長さ(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
11	1.36	0.64	0.21	0.6
12	1.49	0.70	0.21	0.7

管玉

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	備考
13	2.64	0.92	2.5	
14	2.57	0.85	4.0	
15	2.58	0.81	3.8	
16	2.53	0.93	4.0	
17	2.49	1.00	4.3	
18	2.53	0.86	3.6	
19	2.50	0.91	4.2	
20	2.37	0.82	3.3	
21	2.41	0.92	3.8	
22	2.33	0.88	3.4	
23	2.40	0.74	2.8	
24	2.29	0.95	3.5	
25	2.28	0.90	3.3	
26	2.28	0.88	3.7	
27	2.20	0.83	3.7	
28	2.16	0.86	2.7	
29	2.17	0.78	2.6	
30	2.13	0.89	2.4	
31	2.10	0.88	2.9	
32	2.03	0.83	2.5	
33	1.95	0.84	2.2	

塔玉製圓玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)
35	1.97	0.65	0.3
36	0.75	0.58	0.2

水晶製丸玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)
41	0.79	1.04	1.2
42	0.89	0.96	1.1
43	0.81	0.94	1.0
44	0.88	0.93	1.1
45	0.88	0.92	1.1
46	0.64	0.89	0.6
47	0.70	0.82	0.7
48	0.70	0.84	0.7
49	0.68	0.81	0.6
50	0.72	0.81	0.7
51	0.66	0.78	0.5
52	0.70	0.81	0.6
53	0.79	0.83	0.7
54	0.71	0.81	0.7
57	0.66	0.84	0.6
58	0.72	0.78	0.6
59	0.64	0.82	0.6
60	0.71	0.79	0.6
61	0.61	0.79	0.5
62	0.66	0.79	0.6
63	0.62	0.80	0.5

水晶製圓玉・切子玉

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	備考
34	0.80	1.22	1.5	算盤玉
35	0.80	1.10	1.1	算盤玉
36	0.81	1.04	1.1	算盤玉
37	0.91	1.02	1.2	算盤玉
38	0.88	0.98	1.1	算盤玉
39	0.82	0.91	0.9	算盤玉
40	0.88	0.86	0.6	切子玉

ガラス製丸玉・琥珀製丸玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)
64	0.83	0.85	0.7
65	0.80	0.81	0.7

第20表 玉類計測値一覽表(1)

VI 小森谷家所藏資料

ガラス製丸玉・続前製丸玉

番号	厚さ(cm)	最大径(cm)	重さ(g)
66	0.69	0.84	0.6
67	0.71	0.80	0.6
68	0.72	0.68	0.5
69	0.70	0.81	0.6
70	0.74	0.78	0.5
71	0.68	0.85	0.6
72	0.79	0.87	0.6
73	0.62	0.89	0.5
74	0.61	0.74	0.5
75	0.81	0.79	0.5
76	0.68	0.72	0.5
77	0.71	0.80	0.6
78	0.65	0.89	0.5
79	0.62	0.78	0.5
80	0.63	0.78	0.5
81	0.54	0.80	0.5
82	0.59	0.79	0.5
83	0.59	0.79	0.5
84	0.56	0.77	0.5
85	0.51	0.81	0.5
86	0.53	0.77	0.4
87	0.61	0.79	0.5
88	0.52	0.77	0.4
89	0.51	0.80	0.4
90	0.53	0.79	0.5
91	0.60	0.82	0.5
92	0.53	0.80	0.5
93	0.51	0.78	0.4
94	0.52	0.78	0.4
95	0.49	0.73	0.3
96	0.51	0.73	0.4
97	0.52	0.68	0.4
98	0.47	0.76	0.3
150	(0.81)	(0.75)	0.2

ガラス製小玉

No	厚さ(cm)	最大径(cm)	色調
99	0.45	0.57	青色
100	0.43	0.59	淡緑色
101	0.32	0.62	淡緑色
102	0.23	0.53	淡緑色
103	0.30	0.56	淡緑色
104	0.31	0.50	淡緑色
105	0.30	0.56	淡緑色

No	厚さ(cm)	最大径(cm)	色調
106	0.35	0.51	淡緑色
107	0.26	0.48	淡緑色
108	0.30	0.48	淡緑色
109	0.30	0.47	淡緑色
110	0.25	0.44	淡緑色
111	0.25	0.46	淡緑色
112	0.22	0.42	淡緑色
113	0.24	0.45	淡緑色
114	0.25	0.42	青色
115	0.27	0.37	青色
116	0.25	0.39	青色
117	0.27	0.40	青色
118	0.26	0.39	青色
119	0.20	0.38	青色
120	0.26	0.38	青色
121	0.19	0.36	薄青色
122	0.25	0.38	淡緑色
123	0.26	0.20	青色
124	0.19	0.34	青色
125	0.15	0.34	青色
126	0.30	0.33	青色
127	0.20	0.34	淡緑色
128	0.21	0.34	青色
129	0.19	0.33	青色
130	0.20	0.35	淡緑色
131	0.18	0.33	淡緑色
132	0.21	0.34	青色
133	0.23	0.31	青色
134	0.15	0.36	淡緑色
135	0.19	0.34	淡緑色
136	0.18	0.33	薄青色
137	0.15	0.35	淡緑色
138	0.17	0.31	薄青色
139	0.24	0.35	淡緑色
140	0.17	0.30	淡緑色
141	0.19	0.32	薄青色
142	0.25	0.32	薄青色
143	0.17	0.29	淡緑色
144	0.18	0.29	淡緑色
145	0.15	0.27	青色
146	0.20	0.28	青色
147	0.15	0.33	淡緑色
148	0.15	0.29	青色
149	0.15	0.28	淡緑色

第21表 玉類計測値一覧表(2)

滑石製模造品

鏡（第57図1）

無文の円盤に鉢の表現を付け鉢孔を開けただけの簡単なつくりである。鉢部分の表現は肩の把手部と同様に、長方形の突起をつくり出している。鉢の位置も円盤部の中央にはきていない。鉢の中央左右には鉢孔が開けられるが、左右それぞれの側からやや斜め下向きに穿孔して貫通させている。鉢や鉢孔のつくりは群馬町三ツ寺1遺跡出土例に近似している。円盤部の側面には左右方向の研磨痕があり、有孔円板とは異なる丁寧なつくりとなっている。

短甲（第57図2・3）

短甲を模したと見られる模造品は2点ある。下端側が広い分銅形の平面形状と、弧状に内彎する横断面を有し、短甲十草摺の正面のみを表現したものと考えられる。草摺部分の広がりが大きいためか、縦断面は緩やかに外反する。

2は上下両端近くの中央部に1つずつの孔を貫通させている。下方の貫通孔の少し上方に未貫通の孔が外面から0.4cmほどの深さで穿たれている。貫通している孔は裏面では二重になってしまっており8字状の平面を見せていている。厚みがあるための迎えの穿孔にも見えるが、正面側の穿孔が裏面にまで達していることを考えると、むしろ孔の径を広げるための造作であろうか。3は半分を欠失している。遺存状況からして穿孔は上方中央部に1孔だけのようである。この孔も2と同様に裏面側からの穿孔が重なって二重になっている。

盾（第57図4～6）

隅円長方形の板の裏面やや下方に断面台形の突起をつくり出し把手を表現したものである。上下両端近くの中央に1つずつ孔を開けており、把手部分への穿孔はない。把手部分は長方形に近い平面形を呈するが、上下両端が撥状に少し広がる。盾面の左右側縁部は直線的で内彎する傾向はない。上下の側縁は下縁が幾分弧状を呈するようだが、上縁は5を見る限り直線的で、栃木県雷電山遺跡出土例のような明らかな山形を呈することはない。ただ、4は上端部近くの右側縁が内折し幅を減じており、頂部表現がデフォルメされた結果とも考えられる。

鎌（第57図7・8）

鎌形模造品は2点ある。いずれも略三角形の平面形を呈する無茎の鎌で、基部は浅く抉り込んでいる。中央部と下半部に2つの孔を有する。下面および左右の側縁部は鉛直方向に面をとる。上端部すなわち鎌身部先端にいくにつれて左右のこの面は狭く、厚みも薄くなっていく。表裏面の中央は平坦であるが、周縁部は斜めに面をつくり、刃部の作出を意識している。

劍（第58図9）

刃部先端と基部下端が少し欠け、岡正面の右側縁には何かに衝られたような痕跡がある。刃部は表裏両面に鎌を有するが、基部に近づくにつれ不明瞭になっている。基部と刃部の境は緩やか

VI 小森谷家所蔵資料

な撫閑を両側にもつ。基部下端が欠けているため、孔を有するかどうかは不明である。

刀子 (第58図10~13)

明らかに刀子と考えられるものは10~13の4点である。10・11は厚さが一定の板状につくられている。柄表現はないが、他に抜身の形態があることを考えると、この2点が抜身かどうかは判断が付かない。10は刃部側・棟側両方に閑があり、ともに撫閑となっている。基部と厚みを変えて刃部を表現するようなことはなく、板状につくられているだけであり、抜身どころか柄さえ外された状態にも見える。しかし、この撫閑は整形方法による可能性が大きい。11は棟側に閑はない。刃部側の閑は撫閑であるが、抉り込みを入れて基部を表現しているのであって、きわめて形骸化した表現である。基部の抉り込み部分は表裏面から孔主軸に斜行するように整形を加え、ここだけは側縁部の厚みが薄くなっている。10・11とともに基部下端近くに孔が1つ穿たれる。

一方、12・13は刃部より柄部が幅広となるもので、13の形状から明らかのように、抜身の刀子を表現したものと思われる。柄部は柄尻近くが棟側に湾曲する。この湾曲の中央に孔が位置する。柄部の横断面は膨らみをもつ。12は刃部を欠くが、折損面の形状から見ると、13と同様の刃部が付いていた可能性が高い。13は柄部に比べてかなり短い刃部をもち、平面的にも断面形態でも棟と刃部の表現ははっきりしている。しかし、柄部と刃部との厚みに差異がなく、段差をもたない。この2点は築瀬二子塚古墳出土とされる模造品の中では、形骸化の少ない品と考えられる。

斧 (第58図14~16)

斧は3点あり、有肩有袋鉄斧を模したものと見なされる。15・16は平面形状から斧の模造品として肯定するが、14の形状は斧とするのにいさか躊躇を感じる。しかし、裏面に上下に走る溝は16と共通のもので、有肩有袋鉄斧の袋部の合せ目を表現したものが、その本末の意味を失って、刃部にまで伸びたものと考えられる。また、左右の側刃中央にある抉り込みも他の2点に共通するものである。3点とも先端を薄くして刃を表現するなどせず、平面形状のみを継承するもので、14はその形状もあやふやなものとなっている。15・16にしても袋部の表現は実物のような直線的な形態ではなく、分銅形の打製石斧にも似た形態となっているのは、左右の抉り込みが器種の差別化の基調となっているためであろう。

14は最も雑なつくりで、表裏面ともに整形時の研磨痕が顕著に残る。左右の抉り込みは小さく浅い。裏面の溝は2条の溝を重ね合わせるように刻んでいて、その点は16と共通する。ただ、溝は上部の孔までは伸びていない。15は平板な板状につくられており、厚みは刃部側がわずかに薄くつくっている。裏面の溝は見られない。左右の抉り込みは大きいか浅い。16は刃部を大きくとり、左右の抉り込みは大きく深い。裏面には孔の上を通って上端から下端まで溝が走る。これは2条の溝を重ね合わせるように刻んだものであり、溝の底面は緩いW字状となっている。

鎌（第59図19）

19は刃部先端を欠き、全体の形状は明らかでない。着柄部に折曲げ表現はなく、刃部と着柄部の境は明瞭ではない。鎌先の平面形状のみを写したものである。遺存部分では刃部は比較的直線的で、着柄部に孔が1つ穿たれている。着柄部に至るまで下端側の厚みが薄くつくられており、刃部と着柄部の境は意識していない。

有孔円板（第59図21～33、第60図34～47）

大きく言って、円形ないしは橢円形を呈する双孔円板が17点、半円形ないしは方形に近い單孔円板が10点ある。前者は鏡を、後者は勾玉を模したものと看される。

双孔円板はその最大径から5.0～5.5cm、4.0～4.5cm、4.0cm未満の3グループに分離できる。その整形は表面面を平滑に研磨し、側縁部は表面面に対して鉛直方向つまり孔主軸と平行する方向に粗く整形研磨している。側縁部の整形が鏡形模造品とは大きく異なる。表面面の整形も多く研磨条痕を残し、雰囲気を与える。

单孔円板は最大長2.5～3.5cm、2.0～2.5cmの2グループがある。本資料中6点が前者に、4点が後者に属する。中央部よりやや上方に穿孔を有し、下側がやや先細り気味の平面形をもっている。整形は双孔円板と同様である。

不明器種（第58図17・18、第59図20）

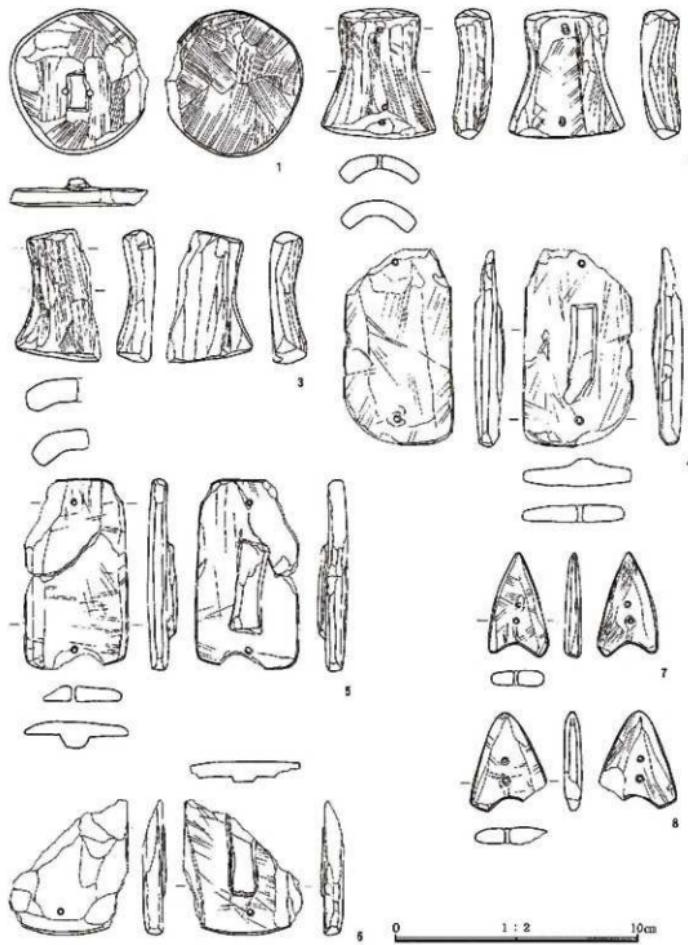
17は片側が薄くなつて略三角形の断面を呈する。下端部は厚みのある側縁側から幅を減じて先細りとしつつ、端部を丸く上げる。1孔の穿孔がある。刀子の柄部片の可能性がある。

18は直線的な側縁と丸味のある上縁をもつ板状である。上縁の中央と思われる位置に1孔の穿孔がある。側縁部に沿つた1.3cmほどの間には少し厚みをもたせている。少し厚みと大きさに乏しいが、盾の可能性があろうか。

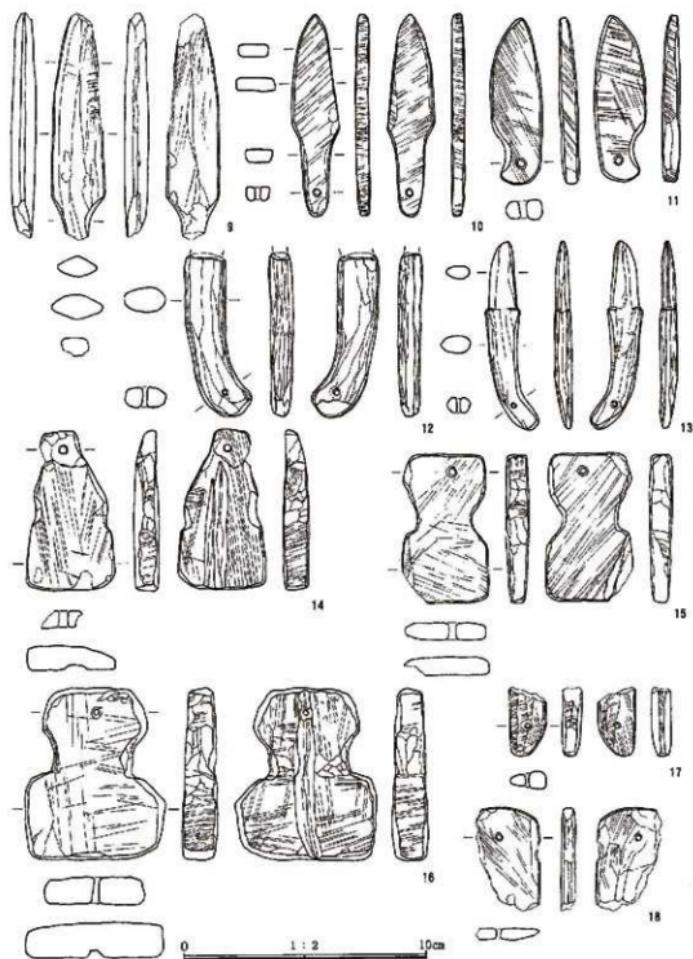
20は鎌の可能性があるが、はっきりしない。着柄部側の破片だろうか。孔が1つ穿たれている。全体に薄い板状であるが、片面の刃部側を斜めに面をとるように削り込んでいるのは、刃を意識したものと考えられる。

白玉

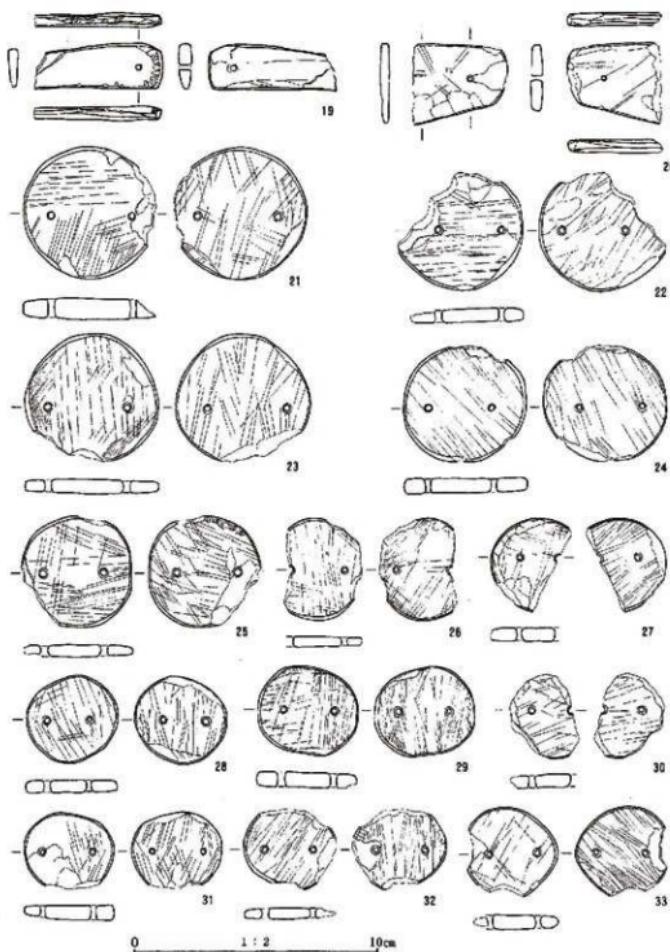
総数968点を数える。時間的および紙数の制約があり、実測図は掲載できない。小森谷家所蔵資料では点数が多く散つきが大きくなるため、グルーピングは不鮮明となざるを得ない。しかし、ある程度は発掘調査で出土した白玉と同様の傾向が見て取れる。つまり、孔内面に孔主軸に対して直角の条痕が見られ、回転力を強くして穿孔していると考えられるものは、孔径2.4mm以下に多い。これに対して、孔主軸に対して斜方向や平行方向の条痕が見られ、工具を回転させつつも押圧力を強く加えたものは、孔径2.3mm以上のものが多い。前者の方が穿孔された孔の形状は整っており、後者は孔の上下端に穿孔時と思われる剥落が時折認められる。ただ、調査での出土品に比



第57圖 石製模造品実測図(1)



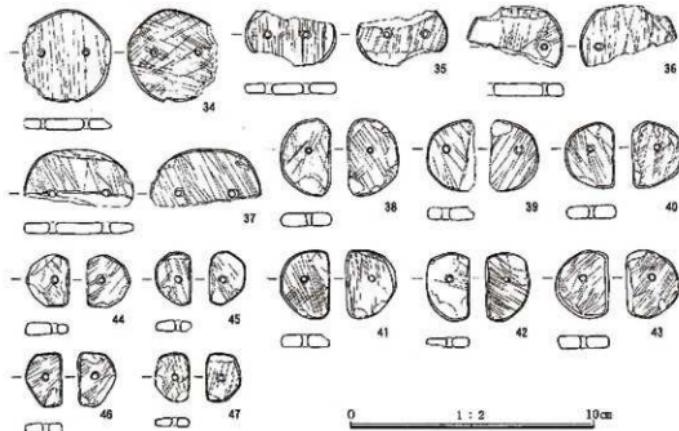
第58図 石製模造品実測図(2)



第59圖 石製模造品実測図(3)

べると、白玉の厚さが5.0mmを越えるものはむしろ後者に属するものが多い。出土品と本資料の両者を併せ考えると、大きさによる偏りは相殺される結果になり、純粹に製作技法の上の差異と見られる。

(荒木男次)



第60図 石製模造品実測図(4)

青石製模造品

番号	種類	各部の大きさ(cm)	重さ(g)	備考
1	鏡形	円盤部径5.95×(5.68), 脇厚1.16, 円盤部厚さ0.74, 肩部長さ1.58, 肩部幅0.90, 底部厚さ0.42	51.8	
2	鏡甲形	高さ5.28, 上端幅3.27, 中央幅3.03, 下端幅1.64, 厚さ0.70, 上部孔径0.21, 下部孔径0.23	44.7	
3	鏡甲形	高さ5.41, 上端幅(2.20), 中央幅(2.33), 下端幅(3.50), 厚さ1.01, 孔径0.20	32.7	
4	鏡形	全長(8.10), 最大幅4.45, 脇厚1.12, 肩部厚さ0.84, 把手部長84.10, 把手 幅1.09, 把手部厚さ0.28, 上部孔径0.19, 下部孔径0.21	54.2	
5	盾形	全長7.75, 最大幅4.28, 脇厚1.06, 底面部厚さ3.02, 把手部長さ3.75, 把手部 幅1.31, 把手部厚さ0.44, 上部孔径0.18, 下部孔径0.21	44.9	
6	盾形	全長(5.56), 最大幅(4.87), 脇厚0.85, 后盾部厚さ0.64, 把手部長さ(3.38), 把手部幅1.06, 把手部厚さ0.21, 孔径0.20	29.6	
7	鏡形	全長4.30, 中央長3.75, 最大幅2.50, 厚さ0.63, 上部孔径0.15, 下部孔径0.16, 孔間距離0.53	9.2	
8	鏡形	全長4.04, 中央長3.51, 最大幅(3.15), 厚さ0.69, 上部孔径0.18, 下部孔径0.21, 孔間距離0.64	11.8	

第22表 石製模造品計測値一覧表(1)

VI 小森谷家所藏資料

番号	種類	各部の大きさ(cm)			重さ(g)	備考
		全長	刃部長	身部幅		
9	剣形	全長(9.30), 身部長さ7.57, 身部幅2.38, 身部厚さ1.05, 柄部長(1.43), 柄部幅1.03, 柄部厚さ0.78			28.2	
10	刀子形	全長(8.30), 刃部長1.64, 刃部幅1.90, 刃部厚0.57, 柄部長3.66, 柄部幅1.22, 柄部厚さ0.55, 孔径0.26			15.2	
11	刀子形	全長(6.77), 刃部幅2.13, 柄部幅1.48, 柄部幅1.60, 厚さ0.82, 孔径0.28			20.8	
12	刀子形	全長(6.76), 刃部幅1.35, 柄部幅1.68, 柄部幅1.64, 厚さ0.98, 孔径0.18			19.8	
13	刀子形	全長(6.74), 刃部長2.76, 刃部幅1.13, 刃部厚0.50, 柄部長4.98, 柄部幅1.41, 柄部幅0.94, 柄部厚さ0.68, 孔径0.18			19.2	
14	舟形	全長(6.57), 上端幅1.32, 中央折り柄幅2.92, 下端幅3.60, 厚さ1.02, 孔径0.29			42.1	
15	舟形	全長(6.13), 上端幅2.94, 上部最大幅3.38, 中央折り柄幅2.23, 下端幅3.52, 厚さ0.73, 孔径0.27			35.9	
16	舟形	全長(7.06), 上端幅3.22, 上部最大幅4.28, 中央折り柄幅3.22, 下端幅5.14, 下部最大幅5.74, 厚さ1.45, 孔径0.23			96.6	
17	不明	長さ(2.85), 幅1.53, 厚さ0.72, 孔径0.24			5.1	刀子形か?
18	不明	長さ(4.23), 幅2.65, 厚さ0.45, 孔径0.22			10.4	刀子形か?
19	鑑形	長さ(5.24), 最大幅1.83, 普通鑑形幅1.52, 厚さ0.52, 孔径0.22			9.4	
20	不明	長さ(3.87), 最大幅3.35, 厚さ0.48, 孔径0.17			10.7	鑑形か?

滑石製有孔円板

番号	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔間距離(cm)	重さ(g)	備考
21	5.42	(5.43)	0.67	3.06	46.4	双孔円板
22	(4.86)	(5.14)	0.56	2.34	25.0	双孔円板
23	(5.25)	5.51	0.61	2.98	28.6	双孔円板
24	(4.77)	5.05	0.60	2.34	28.9	双孔円板
25	4.58	(4.53)	0.52	2.22	19.0	双孔円板
26	4.17	(3.18)	0.43	2.02	11.1	双孔円板
27	(3.83)	(3.28)	0.57	1.36	10.0	双孔円板
28	3.58	3.78	0.49	1.54	12.4	双孔円板
29	3.56	4.11	0.62	1.85	18.1	双孔円板
30	(3.48)	(2.83)	0.53	1.36	8.0	双孔円板
31	(3.14)	3.73	0.58	1.90	10.7	双孔円板
32	(3.29)	(3.77)	0.48	1.75	10.1	双孔円板
33	(3.67)	(3.64)	0.60	1.78	11.7	双孔円板
34	3.75	(3.64)	0.44	1.64	11.8	双孔円板
35	(2.30)	3.72	0.44	1.33	5.1	双孔円板
36	(2.47)	(3.95)	0.52	2.01	8.5	双孔円板
37	(2.34)	4.52	0.46	1.94	9.4	双孔円板
38	3.17	2.04	0.53	—	6.3	单孔円板
39	2.92	(1.98)	0.53	—	5.6	单孔円板
40	2.77	2.04	0.54	—	5.7	单孔円板
41	2.83	2.05	0.52	—	6.0	单孔円板
42	2.83	1.78	0.42	—	3.6	单孔円板
43	2.78	2.17	0.52	—	5.9	单孔円板
44	2.12	1.76	0.48	—	3.1	单孔円板
45	2.15	1.45	0.43	—	2.4	单孔円板
46	2.23	1.47	0.51	—	2.7	单孔円板
47	2.00	1.42	0.35	—	2.0	单孔円板

第23表 石製模造品計測値一覧表(2)

土器

須恵器蓋（第61図1）

小森谷家の藏品で、明治12年に開口した際に出土したものと考えられる。石室玄室部分から出土している。

口縁部の約半分を欠損する以外はほぼ完存している。焼成は甘く、瓦質でやや燻し気味である。体部はほぼ直線的に外反し、口唇部付近でやや内湾する。口唇端部は面取りをしている。天井部との境界に沈線状の外稜を有することにより、体部と区画する。内面に赤色顔料の付着が認められる。色調は外面2.5GY4/1、内面5GY4/1、断面は2.5Y5/4であった。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器杯（第61図2）

小森谷家の藏品で、明治12年に開口した際に出土したものと考えられ、石室玄室部分からの出土と推定される。

口縁部の2/3を欠損する以外はほぼ完存している。口縁部はほぼ直線的に内傾し、口唇部付近で幾分直立気味に反る。口唇端部は面取りを行なうが比較的丸く仕上げられている。内面の底部にクロ痕を明瞭に残す。法量は口径9.9cm、高さ5.0cmである。焼成は硬質で還元焰焼成である。色調は外面5PB4/、内面5B4/、断面2.5GY6/1である。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器杯（第61図3）

小森谷家の藏品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したと推定される。丸底で、器高の中位よりもやや上面に蓋受部がある。口縁部分は内湾しており、口唇端部はしっかりと面取りをして丁寧に造り、中央がやや凹む。焼成はやや甘く、瓦質気味である。色調は外面N4/、内面7.5Y4/、断面2.5GY6/1で内面に赤色顔料の付着が認められる。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器杯身（第61図4）

小森谷家の藏品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したと推定される。

平底気味で緩やかに立ち上がり、器高の中位よりも下に蓋受部をもつ。口縁部はやや内傾して、口唇付近で直立気味に屈曲し、口唇端部は面取りをしっかりと行っている。法量は口径10.2cm、器高4.1cmである。色調は外面5PB4/、内面5B4/、断面2.5GY6/1で内面に赤色顔料の付着が認められる。胎土に長石粒、網雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器杯（第61図5）

小森谷家所蔵の須恵器杯身である。明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したものと考えられる。平底気味で、器高の中位よりもやや上面に蓋受部がある。口縁部分は内傾しており、

VI 小森谷家所蔵資料

口唇端部はしっかりと面取りをして丁寧に造られる。法量は口径9.9cm、深さ3.8cmで、蓋受部までの高さ2.5cmである。色調は外面N4/、内面N7/、断面10Y6/1、胎土に長石粒、絹雲母片岩粒を含んでおり、藤岡産と推定される。

須恵器高坏（第61図6）

小森谷家の蔵品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したものと考えられる。

從来脚部と坏部を別個体として扱うことが多いが、接点が摩滅しているもの、割り痕や模様、胎土、焼成などが一致することから、田口（1980）で指摘されている通り、同一個体と考えられる。口径10.6cm、器高8.7cmで、脚部の高さ4.8cmである。口縁部はほぼ直線的に外反する。口唇部分はユビでつまみあげるように先端ほど薄く仕上げ、端部は丸く仕上げる。坏部の外面に2条の沈線を施すことにより口縁部と区画している。体部にはヘラ状の工具を交互に斜めに刺突することにより描かれた波状沈線文が施されている。脚部は、緩やかに外湾して端部との境に沈線を施すことにより、区画する。透かし孔は長方形で3方に穿たれる。色調は坏部外面5Y6/1、内面2.5Y6/2、断面7.5Y5/1、脚部では外面7.5Y5/1、内面5Y5/2、断面2.5Y5/1、焼成はやや甘いが胎土は精選されており、長石粒、絹雲母片岩粒を含んでいることから藤岡産と推定される。

須恵器高坏（第61図7）

小森谷家の蔵品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したものと考えられる。

高坏脚部の1/3程度の破片である。脚端部は緩やかに外反して屈曲部分の下位に沈線を1条施している。

底径は10.3cm、脚部の残存高は6.6cmであった。色調は外面N4/、内面N5/、断面7.5Y5/1、胎土は緻密で絹雲母片岩粒が混入することから、藤岡産と考えられる。

須恵器高坏（第61図8）

小森谷家の蔵品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したものと考えられる。

高坏脚部の1/6程度の破片である。脚端部は緩やかに外湾気味に反り、端部と脚柱との境界を沈線で区画する。底径9.5cm、残存高5.1cmの法量を測る。色調は外面N6/、内面N6/、断面N6/で、胎土に絹雲母片岩粒が混入することから、藤岡産と考えられる。

須恵器長頸壺（第61図9）

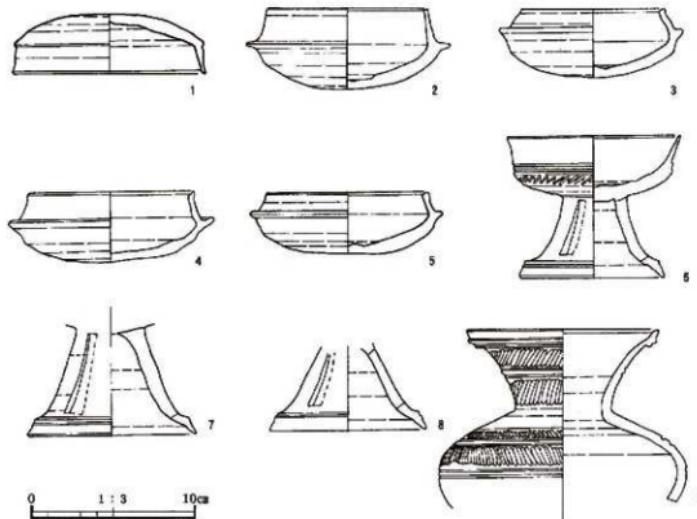
小森谷家の蔵品で、明治12年に開口した際に石室玄室部分から出土したものと考えられる。既報告では頸部付近のみの破片とされていたが、今回の調査による出土品と接合して胴部最大径が明らかとなった。また、口縁部の同一個体と考えられる破片が数点あるが、接点はなかった。法量は、口径11.7cm、最大径15.1cmで、胎土は瓦質で焼きが甘く、やや燐し氣味である。口縁部色調は、外面N3/、内面N4/、断面2.5Y5/3、体部は外面N3/、内面10YR6/3、断面2.5Y7/3で、洞部及び口縁部模様は高坏同様ヘラ状工具を刺突することにより施文される。胴部には二段に2

VI 小森谷家所蔵資料

条の沈線があり、口縁部も中央部を2条の沈線で区画する。今回の調査では前庭部付近より出土した破片と接合しており、恐らく、明治年間の開口時に石室内の土砂を出してふるった際に小破片のため廻棄されたものと推定される。接合しなかった口縁部分の破片はいずれも玄室の前面付近から出土しており、本来、副葬された位置に近いものと推定される。

本品は胎土・焼成等が前二子古墳出土品と類似しており、古墳の性格を考える上で興味深い。

(加部二生)



第61図 土器実測図

VII 成果と問題点

築瀬二子塚古墳

1 古墳は6世紀初頭に造られた2段構成の前方後円墳である。全長80m、後円部径48m、前方部幅63m、前方部と後円部の高さは標高約224mと同じであるが、周溝の底面に高低があるため、前方部では約6.8m、後円部では8.8mと視覚的には後円部が高く見える。第1段目の高さは前方部で2.16m～2.86m、くびれ部で3.8m、後円部で2.55mである。第2段目の高さは前方部で5.36m～5.64m、後円部で4mである。第1段平坦面は前方部で幅5.6m～6.56m、くびれ部で4.48m、後円部で5.44m～5.76mである。埴輪列が確認されている。なお、後円部北側は造り出状に突出しているが、第2段目の平面形は円形を呈している。後円部墳頂平坦面は径13mと推定される。周溝は前方部で幅12m、後円部で幅20mである。底面の状態をみると、後円部東側で標高215.1m、後円部の北・南側で標高215.8m、くびれ部両側で標高215.8m、前方部西側で218.8m、前方部北側で217m、南側で217.5mと後円部主軸線東側と前方部両角が張り出状に高くなっている。外堤は前方部主軸線西側で幅7.4m、前方部北・南角で7.68mと7.4m、後円部北側で9.84m、後円部主軸線東側で12.5mである。外周溝は幅1.2m～2.8mで後円部南東を除いて確認されている。

2 墓内に最初に導入された横穴式石室である。石室は短冊形を呈する両袖型で、玄室に比して狭道が細長い構造で、玄室はベンガラで染影されている。全長11.54m、狭道長7.47m、同前幅0.67m、奥幅0.95m、狭道高(奥)1.68m、玄室長4.07m、同前幅2.16m、同奥幅2.32m、玄室高(奥)2.2mの大きさで、開口方向はS—3°—Eである。床面構造は、開口部から狭道を下がって玄室に至る形態で、狭道を段差で下がり、玄室との境に段差があり積石で区画している。

3 副葬品は明治時代に発掘された出土品を含めると、多種多様な遺物が出土している。鉄製品では、装飾大刀(矧り環頭大刀・三輪玉で装飾された勾金付き大刀)・直刀・刀子・鹿角装刀子・石突・鐵鍔(長三角形鐵)・弓筒頭金具・挂甲小札・馬具・釣針・針・ヤリガンナがある。特に、長三角形鐵の茎部に径1.5cm前後、幅1cmほどの鉄製金具が付けられている。この鉄製金具は、6世紀初頭に位置付けられる高崎市少林山台遺跡12号古墳例と同じである。また、馬具は、木芯鉄板張壺體の側板や鞍縫金具、鉄地金銅張の吊金具・辻金具・賣金具は鉄地銀張である。帯金具は鉄地金銅張と青銅製がある。一番特徴的なものは鉄地金銅張の花弁形杏葉である。杏葉は方形金具と花弁形金具が吊下金具で結合されたものである。花弁形金具は長さ約10cmで、中央がややくびれ、下部が丸みを帯びる花弁形を呈するなど6世紀前半の特徴を持っている。方形金具と花弁形金具の周囲には歛り彫りによる1条の線とその内側に波状列点文が彫られている。

装身具はヒスイ製勾玉・ガラス製勾玉・碧玉製管玉・水晶製丸玉・水晶製算盤玉・水晶製切子

玉、碧玉製豪玉、琥珀製丸玉、水晶製丸玉、金層ガラス三連玉、ガラス製丸玉、ガラス製小玉、垂飾付耳飾、空玉がある。このうち、金層ガラス三連玉は本例と埼玉県美里町白石久保1号墳の2例しか確認されていない。また、垂飾付耳飾は兵庫鏡と花鶴の部品で金銅製である。

滑石模造品は鏡、短甲、盾、鎧（三角形の無茎鎧）、劍、刀子、斧（有肩有袋鉄斧）、鎌、有孔円板、白玉などが出土している。

土器は形態からMT-15型式に捉えられる。大きく2種類に分類される。須恵器は高坏、坏蓋、坏身、疊、大甕、兵頭蓋で、軟質土器は坏身、坏蓋である。土器の胎土に網状母片岩粒や骨針を含むことから大半は藤岡産の土器である。特に、土師質の胎土で内外面を焼して黒色処理した軟質土器は片岩と骨針を含み藤岡市本郷埴輪窯跡の灰原から出土している軟質土器と同じである。また、須恵器長頸壺（第61図9）は胎土・焼成が前橋市前二子古墳出土品と類似している。

4 墓丘第1段平坦面と墳頂部、外堤から埴輪が出土している。埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・馬）、器財埴輪（家、盾）に分類される。普通円筒埴輪は、3条4段構成と4条5段構成の2種類がある。口縁部は単口縁と貼付口縁があり、透孔は円形が主体で、半円形や小円孔もみられる。最下段の凸帯については、段間の1/2以内に設定されているものがあり広義の低位置凸帯の範囲に入る。また、最下段の凸帯には「断続ナデ技法A」がみられ、最下段以外には、凸帯上下の一方を強く撫で付けることにより生じる痕跡があり、「断続ナデ技法A」とは異なる技法の検討が必要である。朝顔形埴輪は、円筒部が4条5段構成で3・4段目に半円形の透孔がある。人物埴輪は全身立像があり、その他白色・黒色塗装された人物も出土している。家形埴輪は一体成形の入母屋造である。盾は表面をⅡ字形に区画する形態で、内区上辺は弧状の鉤巻文で区画し、外区は綾巻文や鉤巻文を巡らせていている。6世紀初頭に位置付けられる富岡市一ノ宮4号古墳例に類似している。埴輪の大半は藤岡産埴輪で、結晶片岩を多量に含む猿田埴輪窯の一群と結晶片岩を含まないで、凝灰質砂岩や白色軽石を多量に含む本郷埴輪窯の一例がある。

5 出土した埴輪の分布をみると、前方部の前面から人物・馬が出土している。前方部から後円部北側にかけて人物・盾が出土し、後円部北側の11Aトレンチでは盾（183・184）が埴輪列として樹立していた。家は後円部墳頂の樹立で、石室入り口部には人物・盾が出土している。また、貼付口縁の普通円筒埴輪は前方部から後円部南側とくびれ部北側から出土している。これらのこどから、古墳北側を中心に形象・器財が樹立していた可能性が高いとみられる。

篠塚首塚古墳

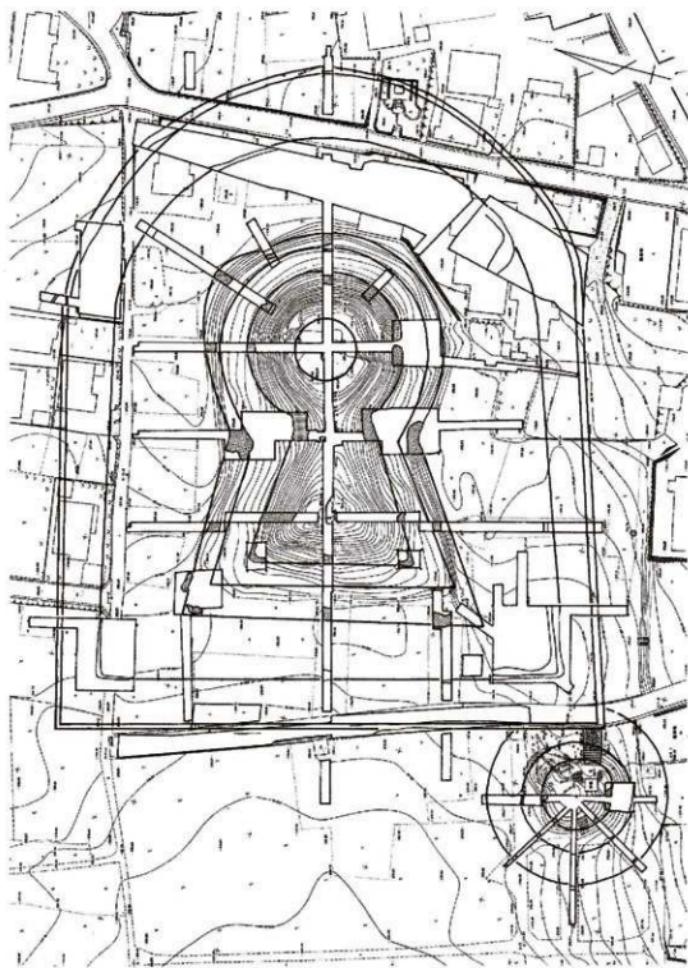
1 南傾斜に造られた2段築成の円墳である。墳丘は径約23m、高さ約3mで葺石が確認されている。周溝は幅6.5m～8mで、底面の標高は2トレンチで217.5m、石室裏面で218.5mと北側が高く南に傾斜している。墳丘第1段目は高さ80cm～85cmで、平坦面の幅は3.84m～4.2mあり、石

Ⅷ 成果と問題点

室入口の標高が218.25m、石室裏面が標高222mで平坦面も南に傾斜している。埋葬施設は横穴式石室で、談道部分しか確認できなかったが、談門幅88cm、談道長2.4m以上である。石室前は中世板碑群により改変されていたが、台形状の前庭が付設される。

2 墳丘・周溝から普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物・馬・唐・駄が出土している。埴輪の大半は藤間座埴輪で、特記すべきことは全身立像の部品が出土している。全トレンチから形象・器財形埴輪が出土している。特に石室西側の3・4トレンチから馬が出土している。6世紀後半に造られた古墳である。

(志村 哲)



第62図 葉瀬二子塚古墳・首塚古墳墳形想定図（1：1,000）

発掘調査報告書抄録

ふりがな やなせふたごづかこふん・やなせくびづかこふん	
書名	群馬二子塚古墳・聚瀬首塚古墳
副題名	市史編さん事業及び都市計画道路建設事業に伴う範囲確認測定及び埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大工原 輝・井上信也・志村 道・加藤二生・荒木勇次
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	〒379-0192 群馬県安中市安中一丁目23-13
発行年	西暦2003年(平成15年)3月20日

所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
群馬二子塚古墳	安中市聚瀬字塚原、八幡平市字鐵治村	102113	C-11	36°18'26"	138°51'43"	1次 1995.09.22~ 1995.12.12 1996.07.17~ 1996.07.22	800m ² 162m ²	市史編さん事業に伴う範囲確認測定
聚瀬首塚古墳	安中市聚瀬字塚原、八幡平			36°18'25"	138°51'42"	2次 1996.08.19~ 1996.11.22 3次 1997.05.16~ 1997.08.13	560m ² 745m ²	
		C-11東				2000.07.24~ 2000.08.30	1,600m ²	市道建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
群馬二子塚古墳	集落遺跡 古墳	縄文時代草創期・中期・後期 古墳時代後期	住居址1軒(中期) 埋設土器1基(後期) 古墳	有舌尖頭器・縄文土器 形象及び円筒埴輪・須恵器・玉類・石製模造品・武器類・銅小札・馬具類	初期横穴式石室の主体部をもつ前方後円墳
聚瀬首塚古墳	古墳	古墳時代後期 中世	古墳 板碑列	埴輪 板碑・骨藏器	横穴式石室の主体部をもつ円墳 埴丘を利用した中世墳墓(市指定史跡「聚瀬八幡平の首塚」)

築瀬二子塚古墳
築瀬首塚古墳

一市史編さん事業及び都市計画道路建設事業に
伴う範囲確認調査及び埋蔵文化財発掘調査報告書一

発行日 平成15年3月20日

編集・発行 安中市教育委員会
群馬県安中市安中一丁目23-13

印 刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元鏡社町67